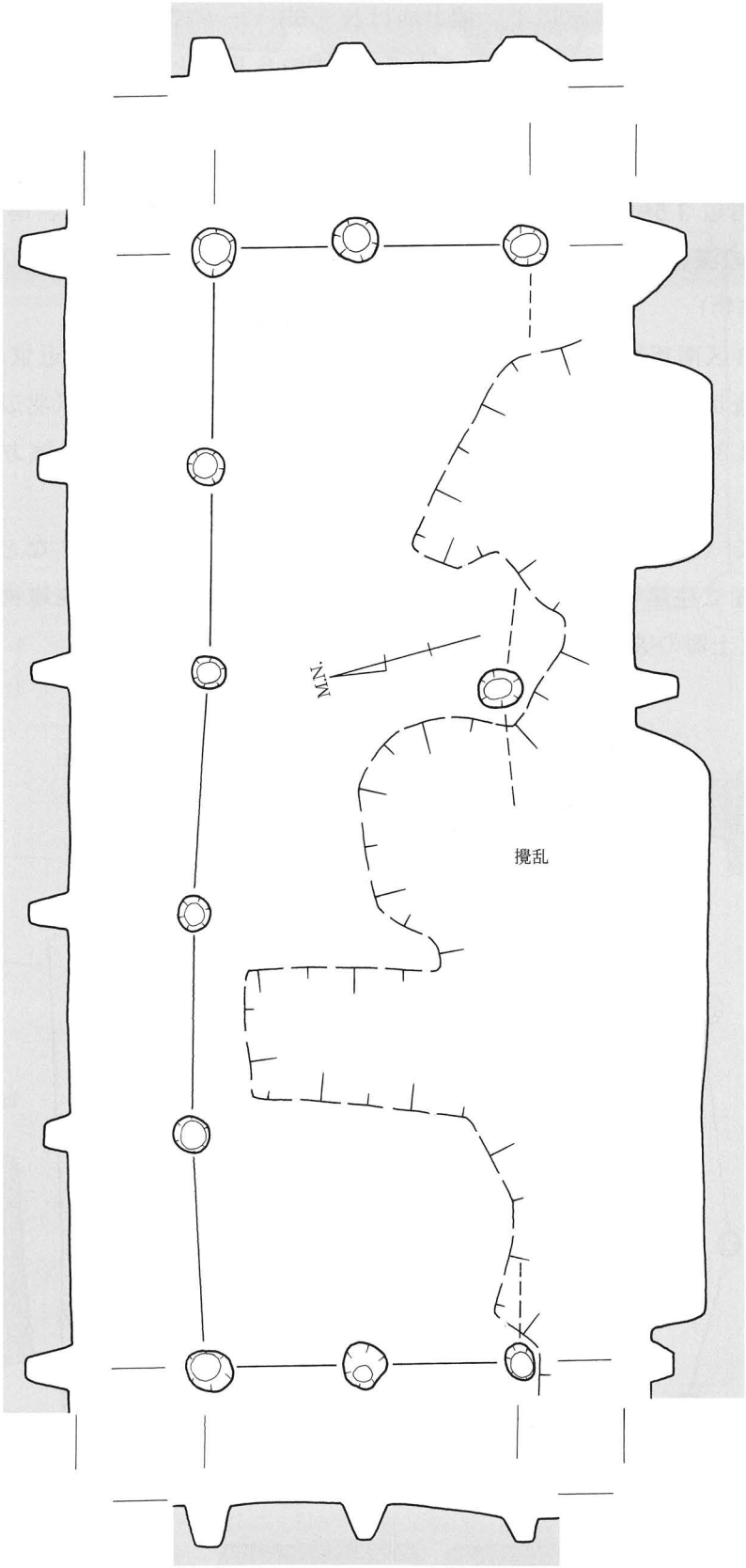


※標高はすべて8.500m

0　2m

第93図　SB5平面実測図（Scale：1/80）

（南辺 11.68m以上）、面積は 53 ㎡以上、棟方向はN－69°－Wである。柱穴も大きく、深さは９～52 ㎝、上端の径は最大のもので 98 ㎝である。前述のＳＢ３と軸を直行させて隣接する。

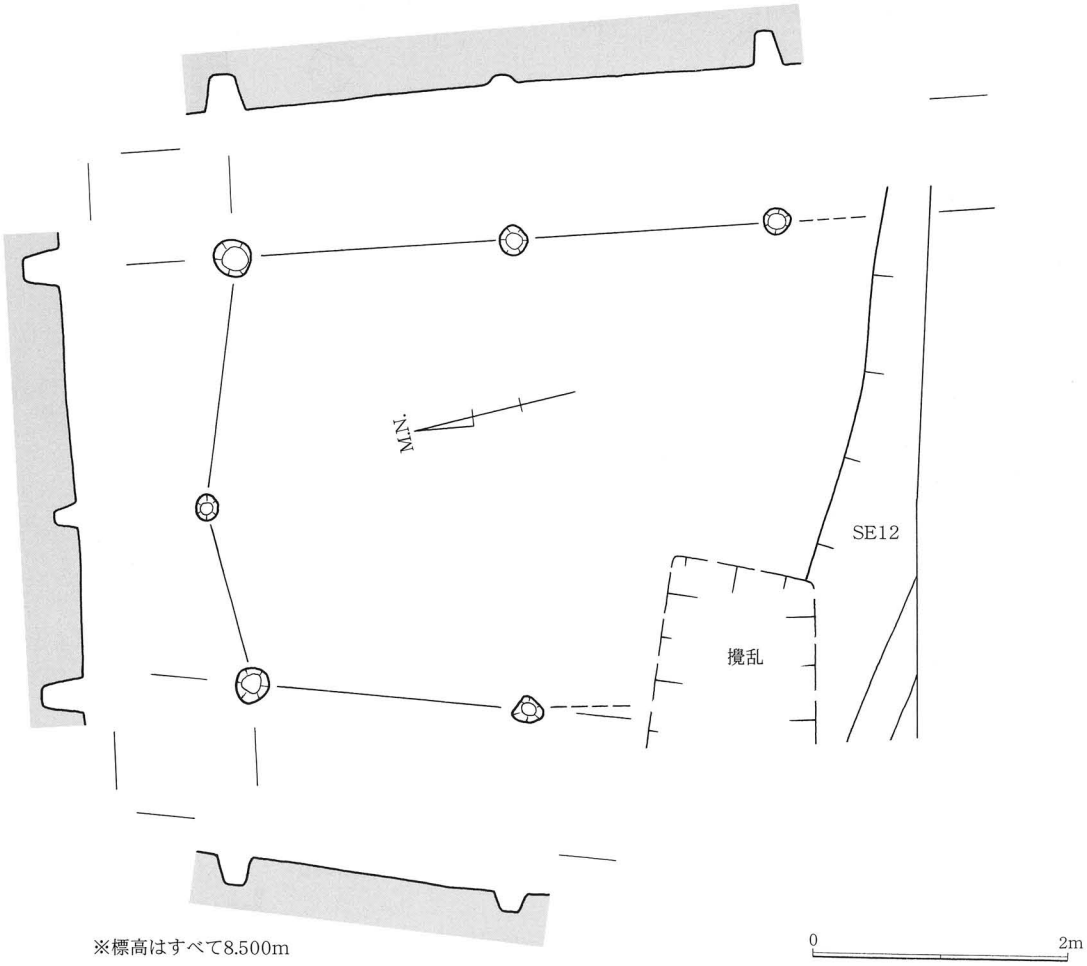
ＳＢ５（５号掘立柱建物）　（第 93 図）

調査区南端（Ｂ区南部）において検出された大型の掘立柱建物で、多くの部分が攪乱に切られる。桁行き２間（西辺 3.56m、東辺 3.52m）、梁行き５間（北辺 12.64m、南辺 12.64m）、面積は約 44 ㎡、柱穴の深さは 24～52 ㎝で、棟方向はN－75°－Wである。

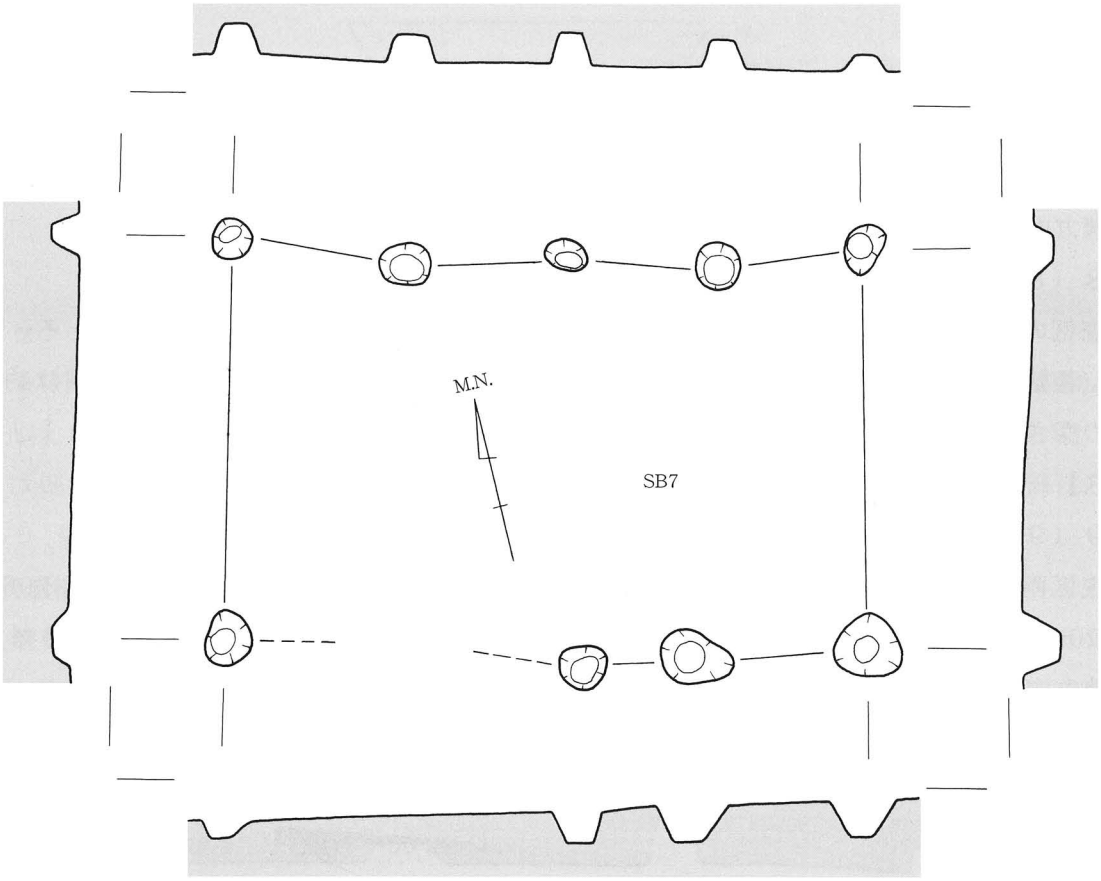
ＳＢ６（６号掘立柱建物）　（第 94 図）

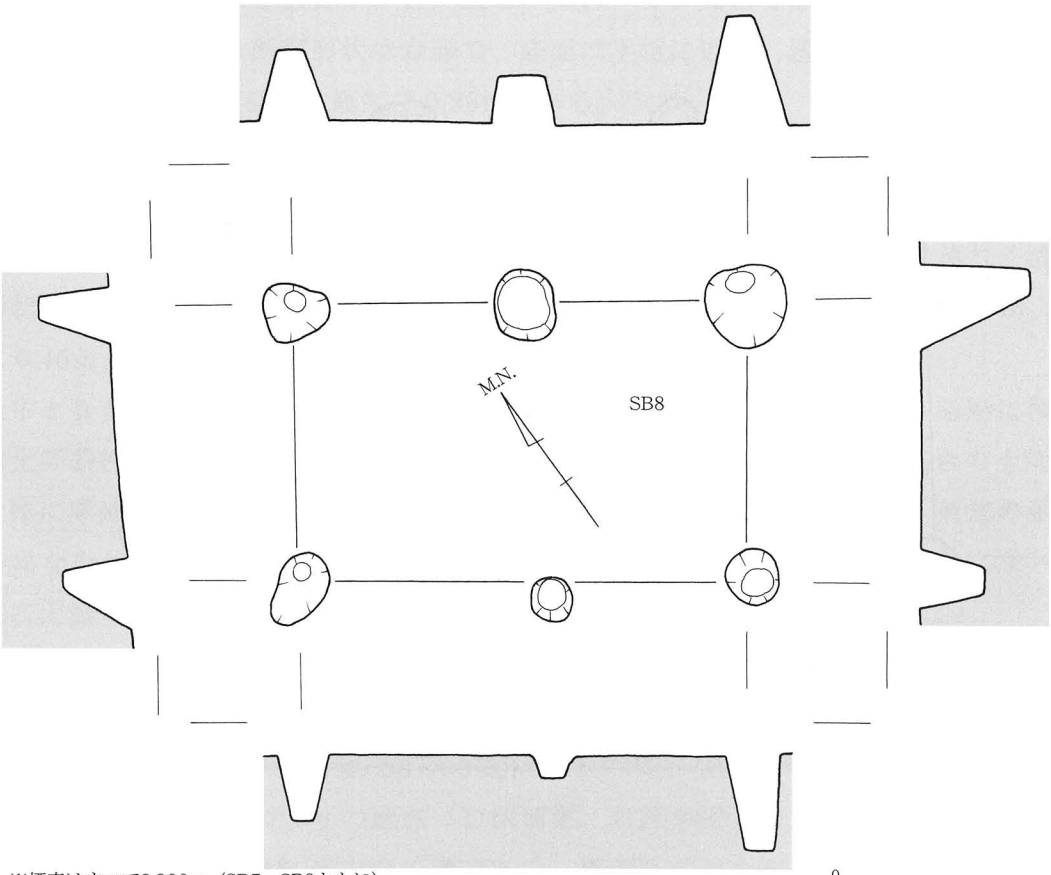
調査区の南西端（Ｂ区南西端）において検出された掘立柱建物で、南部は近世の溝ＳＥ12 に切られるとともに調査区外に出るため、全形は抽出できない。桁行き２間（北辺 3.41m）、梁行き２間以上（東辺 4.34m以上）、面積 15 ㎡以上、柱穴の深さは７～33 ㎝、棟方向はN－18°－E である。

柱穴が極端に小さく（上端径 17～30 ㎝）、棟持柱が極端に外方に張り出すなど、今回の調査において検出された掘立柱建物の中ではやや異質である。なお、この掘立柱建物に近接する２つのピットから、弥生土器の破片が出土している。



第94図　SB6平面実測図（Scale：1/60）





※標高はすべて8.300m（SB7、SB8ともに）

0　2m

第95図　SB7・8平面実測図（Scale：1/60）

【C区】

ＳＢ７（７号掘立柱建物）　（第95図）

調査区のほぼ中央（Ｃ区北東部）において検出された掘立柱建物で、桁行き１間（西辺3.24m、東辺3.21m）、梁行き（北辺5.05m、南辺5.13m）、面積は約17㎡、柱穴の深さ13～29㎝、棟方向はN－75°－Wである。

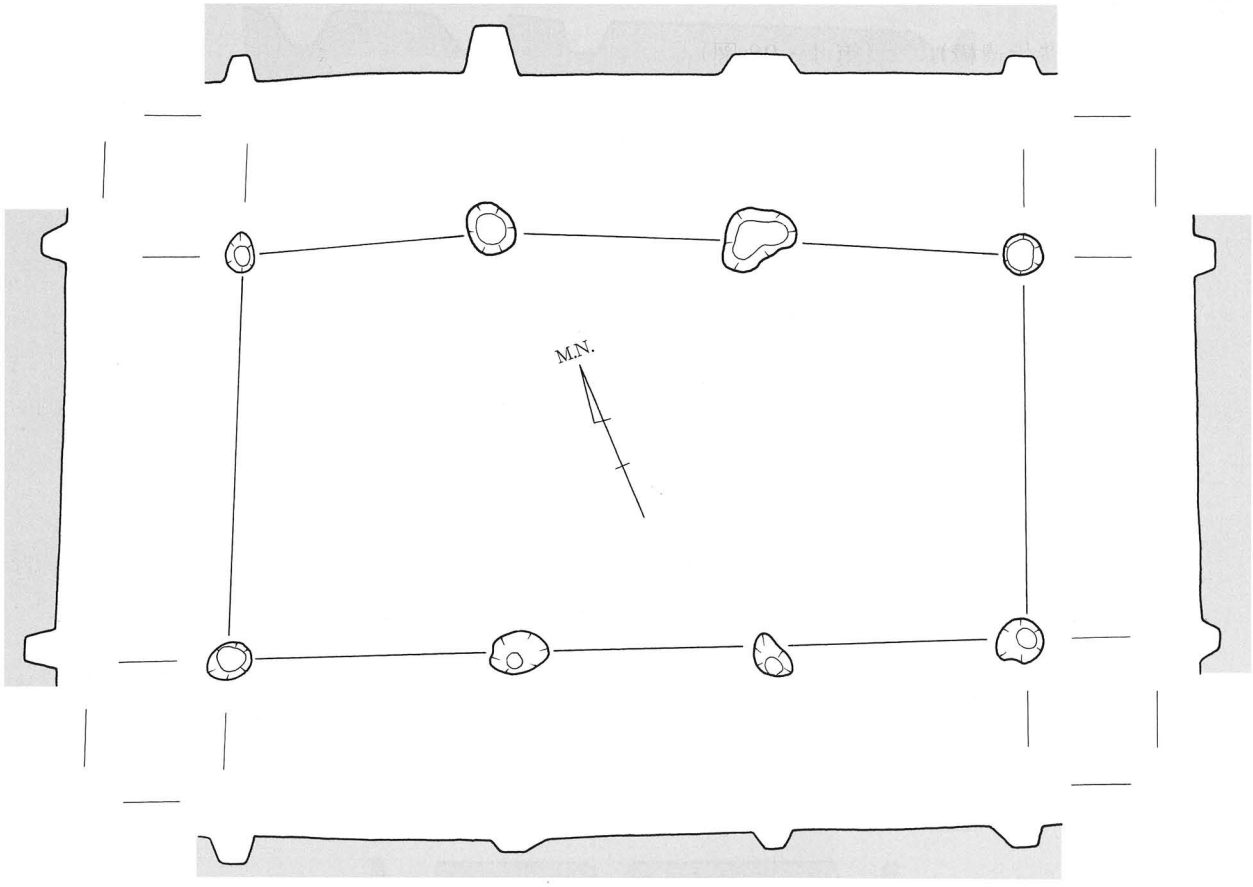
ＳＢ８（８号掘立柱建物）　（第95図）

調査区の中央やや西より（Ｃ区中央）において検出された小型の掘立柱建物である。桁行き１間（西辺1.89m、東辺2.40m）、梁行き２間（北辺3.57m、南辺3.65m）、面積は約８㎡、柱穴の深さは18～90㎝、棟方向はN－55°－Wである。

【F区】

ＳＢ９（９号掘立柱建物）　（第96図）

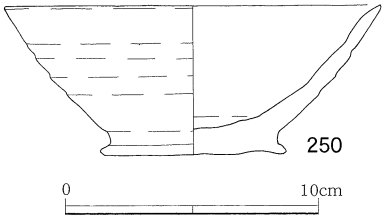
調査区南西部（Ｆ区中央）において検出された掘立柱建物で、桁行き１間（西辺3.06m、東辺3.20m）、梁行き３間（北辺6.39m、南辺6.24m）、面積は約20㎡、柱穴の深さは９～38㎝、棟方向はN－69°－Wである。



※標高はすべて8.300m

0　2m

第96図　SB9平面実測図（Scale：1/60）



第97図　ピット内出土遺物（Scale：1/3）

d．ピット（P）　（第97図）

ピット中より出土した古代に属する遺物は1点のみであり、このピットは掘立柱建物としては抽出しえなかった。

250は掘立柱建物ＳＢ９の南に近接するピットより出土した土師器椀である。底部は円盤高台であり、体部形状はゆるやかなカーブを描くことから10世紀前半に比定される。

e．溝状遺構（ＳＥ）

溝状遺構ＳＥ15とＳＥ16より、古代に属する遺物が検出された。また、ＳＥ14、ＳＥ17、ＳＥ18、ＳＥ19の４条においても、遺構埋土および構造的にＳＥ15・16と共通性があるため、古代の溝状遺構として一括し、以下に詳述する。

【Ｃ・Ｆ区】

ＳＥ14（14号溝状遺構）　（第４・98図）

調査区西部（Ｃ区中ほど西寄り、Ｆ区西端）において、大きく西方に弧を描きながら北－南方向に流れる溝である。断面形状は台形で、底面は平坦に近い。遺構上端の最大幅は0.61m、底面の最大幅は0.44m、深さは最大で0.26mである。

【Ｂ・Ｃ・Ｆ区】

ＳＥ15（15号溝状遺構）　（第４・98・99図）

調査区西部（Ｃ区中ほど西寄り、Ｆ区東部、Ｂ区南西端）を北－南方向に流れる溝である。断面形状は台形で、底面は平坦に近い。検出面における遺構上端の幅は最大1.09m、底面の最大幅は0.45m、深さは最大で0.35mである。

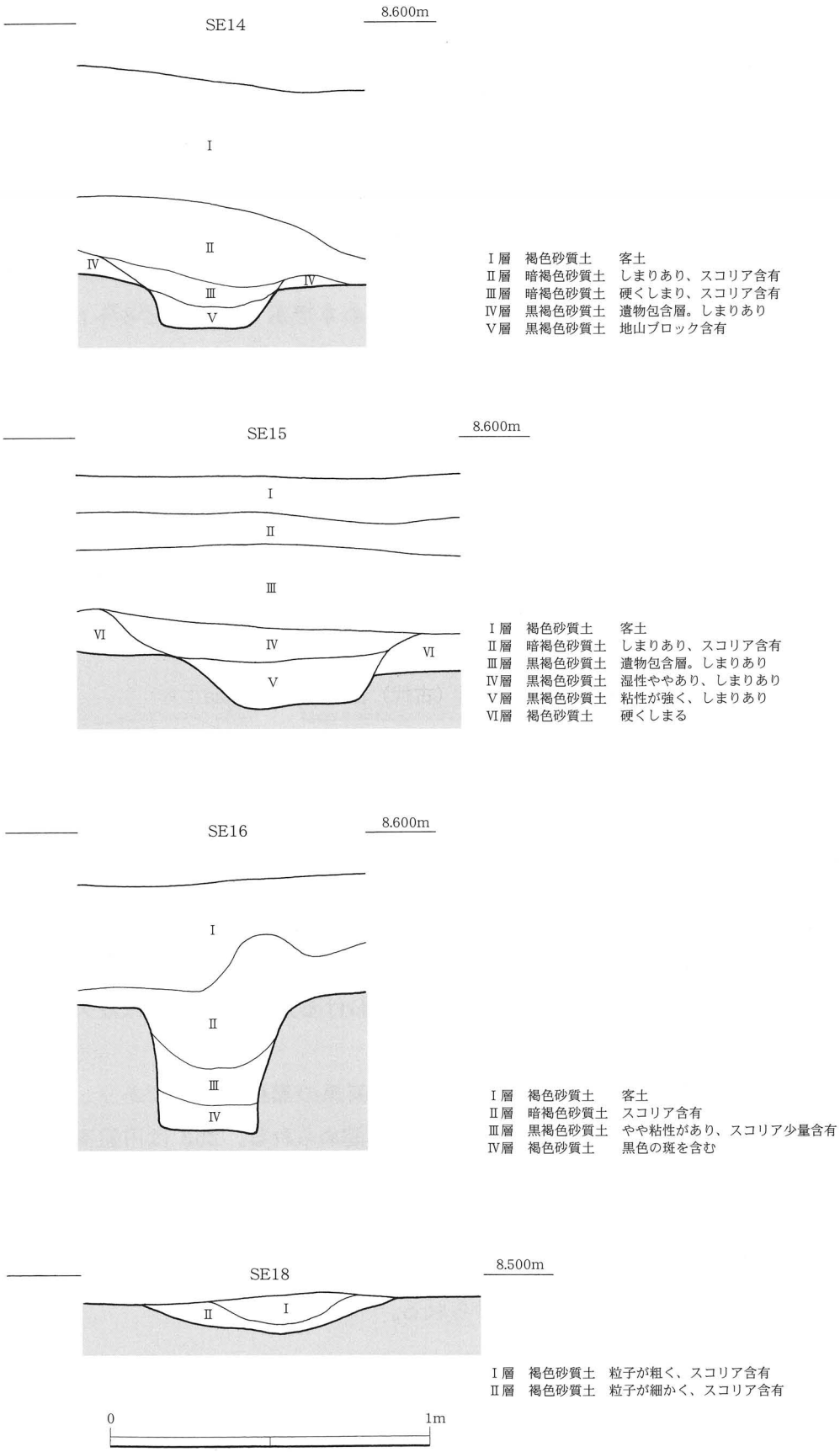
埋土中より多数の遺物が出土している。251は両黒の黒色土器椀であり、各所に稜が立つ。252は土師器椀であり、高台内面に花弁状の圧痕が認められる。253は円盤高台の土師器坏であり、全体に摩滅が激しい。254は須恵器長頸壷の口縁部および肩部である。肩部の張りがなく、やや特異な形状をしている。255は土錘、256は砥石である。256は斜め方向に深い抉りが入り、各所に擦り痕が見える。

251、253ともに９世紀後半に位置づけられる。

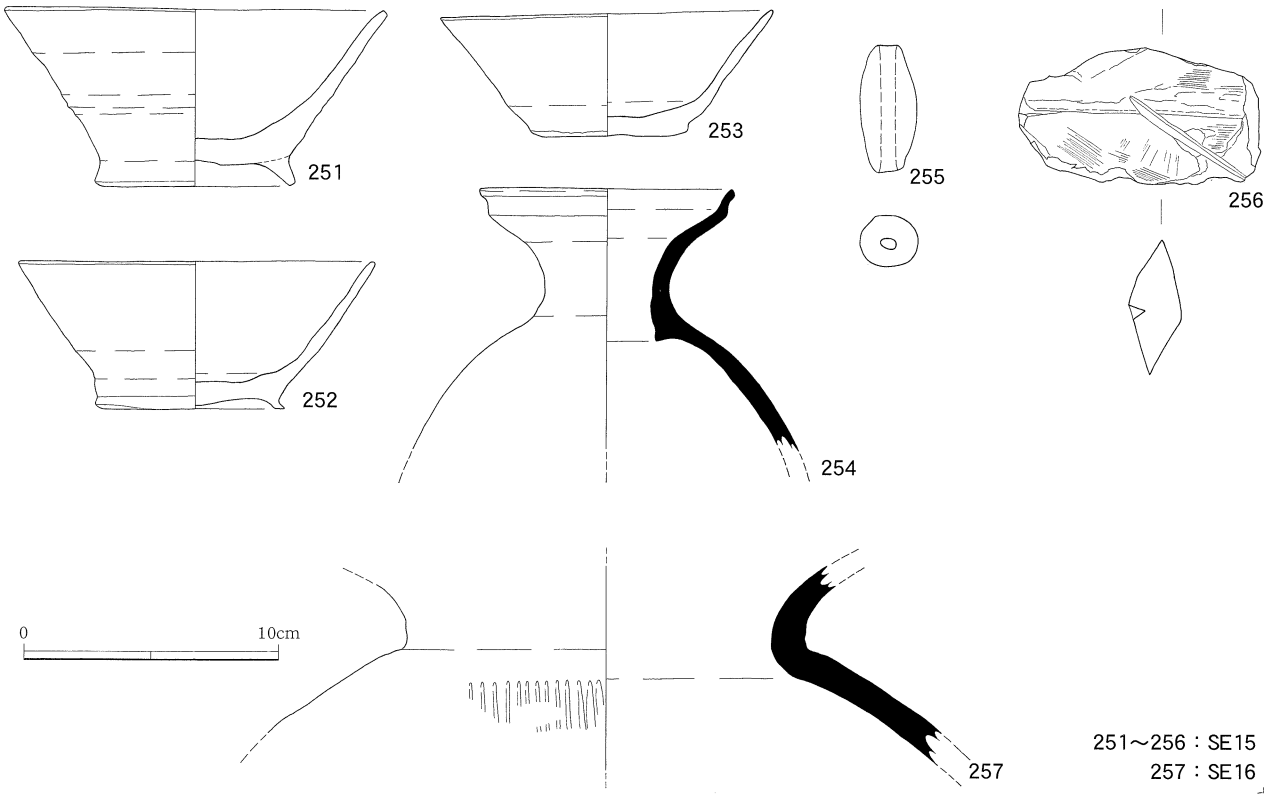
【Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｆ区】

ＳＥ16（16号溝状遺構）　（第４・98・99図）

調査区の中ほど、やや西よりの地点（Ｄ区西部、Ｃ区中ほど）より、ゆるく西方に曲がりながら（Ｂ区西端）流れる北－南方向の溝である。断面形状は台形で、底面は平坦に近い。北端（Ｄ区）においては上端最大幅2.86mと幅広であるが、他の地点においては上端最大幅0.91



第98図　SE14・15・16・18セクション図（Scale：1/20）



第99図　溝状遺構（古代）出土遺物（Scale：1/3）

mと、他の古代に属する溝と同じく細い。なお、北端においては二股状になる箇所があり（D区南端）、一方はＳＥ14ないしＳＥ15に連なるものかとも思われる。床面最大幅0.52m、深さは最大で0.43mである。埋土中より須恵器甕の頸部257が出土している。

【Ｆ区】

ＳＥ17（17号溝状遺構）　（第４図）

調査区西部（Ｆ区北東端）において、ＳＥ15の東に隣接して、わずか２mほど検出された溝である。上端最大幅0.54、底面最大幅0.27mで、深さは最大0.10mと極めて浅い。断面形状は台形で底面は平坦に近く、他の古代に属する溝に類似するが、出土遺物もなく、その位置づけは判然としない。隣接するＳＥ15に付随するものかと考えられる。

【Ｂ区】

ＳＥ18（18号溝状遺構）　（第４・98図）

調査区南部中ほど（Ｂ区南部中ほど）において検出された北西－南東方向の溝で、削平により11mほどで収束する。断面形状は不整形であり、他の古代に属する溝とは異質な存在である。あるいは他の古代に属する遺構より、やや新しい段階のものかと思われるが、遺構埋土の上半を霧島高原スコリア火山灰（10～13世紀降灰）を含有する土が占め、古代ないし中世の構築物であることは間違いない。遺構上端の最大幅は0.88m、深さは最大で0.35mである。

ＳＥ19（19号溝状遺構）　（第４図）

調査区南西端（Ｂ区南西端）において、近世の溝ＳＥ12の直下に検出された北西－南東方向の溝である。断面形状はやや不整形ではあるが台形に近く、床面も平坦に近い。上端最大幅0.50m、床面最大幅0.19m、深さは最大で0.35mである。

第４節　近世の遺構と遺物

近世に属するものとしては、溝状遺構が 12 条検出された。

ａ．溝状遺構（ＳＥ）

近世の溝状遺構はいずれも 10m ほどの間隔をおいてほぼ等間隔に配され、調査区北側（Ａ区）の４条（ＳＥ１～４）と、調査区南側（Ｂ・Ｃ・Ｆ区）の８条（ＳＥ５～12）は、それぞれ並列している。また調査区北側のＳＥ２～４においては東側が、調査区中ほどのＳＥ７・８においては西側がそれぞれ収束しているが、これは遺構本来の構造ではなく、後世、削平を受けたためと考えられる。

遺構埋土中には弥生土器、土師器、陶磁器など、多岐にわたる遺物が含有されていた。このことは、これら溝状遺構の多くが遺物包含層を掘り込んで構築されていることに起因するものであり、そのほとんどは溝の壁ないし底面（すなわち遺物包含層）から混ざり込んだものである。検出された遺物の中で、最も新しい時代のものは近世の陶磁器類であり、このことから、これらの溝状遺構は近世の構築物と判断できる。

この溝状遺構群は等間隔で並列することから、なんらかの区画割を目的としたものと考えられる。ただし出土した遺物（弥生土器、土師器、陶磁器の別によらず）は、そのほとんどが摩滅の激しい細片であること、また溝の壁面、床面から包含層に含まれる遺物が混ざり込んでいることから、攪拌を起こす水の流れのあったことが想定される。

【Ａ区】

ＳＥ１（１号溝状遺構）　（第４・101 図）

調査区北端において検出された東西方向に直線的に延びる溝である。検出面における遺構上端の最大幅は 2.69m、検出面から遺構底面までの深さは最大で 0.49m である。

ＳＥ２（２号溝状遺構）　（第４・102 図）

ＳＥ１の南に約７ｍ の間隔を空けて隣接する東西方向の溝である。遺構上端の幅は最大で 3.18m、深さは 0.32m（最大）、東端において収束する。

ＳＥ３（３号溝状遺構）　（第４図）

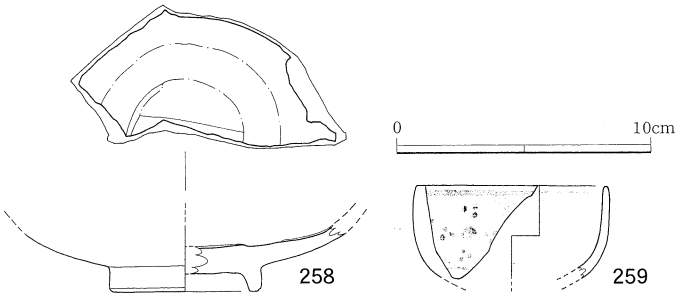
ＳＥ２の南に約８ｍ の間隔を空けて隣接する東西方向の溝であり、調査区（Ａ区）西壁より 14m ほどで収束する。上端の最大幅は 1.21m、深さは最大で 0.19m である。

ＳＥ４（４号溝状遺構）　（第４図）

ＳＥ３の南に約 10m の間隔を空けて隣接する東西方向の溝である。上端の最大幅は 1.55m、深さは最大 0.21m で、調査区（Ａ区）西壁より 12m ほどで収束する。

ＳＥ５（５号溝状遺構）　（第４図）

ＳＥ４の南に５ｍ ほどの間隔を空けて隣接する東西方向の溝であるが、前述のＳＥ１～４の流れに比べて、やや北西－南東方向に軸がふられており、後述のＳＥ６～12 と並列関係にある。遺構上端の最大幅は 1.69m、深さは最大で 0.19m である。なお、西側のＤ区、Ｅ区ではＳＥ５の続きが確認できていないが、これはＤ・Ｅ区における削平が他の調査区よりも深くまで及んでおり、すでに遺構が飛ばされてしまっているためである。



第100図　溝状遺構（近世）出土遺物（Scale：1/3）

【Ｂ・Ｃ区】

ＳＥ６（６号溝状遺構）　（第４・101図）

ＳＥ５の南に約８ｍの間隔を空けて隣接する東西方向の溝で、上端の最大幅 2.94m、深さは最大で 0.57mである。中世陶磁と思しき細片が出土している。

ＳＥ７（７号溝状遺構）　（第４・100・101図）

ＳＥ６の南に 10mほどの間隔を空けて隣接する東西方向の溝で、上端の最大幅は 3.05m、深さは最大で 0.35mである。西方において二股に別れているが、これは２本の溝が切り合っているのではなく、遺構上面が削平されたために、現状で二股状になっているものと考えられる。

埋土中より施釉陶器 258 が出土している。見込みには蛇の目釉剥ぎが施され、見込み中央には直線的に褐釉が施されている。

ＳＥ８（８号溝状遺構）　（第４・100・102図）

ＳＥ７の南に７～９ｍの間隔を空けて隣接する東西方向の溝で、調査区西端において収束している。遺構上端の最大幅は 2.84m、深さは最大で 0.36mである。

埋土中より出土した磁器片 259 は染付碗の一部で、外面、内面ともに施文が見られる。

【Ｂ・Ｆ区】

ＳＥ９（９号溝状遺構）　（第４・102図）

ＳＥ８の南に８ｍほどの間隔を空けて隣接する東西方向の溝で、調査区西端において極端に細くなりはするものの、収束はしない。上端の最大幅は 2.32m、深さは最大で 0.42mである。時期不明の陶磁細片が出土している。

ＳＥ10（10 号溝状遺構）　（第４・102図）

ＳＥ９の南に９ｍの間隔を空けて隣接する東西方向の溝で、後述のＳＥ11 を切って存在する。上端の最大幅は 1.72m、深さは最大で 0.32mである。

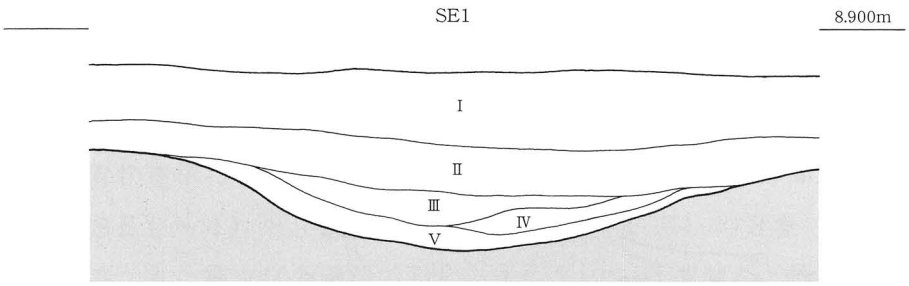
ＳＥ11（11 号溝状遺構）　（第４・102図）

先述のＳＥ10 に切られて存在する東西方向の溝である。上端の最大幅は推定で 1.6mほど、深さは最大で 0.34mである。近世の甕片が出土している。

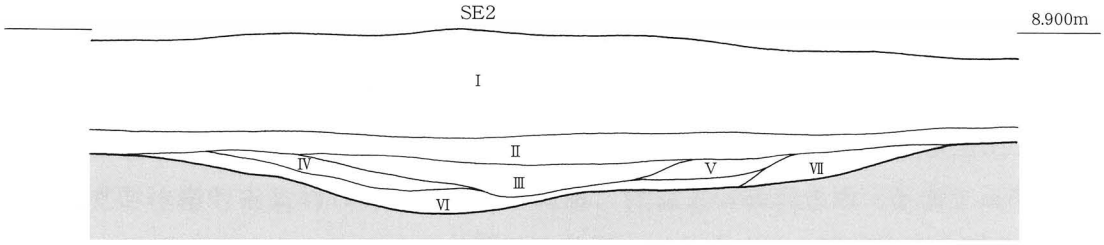
【Ｂ区】

ＳＥ12（12 号溝状遺構）　（第４・102図）

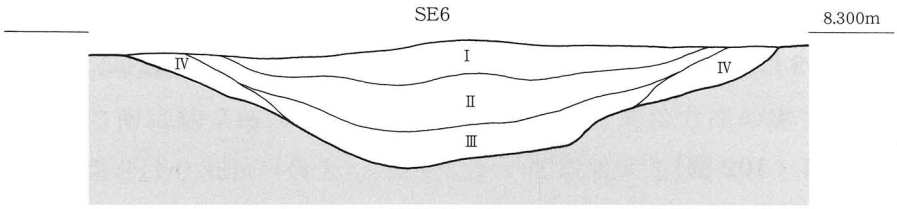
ＳＥ11 の南に８ｍの間隔を空けて隣接する東西方向の溝である。古代の溝ＳＥ19 の直上に作



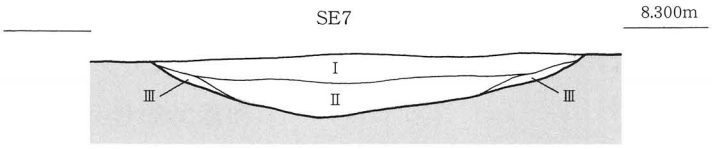
Ⅰ層　表土　　バラス
Ⅱ層　暗褐色砂質土　硬くしまる
Ⅲ層　暗褐色砂質土　Ⅱより砂質が強く、炭化物が含まれる
Ⅳ層　暗褐色砂質土　しまりが弱い
Ⅴ層　暗褐色砂質土　Ⅲに近似するが、炭化物等は含まれない



Ⅰ層　表土　　バラス
Ⅱ層　明褐色砂質土　硬くしまる
Ⅲ層　褐色砂質土　　しまりなく、やわらかい
Ⅳ層　褐色砂質土　　Ⅲに近似するが、白色粒子を含有する
Ⅴ層　明褐色砂質土　しまりはあるが、ややわらかい
Ⅵ層　褐色砂質土　　やわらかく、炭化物を含む
Ⅶ層　明褐色粘質土　やわらかい



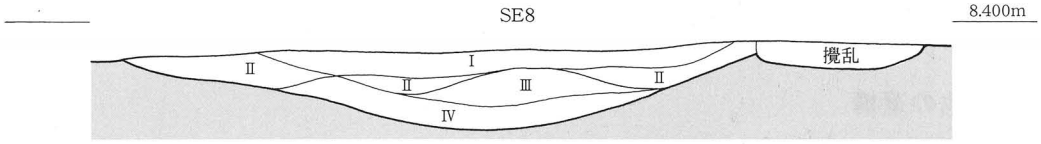
Ⅰ層　灰白色砂質土　　硬くしまり、砂礫を多量に含有
Ⅱ層　明黄褐色砂質土　しまりあり、砂礫を含有
Ⅲ層　暗灰色砂質土　　硬くしまり、砂礫を含有
Ⅳ層　暗灰色砂質土　　黒褐色の斑が入る



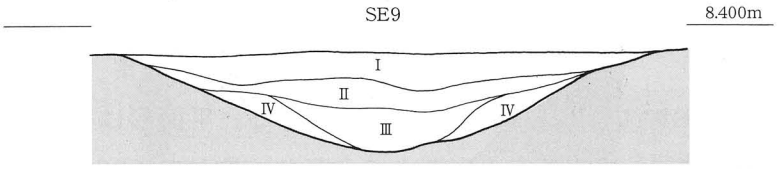
Ⅰ層　灰白色砂質土　　硬くしまり、砂礫を多量に含有
Ⅱ層　暗黄褐色砂質土　しまりあり、砂礫を含有
Ⅲ層　暗灰色砂質土　　橙色ブロックを含有

0　1m

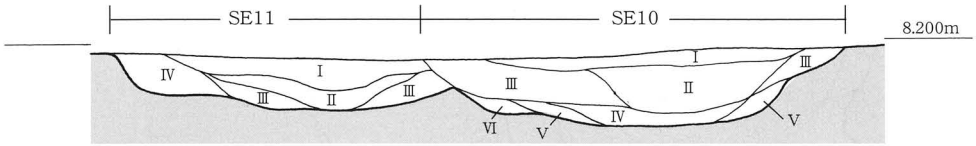
第101図　SE1・2・6・7セクション図（Scale：1/30）



Ⅰ層　明褐色砂質土　ややわらかく、小礫等を含有
Ⅱ層　明黄褐色砂質土　硬くしまり、砂礫を含有
Ⅲ層　褐色砂質土　硬くしまり、砂礫を含有
Ⅳ層　暗褐色砂質土　硬くしまり、砂礫を含有



Ⅰ層　明褐色砂質土　ややわらかく、小礫を含有
Ⅱ層　褐色砂質土　硬くしまり、砂礫を多量に含有
Ⅲ層　暗褐色砂質土　硬くしまり、小礫を含有
Ⅳ層　暗黄褐色砂質土　湿性ややあり

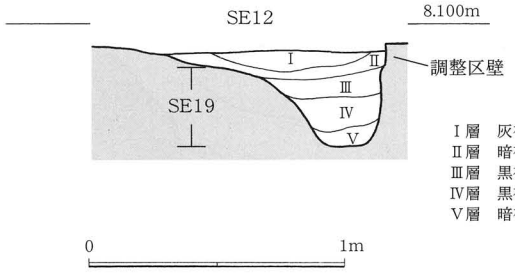


SE11

Ⅰ層　褐色砂質土　粒子が粗く、硬くしまる。橙色、白色粒子を含有
Ⅱ層　暗褐色砂質土　硬くしまり、粒子は細かい。橙色粒子含有
Ⅲ層　暗褐色砂質土　粒子が粗く、橙色、白色粒子を含有
Ⅳ層　暗褐色砂質土　Ⅲに近似するが、鉄分含有

SE10

Ⅰ層　灰白色砂質土　硬くしまり、小礫等を含有
Ⅱ層　灰色砂質土　硬くしまり、橙色ブロック含有
Ⅲ層　褐色砂質土　粒子が粗く、硬くしまる。橙色、白色粒子を含有
Ⅳ層　褐色砂質土　Ⅲに近似するが、やや湿性あり
Ⅴ層　褐色砂質土　Ⅲ・Ⅳに近似するが、治山ブロック含有
Ⅵ層　褐色砂質土　Ⅲ～Ⅴに近似するが、地山ブロックを多量に含有



Ⅰ層　灰褐色土　硬くしまる
Ⅱ層　暗褐色砂質土　しまりがあり、橙色粒子を含有
Ⅲ層　黒褐色土　橙色粒子を含有
Ⅳ層　黒褐色土　しまりがあり、橙色粒子を含有
Ⅴ層　暗褐色粘質土　砂礫を含有

第102図　SE8・9・10・11・12・19セクション図（Scale：1/30）

られており、上端の最大幅は1.98m、深さは最大で0.13mである。

第5節　その他の遺構

a．土坑

以下に述べる8基の土坑は、遺物の出土がなく、時期、性格ともに不明のものである。

【A区】

ＳＤ３（３号土坑）　（第104図）

調査区北東部（A区東端）において検出された土坑である。0.67mまで掘り下げを行ったが、以下は調査区外に出てしまうこととなるため、性格不明のまま掘り下げを断念した。

【B区】

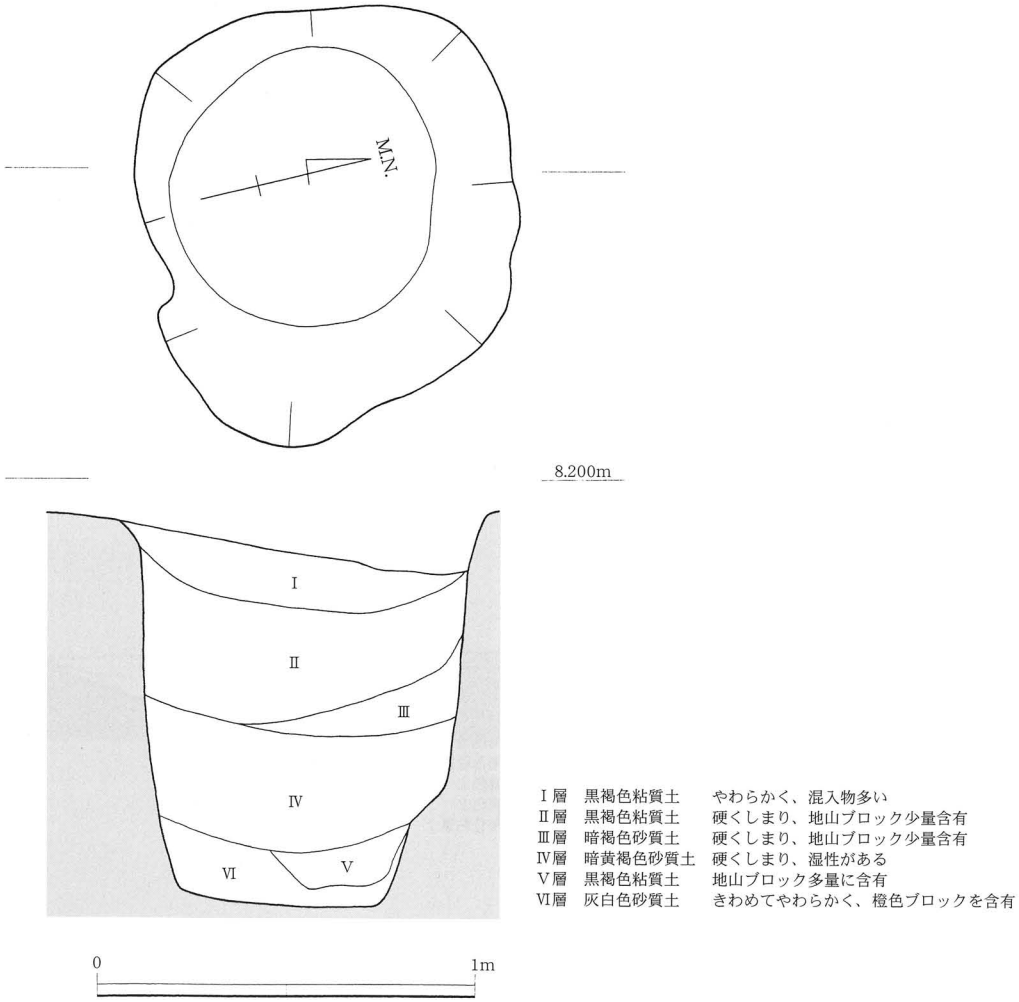
ＳＤ19（19号土坑）　（第103図）

調査区南東部（B区南東部）において、ＳＬ12を切って存在する。平面形は不整円形で、最大径は1.22m、底面の最大径は0.75m、検出面から底面までの深さは最大で0.96mである。

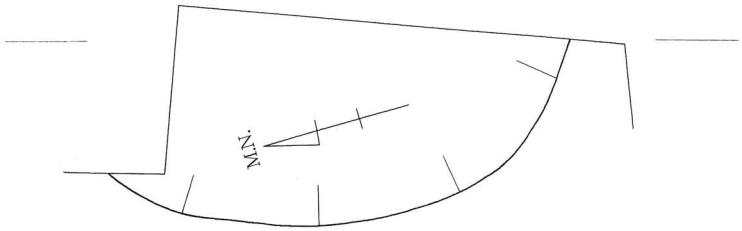
【C区】

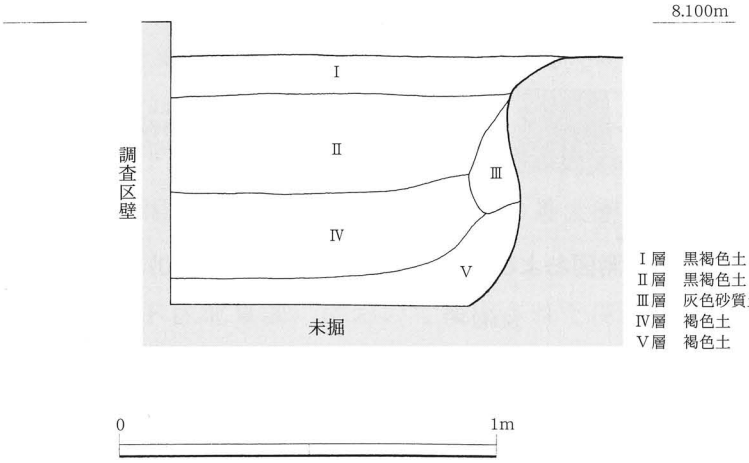
ＳＤ27（27号土坑）　（第105図）

調査区の中ほど（C区中ほど）において検出された不整形な円形プランの土坑で、上端の最



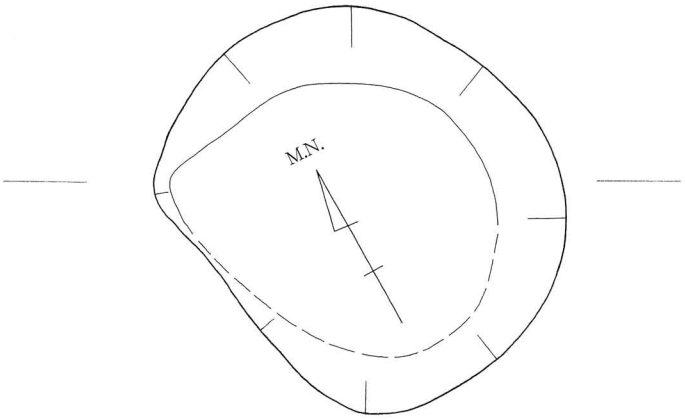
第103図　SD19平面実測図およびセクション図（Scale：1/20）

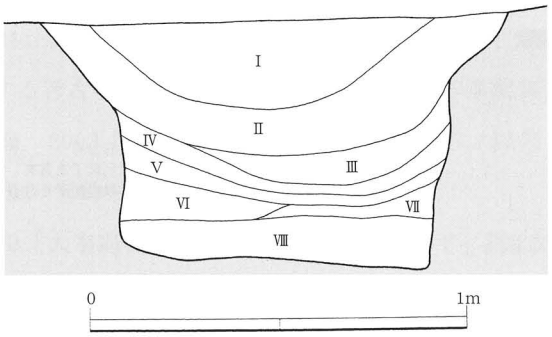




Ⅰ層　黒褐色土　硬くしまる
Ⅱ層　黒褐色土　やわらかく、灰色粒子を多量に含有
Ⅲ層　灰色砂質土　地山ブロック
Ⅳ層　褐色土　ややわらかく、橙色粒子を含有
Ⅴ層　褐色土　硬くしまり、灰色粒子を含有

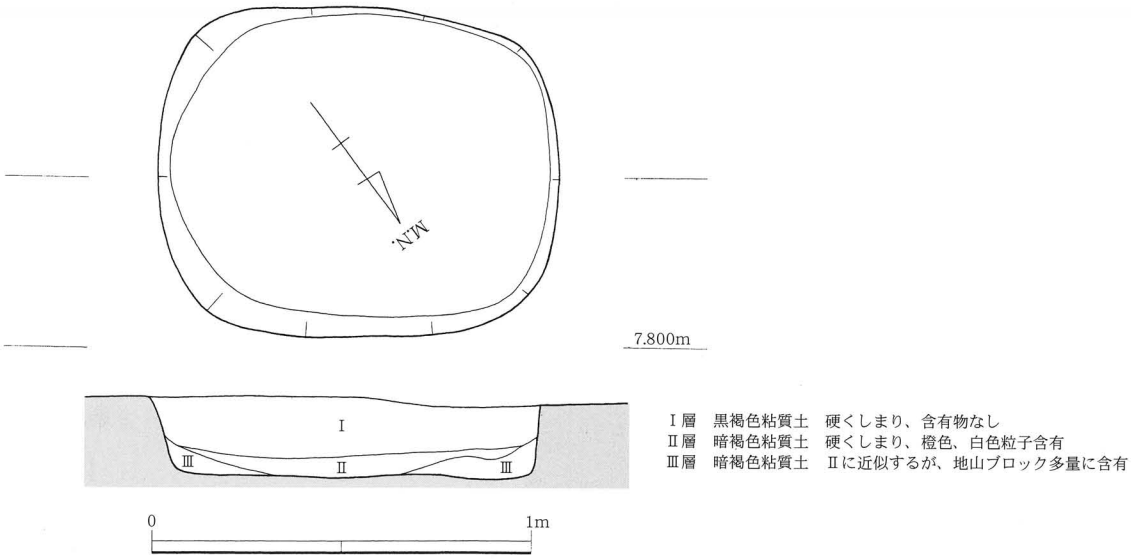
第104図　SD3平面実測図およびセクション図（Scale：1/20）



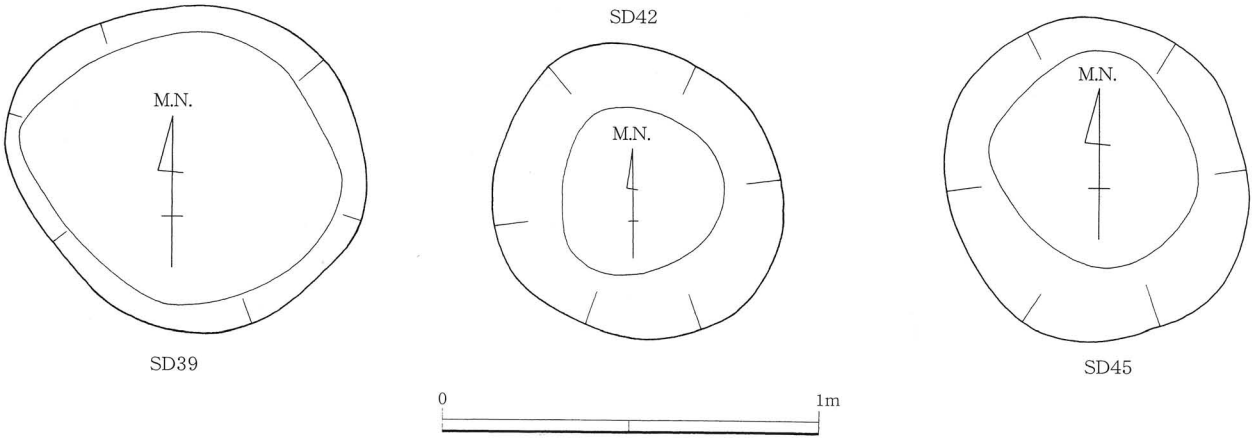


Ⅰ層　褐色砂質土　しまりあり
Ⅱ層　暗褐色砂質土　しまりあり
Ⅲ層　暗褐色粘質土　硬くしまり、鉄分を少量含有
Ⅳ層　灰褐色粘質土　硬くしまり、鉄分を多量に含有
Ⅴ層　黒褐色粘質土　硬くしまり、鉄分を少量含有
Ⅵ層　黒褐色砂質土　硬くしまり、鉄分含有
Ⅶ層　灰白色粘質土　硬くしまり、鉄分を多量に含有
Ⅷ層　灰褐色粘質土　硬くしまり、地山ブロック含有

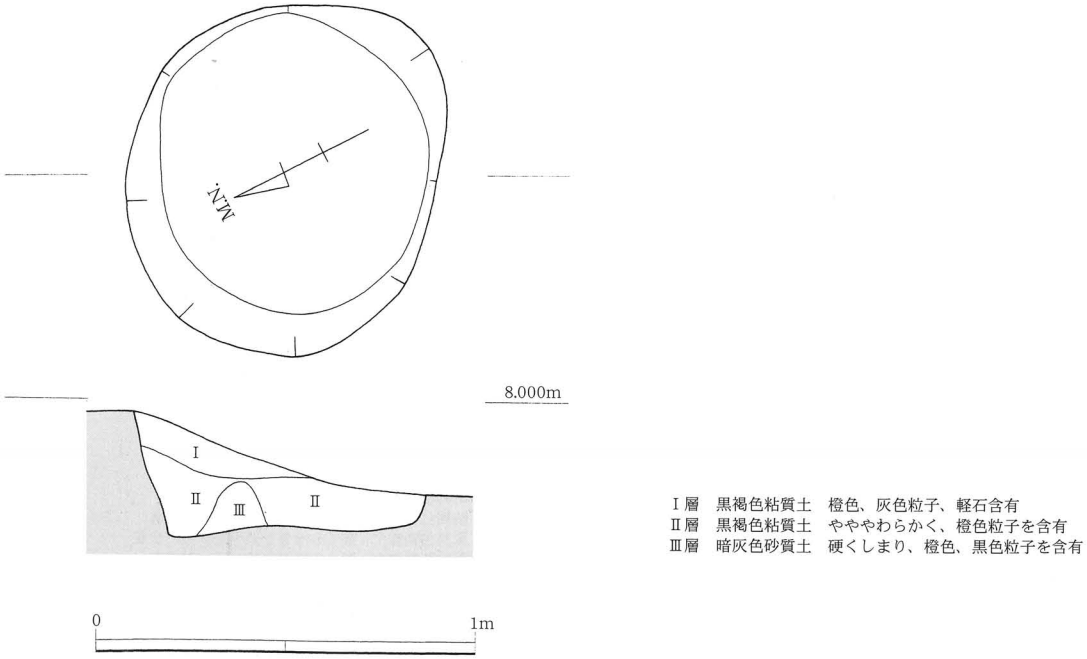
第105図　SD27平面実測図およびセクション図（Scale：1/20）



第106図　SD40平面実測図およびセクション図（Scale：1/20）



第107図　SD39・42・45平面実測図（Scale：1/20）



第108図　SD41平面実測図およびセクション図（Scale：1/20）

大径は 1.12m、底面の最大径は 0.90m、深さは最大で 0.67m である。

【F 区】

ＳＤ39（39 号土坑）　（第 107 図）

調査区南西部（F 区北端）において検出された不整形な円形の土坑である。上端の最大径は 1.08m、底面の最大径は 0.87m、深さは最大で 0.09m である。

ＳＤ40（40 号土坑）　（第 106 図）

調査区南西部（F 区北部）において、近世の溝 SE 9 に切られて存在する。平面形は長方形に近い楕円形で、上端の最大径は 1.13m、底面の最大径は 1.02m、深さは最大で 0.22m である。

ＳＤ41（41 号土坑）　（第 108 図）

調査区南西部（F 区北東部）において検出された円形プランの土坑で、近世の溝 SE 9 に削平されている。上端の最大径は 1.00m、底面の最大径は 0.78m、深さは最大で 0.32m である。

ＳＤ42（42 号土坑）　（第 107 図）

調査区南西部（F 区北東部）において検出された円形プランの土坑である。上端の最大径は 0.83m、底面の最大径は 0.46m である。

ＳＤ45（45 号土坑）　（第 107 図）

調査区南西端（F 区西端、中ほど）において古代の溝 SE14 に切られて検出された円形プランの土坑である。上端の最大径は 0.86m、底面の最大径は 0.58m である。

【参考文献】

石川悦男　1984「宮崎平野における弥生土器編年試案－素描（Mk. Ⅱ）」『宮崎考古』第 9 号

岡本武憲　1991「日向における古代末の土器―宮崎学園都市遺跡群を中心として―」『中近世土器の基礎研究』Ⅶ　日本中世土器研究会

岡本武憲　1995「Ⅱ各地の土器様相 13. 九州南部」『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社

堂込秀人　2003「竪穴建物」『季刊 考古学』第 85 号　雄山閣

鳥枝誠編　1999『東宮遺跡』宮崎市文化財調査報告書 第 39 集

寺沢　薫　1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡－国道 24 号線橿原バイパス建設に伴う遺跡調査報告』（Ⅱ）　奈良県立橿原考古学研究所

中島恒次郎　1992「大宰府における椀形態の変遷」『中近世土器の基礎研究』Ⅷ　日本中世土器研究会

松永幸寿　2004「日向における古式土師器の成立と展開－宮崎平野部を中心として－」『西南四国―九州間の交流に関する考古学的研究』平成 14 年度～平成 15 年度科学研究費補助金（基礎研究（C）（1））

南正覚雅士他編　2003『山崎上ノ原第 2 遺跡・山崎下ノ原第 1 遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第 79 集　宮崎県埋蔵文化財センター

山本信夫　1999「大宰府出土施釉陶器の編年について」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 82 集　国立歴史民俗博物館

表２　出土土器観察表（弥生時代）①

番号	器種	部位	出土位置		法量			調整		色調		胎土	備考	注記記号
			遺構	層位	口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
1	甕か	底部	包含層			5.7		ナデ		にぶい橙色	にぶい橙色	径2mm以下の砂粒を含有	底面に方形のくぼみ	SMAHG層
3	長胴壷か	口縁部～胴部	SL1		12.1					黄橙色	黄橙色	径2mm以下の砂粒を多量に含有	「安国寺式」	SMA03SL2 1
4	広口壷か	胴部～底部	SL1			5.8		タタキ(3条/cm)のち胴下部および上部ハケ(15条/cm)	ハケ(15条/cm)のちナデ	橙色	にぶい橙色	径2mm以下の砂粒を含有		SMA03SL2 20
5	甕	口縁部～胴部	SL2		20.5			ハケ(8条/cm)	ハケ(8条/cm)のち胴部下半ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	径3mm以下の砂粒を含有		SMA03SL1 28＋29
6	小型甕	完形	SL2		15.0	3.7	12.0	ミガキ	ハケのちナデ	橙色	橙色	径2mm以下の砂粒を含有	浅鉢の一種か	SMA03SL1 30＋45＋47
7	小型の甕か	完形	SL2		6.9	3.5	13.6	ハケ(10条/cm)	指ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	径2mm以下の砂粒を含有		SMA03SL1 Ⅲ
8	長頸壷か	胴部	SL2					ハケ(10条/cm)のちナデ	ハケ(10条/cm)のち胴部下半ナデ	浅黄橙色	褐灰色	径1mm以下の砂粒を含有		SMA03SL1 31＋32
9	広口壷	口縁部～底部	SL2		13.4	4.3	18.0	胴部下半タタキ(4条/cm)、他はハケ(16条/cm)	口縁部ハケ(8条/cm)、胴部下半ハケ(16条/cm)、ナデ、オサエ	明黄褐色	明黄褐色	径2mm以下の砂粒を含有		SMA03SL1 15＋50
10	小型鉢か	胴部～脚部	SL2			8.4				浅黄橙色	浅黄橙色	径1mm以下の砂粒を含有		SMA03SL1 14
11	壷	胴部～底部	SL2			6.1		ハケ(8条/cm)のちナデ	ハケ(8条/cm)のちナデ	橙色	橙色	径2mm以下の砂粒を含有		SMA03SL1 51＋52＋56
12	甕	口縁部～胴部	SL3		25.0			胴部タタキ(2条/cm)、口縁部ハケ(8条/cm)	口縁部ナデ、胴部ハケ(8条/cm)	橙色	橙色	径1mm以下の砂粒を含有	外面煤付着	SM2B04SL5 45＋48＋52
13	甕	口縁部～胴部	SL3		18.9			ハケ(11条/cm)	ハケ(11条/cm)	浅黄橙色	浅黄橙色	径4mm以下の砂礫を含有		SM2B04SL5 37
14	甕	口縁部～底部	SL3		22.4	5.6	25.6	タタキ(2条/cm)、口縁部ナデ	胴部上半ハケ(9条/cm)、下半指ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	径3mm以下の砂粒を多量に含有	外面煤付着	SM2B04SL5 11＋13＋14
15	甕	口縁部～胴部	SL3		18.9			ハケ(11条/cm)ののち胴部ナデ	ハケ(11条/cm)	にぶい橙色	橙色	径1mm以下の砂粒を含有		SM2B04SL5 7
16	甕	口縁部～胴部	SL3		18.5			ハケ(10条/cm)	ハケ(10条/cm)	浅黄橙色	浅黄橙色	径2mm以下の砂粒を含有		SM2B04SL5 35
17	甕	底部	SL3			4.4		ハケ(11条/cm)ののちナデ	ハケ(11条/cm)	にぶい橙色	橙色	径1mm以下の砂粒を含有	内面に赤色顔料付着	SM2B04SL5 74
18	浅鉢	口縁部～胴部	SL3		19.4			ミガキ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	径3mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SL5 20
19	浅鉢	口縁部～胴部	SL3		27.8			ミガキ	ナデおよびミガキ	橙色	橙色	径1mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SL5 22
20	浅鉢	口縁部～底部	SL3		25.1	3.8	10.7	ミガキおよびナデ	ミガキおよびナデ	橙色	橙色	径3mm以下の砂粒を多量に含有		SMB04SL5 47
21	小型二重口縁壷	口縁部	SL3		9.6			ハケ(12条/cm)		黄橙色	橙色	径2mm以下の砂粒および赤色粒子を多量に含有		SM2B04SL5 28
22	直口壷	口縁部～底部	SL3		10.1		11.1	胴部ミガキ、口縁部ハケ(13条/cm)およびナデ	胴部ナデ、口縁部および頸部ミガキ	橙色	橙色	径3mm以下の砂粒を含有		SM2B04SL5 16
23	直口壷	口縁部～胴部	SL3		10.2			胴部ミガキ、口縁部指ナデ	口縁部ハケ(16条/cm)	橙色	にぶい黄橙色	径3mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SL5 21
24	長頸壷	胴部	SL3					ハケ(9条/cm)	ハケ(9条/cm)	橙色	にぶい橙色	径1mm以下の砂粒を含有		SM2B04SL5 49
25	壷	胴部～底部	SL3			6.4		板状工具によるナデ	ハケ(7条/cm)	にぶい橙色	暗黄褐色	径1mm以下の砂粒を含有		SM2B04SL5 36
26	壷	胴部～底部	SL3			7.4		ハケ(7条/cm)	ハケ(7条/cm)上からミガキ	明赤褐色	明赤褐色	径2mm以下の砂粒を含有		SM2B04SL5
27	壷か	胴部か	SL3					ハケ(11条/cm)		橙色	暗褐色	径2mm以下の砂粒を含有	内面に線刻	SM2B04SL5
28	小型深鉢か	胴部～底部	SL3			2.1				浅黄橙色	橙色	径1mm以下の砂粒を含有	極小サイズ	SM2B04SL5
29	高坏	口縁部～脚部	SL3					ミガキ	ナデ	にぶい黄橙色	黄橙色	径2mm以下の砂粒を多量に含有	4方向円形透かし孔	SM2B04SL5 32
30	器台	口縁部～脚部	SL3		24.0			ナデ	ナデ　口縁部ハケ(11条/cm)上からナデ	黄橙色	橙色	径2mm以下の砂粒を含有	円形透かし孔2方向	SM2B04SL5 20
31	甕	口縁部～胴部	SL4		24.0			タタキ(3条/cm)、口縁部ナデ	ナデ	褐色	淡褐色	径5mm以下の砂礫を多量に含有		SM2B04SL4 26
32	甕	口縁部～胴部	SL4		22.3			タタキおよびナデ	ナデ	橙色	黄橙色	径3mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SL3・4 8
33	甕	底部	SL4			5.3		タタキ(底部付近においてはその上から指オサエ)	指ナデ	にぶい黄橙色	褐色	径2mm以下の砂粒を多量に含有		SM2BSL3・4 16
34	甕	底部	SL4			5.5		タタキ(3条/cm)	ナデ	淡褐色	褐色	径4mm以下の砂礫を多量に含有		SM2B04SL4 1
35	短頸壷	口縁部～底部	SL4		10.1	5.7	28.9	口縁部指オサエ、胴部上半ハケ(10条/cm)、胴部下半板状工具によるナデ	ハケ(10条/cm)	明褐色	淡褐色	径3mm以下の砂粒を含有		SM2B04SL4 47＋69＋71＋SM2B04SL3・4

表３　出土土器観察表（弥生時代）②

番号	器種	部位	出土位置		法量			調整		色調		胎土	備考	注記記号
			遺構	層位	口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
36	短頸壷	ほぼ完形	SL4		9.1	3.5	24.1	タタキ(3条/cm)。口縁部指オサエ	オサエおよび板状工具によるナデ	明黄褐色	明黄褐色	径2mm以下の砂粒を含有	一部、外面に赤色顔料付着	SM2B04SL3・4 28
37	長胴壷か	底部	SL4			3.2		タタキ	板状工具によるナデ	明褐色	褐色	径3mm以下の白色、赤色粒子を含有		SM2B04SL4
38	小型長頸壷	口縁部～底部	SL4		3.8		9.4	ハケ(10条/cm)ののちミガキ	胴部下半ハケ(10条/cm)、胴部上半ナデおよび指オサエ、口縁部ナデ	淡褐色	淡褐色	径1mm以下の砂粒を含有　精良		SM2B04SL4 38
39	二重口縁壷	口縁部	SL4		21.0			ハケ(6条/cm)ののち一部ナデ	ハケ(10条/cm)ののち一部ナデ	褐色	淡褐色	径2mm以下の砂粒を含有	第2口縁に波状文頸部にキザミ付突帯	SM2B04SL4 48＋54
40	小型壷	胴部～底部	SL4			(2.8)		ハケ(10条/cm)ののち一部ナデ	ハケ(10条/cm)ののち一部ナデ	褐色	褐色	径3mm以下の砂粒を多量に含有		SM2BSL4　35
41	深鉢	完形	SL4		9.0	3.6	8.5	ハケ(10条/cm)ののちナデ	ナデ	浅黄橙色	にぶい黄橙色	径3mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SL4・5 3
42	浅鉢	口縁部～胴部	SL4		25.2			ミガキか	ナデか	橙色	浅黄橙色	径2mm以下の砂粒、赤色粒子を多量に含有		SM2B04SL3・4 11
43	浅鉢	完形	SL4		22.4	4.4	8.1	ナデ	ハケ(11条/cm)	浅黄橙色	浅黄橙色	径1mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SL3・4 18
44	浅鉢	口縁部～底部	SL4		22.1	4.4	9.0	ハケ(11条/cm)のちナデ	ハケ(11条/cm)	橙色	浅黄橙色	径1mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SL3・4 52
46	壷	口縁部～胴部	SL5		12.6			ナデ	ナデ	橙色	橙色	径2mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SL4・8＋SM2B04SL8 1＋SM2B04表＋SM2B04SL 4・8　1
47	甕	完形	SL5		12.7	3.6	10.4	ナデ	ナデ	橙色	にぶい黄橙色	径1mm以下の赤色粒子を多量に含有		SM2B04SL4＋SM2B04SL4・8
48	浅鉢	胴部～底部	SL5			5.4		ミガキ	ミガキ	にぶい黄橙色	橙色	径3mm以下の砂粒を含有		SM2B04SL4・8 4
49	浅鉢	口縁部～底部	SL5		15.0	4.1	9.9	ナデか	ハケ(8条/cm)	橙色	橙色	径1mm以下の砂粒を含有		SM2B04SL4＋SM2B04SL4・8 7
50	壷	胴部～底部	SL5			6.4		ハケ(8条/cm)	ハケ(8条/cm)	にぶい赤褐色	褐色	径2mm以下の砂粒を含有		SM2B04SL8　9
51	甕	口縁部	SL6		29.2			ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	径1mm以下の砂粒を含有		SM2B04SL3
52	甕	口縁部	SL6		27.2			胴部ハケ(9条/cm)、口縁部ナデ	ハケ(9条/cm)上からナデ	にぶい橙色	橙色	径1mm以下の砂粒を含有		SM2B04SL3　2 3
53	甕	口縁部	SL6		25.2			ナデか	口縁部ハケ(8条/cm)、胴部ナデ	橙色	黄橙色	径3mm以下の砂粒および赤色粒子を多量に含有		SM2B04SL2・3 2
54	壷	胴部～底部	SL6			5.0		板状工具によるナデ		橙色	にぶい橙色	径3mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SL3　4 3
55	鉢	口縁部～底部	SL6		12.9	3.2	9.5	ミガキ	ハケ(10条/cm)ののちミガキ	にぶい橙色	橙色	径1mm程度の赤色粒子や金雲母を含有		SM2B04SL3　5 3
56	深鉢か	胴部～底部	SL6			5.5		ミガキ	指オサエおよび指ナデ	明赤褐色	橙色	径2mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SL3 108
58	甕	口縁部	SL7					ナデ	ナデ	橙色	にぶい橙色	径2mm以下の砂粒を含有	口唇部および突帯に列点文	SM2B04SL9　1
59	甕	底部	SL7			4.5		タタキ(3条/cm)	指ナデ	赤褐色	赤褐色	径2mm以下の砂粒を含有		
60	短頸壷	口縁部～底部	SL7		12.3			ハケののちナデ	ハケ(9条/cm)	明赤褐色	にぶい褐色	径2mm以下の砂粒を含有		SM2B04SL9　2 ＋E
61	甕	口縁部～胴部	SL8		18.3			ハケ(10条/cm)およびナデ	ナデ	黄橙色	にぶい黄橙色	径2mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SL7 15
62	甕	底部	SL8			6.5			指ナデ	橙色	褐色	径1mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SL7 18
63	高坏	脚柱部	SL8					ミガキ	ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	径1mm以下の砂粒を含有		SM2B04SL7 33
64	壷	胴部～底部	SL8					ハケ(10条/cm)の上からナデ	板状工具によるナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	径2mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SLX 11
66	甕	口縁部～胴部	SL9		21.4			タタキ(3条/cm)、口縁部ナデ	ハケ(7条/cm)、口縁部ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	径3mm以下の砂粒を含有		SM2B04SL6 20
67	甕	口縁部～胴部	SL9		20.1			ハケ(7条/cm)ののち口縁部ナデ	ハケ(7条/cm)ののち口縁部ナデ	橙色	にぶい赤褐色	径3mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SL6 27
68	甕	底部	SL9			5.2		タタキ(4条/cm)	指ナデ	にぶい橙色	褐色	径1mm以下の砂粒を含有		SM2B04SLX
69	深鉢か	底部	SL9			4.6		指ナデ	ハケ(13条/cm)	浅黄橙色	暗褐色	径1mm以下の砂粒を含有		SM2B04SLX 13
70	高坏	脚柱部	SL9					ミガキ	ナデ	橙色	褐色	径1mm以下の砂粒を含有		SM2B04SL6 29
71	脚付鉢か	脚部	SL9			12.0		ナデか	ナデか	橙色	橙色	径3mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SL7　1
72	浅鉢	口縁部～底部	SL9		14.3	4.4	7.2			橙色	橙色	径2mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SL6・7 3
73	小型壷	胴部～底部	SL9					ナデか	指オサエおよびナデか	にぶい橙色	橙色	径2mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SL6 12

表４　出土土器観察表（弥生時代）③

番号	器種	部位	出土位置		法量			調整		色調		胎土	備考	注記記号
			遺構	層位	口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
74	小型壷	胴部～底部	SL9					指ナデおよび指オサエ	指ナデおよび指オサエ	にぶい橙色	にぶい褐色	径2mm以下の砂粒を含有		SM2B04SL6 10
75	甕	完形	SL10		16.8	3.9	23.7	口縁部、底部ナデ、胴部タタキ(4条/cm)	板状工具によるナデ	にぶい橙色	橙色	径3mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SL2 60
76	甕	口縁部～胴部	SL10		28.7			ナデ	板上工具によるナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	径3mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SL2 5 4＋70
77	甕	底部	SL10			5.7		タタキ(4条/cm)	ナデ	橙色	暗褐色	径2mm以下の砂粒を含有		SM2B04SL2 64
78	二重口縁壷	口縁部	SL10		17.7			ナデ	ナデ	にぶい橙色	橙色	径1mm以下の赤色粒子を多量に含有	外面に波状文及び竹管文	SM2B04SL2 3
79	壷	口縁部	SL10		18.4			板状工具によるナデ	ナデ	橙色	黄橙色	径2mm以下の砂粒を含有	外面に波状文	SM2B04SL2 59
80	鉢	口縁部～胴部	SL10		12.9			ナデ	ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	径2mm以下の砂粒を含有		SM2B04SL2 39
82	壷	胴部	SL11					ハケののちナデか	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい橙色	径5mm以下の砂粒を多量に含有	83と同一個体か	SM2B04SL1 34＋35
83	壷	胴部	SL11					ナデ	ハケ(10条/cm)	にぶい黄橙色	にぶい橙色	径5mm以下の砂粒を多量に含有	82と同一個体か	SM2B04SL1 52＋SM2B04SL 2 14＋26＋62 ＋73
84	甕	口縁部	SL11		17.6			口縁部ナデ、胴部タタキ(4条/cm)	ハケ(8条/cm)ののちナデ	橙色	橙色	径2mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SL1
85	甕	底部	SL11			6.5		タタキ(6条/cm)	ハケ(10条/cm)の上から指ナデ	にぶい黄橙色	にぶい橙色	径1mm以下の砂粒を含有	底面にもタタキ	SM2B04SL1 12
86	甕か	底部	SL11			3.2		ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	径3mm以下の砂粒を含有	極めて小型	SM2B04SL1・2 5
87	高坏	坏部	SL11		30.3			ハケ(10条/cm)の上からミガキ	ミガキ	橙色	明赤褐色	径2mm以下の砂粒を含有		SM2B04SL2 63＋SM2B04SL 1・2 2＋3＋5
88	高坏	脚部	SL11			21.1		ミガキ	ハケ(12条/cm)	明赤褐色	明赤褐色	径1mm以下の砂粒を含有　精良		SM2B04SL1 41
89	甕	口縁部	SL12		20.4			タタキ(5条/cm)	ナデ	橙色	明黄褐色	径2mm以下の砂粒を含有		SM2B04SL11 16＋SM2B04SL 11 13
90	甕	底部	SL12			5.4		ナデ、指オサエ	ハケ(10条/cm)	にぶい褐色	にぶい褐色	径2mm以下の砂粒を含有		SM2B04SL12
91	小型壷	胴部～底部	SL12					ミガキ	ハケ(10条/cm)ののちナデ	橙色	橙色	径2mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SL11 99
92	直口壷	口縁部～底部	SL12		15.0	4.5	13.4	ミガキ	ハケ(9条/cm)	橙色	橙色	径1mm以下の砂粒を含有		SM2B04SL11 31＋32＋35＋3 6
93	壷	口縁部～底部	SL12		—	—	—	不明	不明	褐灰色	にぶい橙色		焼成時に押しつぶされ、ゆがみ大きい	SM2B04SL11 20
84	深鉢	ほぼ完形	SL12		12.4	5.0	12.9	ハケ(8条/cm)	口縁部ハケ(8条/cm)、胴部指ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	径1mm以下の砂粒を多量に含有　精良		SM2B04SL11 2＋SM2B04SL 11 110
95	器台	口縁部～脚部	SL12		23.4	16.0	12.1	ハケ(9条/cm)	指ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	径2mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SL11 27
96	器台	脚柱部	SL12					ハケ(10条/cm)	ナデ	橙色	橙色	径2mm以下の砂粒を多量に含有	山陰系	SM2B04SL12 14
97	壷	胴部	SL13					ハケののちナデ	ハケののちナデ	橙色	明橙色	径1mm以下の砂粒を含有	外面重弧文線刻	SM2B04SL10
98	壷	胴部	SL13						指オサエ	橙色	赤褐色	径2mm以下の砂粒を含有		SM2B04SL10 1
99	甕	底部	SL13			7.5		タタキ(4条/cm)	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	径2mm以下の砂粒を含有		SM2B04SL10カクラン
100	深鉢	口縁部～底部	SD1		15.3	4.3	14.0	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	径2mm以下の砂粒を含有	口縁部沈線2条	SMA03SD1Ⅳ
101	甕	口縁部～胴部	SD1		20.6			ハケ(5条/cm)	ナデか	浅黄橙色	浅黄橙色	径3mm以下の砂粒を多量に含有		SMA03SD1Ⅳ
102	甕	口縁部～底部	SD1	Ⅶ	32.3	7.6	28.4	ハケ(10条/cm)のちナデ	ハケ(10条/cm)のちナデ	橙色	橙色	径2mm以下の砂粒を含有		SMA03SD1Ⅶ
103	壷	口縁部	SD6		14.0					にぶい橙色	にぶい橙色	径2mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SD6
104	甕	口縁部	SD7		27.3			ハケ(8条/cm)	ハケ(8条/cm)ののちナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	径1mm以下の砂粒を含有		SM2B04SD8
105	中型甕	口縁部～脚部	SD7	Ⅸ	(17.8)	(5.0)	21.2	全面タタキ(5条/cm)ののち、口縁部指頭圧およびナデ、底部ナデ	胴部上部板状工具によるナデ　他はナデおよび指頭圧	黄橙色	浅黄橙色	径2mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SD8Ⅸ
106	甕	口縁部～底部	SD7	Ⅸ	23.5			タタキ(4条/cm)　口縁部ナデ	ハケ(10条/cm)　口縁部ナデ	浅黄橙色	にぶい橙色	径2mm以下の砂粒を含有		SMB04SD8Ⅷ・Ⅸ
107	壷	胴部～底部	SD7	Ⅸ		6.2		板状工具によるナデ	板状工具によるナデ	橙色	橙色	径3mm以下の砂粒をまばらに含む		SM2B04SD8Ⅸ
108	二重口縁壷	完形	SD7	ⅩⅣ	(12.3)	3.3	21.9	ナデか	ナデか	浅黄橙色	浅黄橙色	径2mm以下の砂粒を多量に含有	二次口縁外面に波状文	SM2B04SD8ⅩⅣ
109	高坏	口縁部～脚柱部	SD7	Ⅸ	36.2			ミガキ	ナデ	明赤褐色	橙色	径2mm以下の砂粒を含有　精良		SM2B04SD8Ⅸ

表５　出土土器観察表（弥生時代）④

番号	器種	部位	出土位置		法量			調整		色調		胎土	備考	注記記号
			遺構	層位	口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
110	小型壷	完形	SD7	Ⅸ	(8.6)	2.1	13.8	ハケ(9条/cm)ののちナデ	口縁部ハケ　胴部ナデおよび指頭押圧	淡橙色	橙色	径3mm以下の砂粒を含有	焼成やや不良	SM2B04SD8Ⅸ
111	小型壷	ほぼ完形	SD7	XⅢ	(7.4)	4.7	7.5	ナデ	ナデ	橙色	橙色	径1mm以下の砂粒を含む　精良		SM2B04SD8XⅢ
112	短頸壷	ほぼ完形	SD7	XⅢ	(6.7)		(18.2)	胴部中位丁寧なナデ、それ以外はミガキ	ナデ	淡橙色	橙色	径2mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SD8XⅢ
114	広口壷	口縁部～底部	SD9	XⅡ	10.8	4.5	17.4	ハケ(10条/cm)ののち一部ナデ	ハケ(10条/cm)	浅黄橙色	橙色	径3mm以下の砂粒を多量に含有	底に十字線刻　一部外面赤色顔料残存	SM2B04SD10XⅡ
115	二重口縁壷	口縁部	SD9	XⅡ	15.6			ハケ(8条/cm)	ハケ(8条/cm)	浅黄橙色	淡橙色	径2mm以下の砂粒を多量に含有	第2口縁に波状文	SM2B04SD10XⅡ
116	甕	口縁部	SD9	Ⅴ				ハケ(14条/cm)	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	径1mm以下の砂粒および赤色粒子を含有		SM2B04SD10Ⅴ
117	甕	ほぼ完形	SD12	Ⅵ	19.6	3.8	23.7	タタキ(5条/cm)		にぶい褐色	にぶい褐色	径1mm以下の砂粒を含有		SM2B04SD9Ⅴ＋SM2B04SD9Ⅵ
118	甕	底部	SD12			3.6		タタキ(4条/cm)		橙色	にぶい橙色	径1mm以下の砂粒を含有		SM2B04SD9
119	壷	胴部～底部	SD12	Ⅵ		6.7		ハケ(8条/cm)	ハケ(8条/cm)ののちナデ	にぶい橙色	暗黄褐色	径2mm以下の砂粒を含有		SM2B04SD9Ⅵ
120	壷	ほぼ完形	SD12	Ⅷ	13.1		24.7	ハケ	ハケ、ナデ、指オサエ	浅黄橙色	浅黄橙色	径2mm以下の砂粒を含有		SM2B04SD9Ⅷ
121	広口壷	完形	SD12		13.7	2.1	22.7	ハケ(11条/cm)	口縁部および肩部指オサエ、底部指ナデ、胴部ハケ(11条/cm)	浅黄橙色	浅黄橙色	径2mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SD9Ⅷ
122	深鉢	胴部～底部	SD13			6.9		ミガキ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	径2mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SD19
123	甕	口縁部～胴部	SD14		20.0			ハケ(5条/cm)　口縁部ナデ	ハケ(5本/cm)ののち胴部下半ナデ	淡褐色	淡褐色	径1mm以下の砂粒を含有		SM2B04SD11
124	深鉢	口縁部～胴部	SD14		10.8			ナデ	ハケ(13条/cm)口縁部ナデ	褐色	明褐色	径2mm以下の砂粒を含む	口縁部に沈線2条	SM2B04SD11
125	深鉢	ほぼ完形	SD14		9.9	2.8	7.3	ナデか	板状工具によるナデか	淡褐色	褐色	径1mm以下の砂粒を含む		SM2B04SD11
126	甕	口縁部	SD15		28.1					褐色	褐色	径1mm以下の砂粒を含有		SM2B04SD5
127	壷か	口縁部	SD15	Ⅳ				ミガキ	ナデ	黄褐色	黄褐色	径2mm以下の砂粒を含有	沈線3条	SM2B04SD5Ⅳ
128	甕	口縁部	SD16	Ⅰ	24.3			胴部ハケ(9条/cm)、口縁部ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	径0.5mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SD3Ⅰ
129	甕	口縁部～胴部	SD16		23.7			ハケ(10条/cm)	ハケのちナデ	橙色	橙色	径1mm以下の砂粒を多量に含有	「下城式」	SM2B04SD3Ⅵ
130	甕	口縁部～胴部	SD16	Ⅵ	30.5			胴部ハケ(7条/cm)、口縁部ナデ	ハケ(7条/cm)	にぶい橙色	にぶい橙色	径2mm以下の砂粒を多量に含有	胴部突帯3条	SM2B04SD3Ⅵ
131	甕	口縁部	SD16	Ⅶ				ナデ	指オサエ	にぶい橙色	明赤褐色	径2mm以下の砂粒を含有	「下城式」	SM2B04SD3Ⅶ
132	壷	底部	SD16	XⅡ		7.5		ハケ(6条/cm)	ナデ	橙色	橙色	径5mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SD3XⅠ・XⅡ
133	甕	底部	SD16	XⅡ		7.9		ハケ(8条/cm)	ナデ	橙色	にぶい橙色	径1mm以下の砂粒を含有		SM2B04SD3XⅠ・XⅡ
134	高坏	脚柱部～脚部	SD16	Ⅸ		15.6		ミガキか	ハケおよびナデ	橙色	橙色	径1mm以下の砂粒および赤色粒子を多量に含有		SM2B04SD3Ⅸ
135	甕	口縁部～胴部	SD17	Ⅴ	(19.6)			ハケのちナデおよび板状工具によるナデ	ナデ	暗褐色	褐色	径1mm以下の砂粒を含む	口縁部にキザミの入った突帯1条　突帯直下に沈線	SM2B04SD13Ⅴ
136	甕	底部	SD17			8.8		ナデか	ナデか	淡褐色	褐色	径2mm以下の砂粒を多量に含有	底部と胴部の境に無文突帯	SM2B04SD13Ⅴ
137	甕	底部	SD17	Ⅰ		5.1		ハケ(8条/cm)	ハケののちナデ	淡褐色	褐色	径1mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SD13Ⅰ
138	有孔鉢	底部	SD17			8.5		ハケ(8条/cm)	ナデか	淡褐色	赤褐色	径3mm以下の砂粒を多量に含有	底に径1.3cmほどの小孔	SM2B04SD13
139	短頸壷	ほぼ完形	SD18		10.3	6.8	33.9	一部板状工具によるナデ	ハケ(8条/cm)	淡褐色	褐色	径3mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SD4
140	短頸壷	完形	SD18	Ⅸ	11.2	7.0	27.0	ハケか	ハケ(7条/cm)	褐色	褐色	径2mm以下の砂粒及び径2mm以下の赤色粒子を含有		SM2B04SD4Ⅸ
141	小型深鉢	胴部	SD18	Ⅸ				板状工具によるナデ	ハケ(7条/cm)	淡黄褐色	淡褐色	径3mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SD4Ⅸ
142	甕	底部	SD18	Ⅸ		6.1		胴部タタキ	ナデ	褐色	褐色	径3mm以下の砂粒を含有	底部側面においてもタタキが施される	SM2B04SD4Ⅸ
143	壷	胴部～底部	SD18	Ⅸ		5.3		ハケののちナデ	ナデ	淡褐色	褐色	径2mm以下の砂粒を含有		SM2B04SD4Ⅸ
144	二重口縁壷	口縁部	SD18	Ⅵ	14.2			ハケ(7条/cm)のち一部ナデ	ナデおよび指オサエ	淡褐色	褐色	径3mm以下の砂粒を多量に含有	第2口縁に波状文頸部に突帯	SM2B04SD4Ⅵ
145	壷	底部	SD18	Ⅸ		9.0		タタキ	ハケののちナデ	淡褐色	褐色	径3mm以下の砂粒を含有		SM2B04SD4Ⅸ

表6　出土土器観察表（弥生時代）⑤

番号	器種	部位	出土位置		法量			調整		色調		胎土	備考	注記記号
			遺構	層位	口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
146	小型直口壷	口縁～胴部	SD18		6.5			ナデおよび指オサエ	ナデおよび指オサエ	淡褐色	淡褐色	径3mm以下の砂粒を含有		SM2B04SD4
147	単口縁壷	完形	SD20	Ⅷ	16.8	4.7	25.1	胴部ナナメハケのち指ナデ　口縁部指オサエおよび指ナデ	胴部一部板状工具ナデ痕　口縁部板状工具による横ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	径5mm以下の砂礫を多量に含有	全体に摩滅激しい	SM2B04SD12 XⅢ
148	甕	口縁部～胴部	SD20	Ⅰ	20.8			タタキ(3条/cm)	板上工具によるナデ	橙色	淡褐色	径3mm以下の砂粒を多量に含有	外面煤付着	SM2B04SD12 Ⅰ
149	甕	底部	SD20			6.2		ハケ(5条/cm)	ハケ(5条/cm)	淡褐色	黄褐色	径2mm以下の砂粒を含有		SM2B04SD12
150	長胴壷	口縁部～底部	SD21	Ⅴ	17.7	6.3	36.3	ハケ	ナデ	橙色	橙色	径2mm以下の砂粒を含有	全体に摩滅激しい	SM2B04SD18 Ⅴ
151	短頸壷	口縁部～底部	SD21	Ⅴ	13.6	7.3	31.7	胴部ハケ(10条/cm)、肩部以上ナデ	ナデ、底部付近ハケ(10条/cm)	赤褐色	赤褐色	径2mm以下の砂粒を含有	外面、内面赤色顔料付着　肩部外面に3条の沈線	SM2B04SD18 Ⅴ
152	長頸壷	口縁部～底部	SD21	Ⅴ		3.3		ミガキおよびナデ	ナデおよび指オサエ	淡褐色	黄褐色	径2mm以下の砂粒を含有	頸部に突帯が巡る	SM2B04SD18 Ⅴ
153	壷	胴部	SD21	Ⅴ				ミガキ	ハケのちナデか	橙色	浅黄橙色	径2mm以下の砂粒を含有	6の字状の重弧文	SM2B04SD18 Ⅴ
154	高坏	口縁部～脚部	SD21	Ⅴ	36.1	19.7	26.5	ハケ(10条/cm)	坏受部ハケ(10条/cm)、口縁部ナデ、脚部指オサエ	黄橙色	橙色	径2mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SD18 Ⅴ
155	小型甕	口縁部～底部	SD21	Ⅴ	10.3	4.8	13.3	ナデ	ナデ	橙色	橙色	径2mm以下の砂粒を含有		SM2B04SD18 Ⅴ
156	甕	口縁部～底部	SD21	Ⅴ	26.7	8.1	34.7	ハケ(11条/cm)	ハケ(11条/cm)	灰黄色	褐灰色	径3mm以下の砂粒を含有		SM2B04SD18 Ⅴ
157	器台か	口縁部	SD22	Ⅴ	45.9			ハケ(11条/cm)およびナデ	ハケ(11条/cm)およびナデ	橙色	橙色	径5mm以下の砂粒を含有	波状文および縦位の粘土紐2条	SM2B04SD17 Ⅴ
158	甕	口縁部	SD22	Ⅳ	23.2			ハケ(7条/cm)ののちナデ	ナデ	橙色	にぶい黄橙色	径1mm以下の砂粒を含有		SM2B04SD17 Ⅳ
159	壷	口縁部	SD22	Ⅴ	15.5			ハケ(6条/cm)	ハケ(6条/cm)	浅黄橙色	浅黄橙色	径3mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SD17 Ⅴ
160	壷	胴部～口縁部	SD22	Ⅴ		3.5		ハケ(14条/cm)か	指ナデ	にぶい黄橙色	橙色	径2mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SD17 Ⅴ
161	壷	胴部～底部	SD22	Ⅳ		3.2		ミガキおよびナデ	ハケ(6条/cm)および指オサエ	にぶい黄橙色	浅黄橙色	径3mm以下の砂粒を含有	外面M字状線刻	SM2B04SD17 Ⅳ
162	脚付壷	胴部～脚部	SD22	Ⅳ		6.5		ハケ(11条/cm)ののちナデ	ハケ(11条/cm)ののちナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	径2mm以下の砂粒を含有		SM2B04SD17 Ⅳ
163	壷	底部	SD22	Ⅳ		6.8		ハケ(6条/cm)	ナデ	浅黄橙色	褐色	径5mm以下の小礫を多量に含有		SM2B04SD17 Ⅳ
164	壷	底部	SD22	Ⅴ		5.2		ナデ		黄褐色	黄褐色	径4mm以下の砂礫を多量に含有		SM2B04SD17 Ⅴ
165	甕	口縁部～胴部	SD23		19.2			ハケ(9条/cm)	ハケ(9条/cm)	橙色	にぶい黄橙色	径3mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SD16 Ⅸ
166	甕	口縁部～胴部	SD24	Ⅳ	30.4			胴部ハケ(16条/cm)	ハケののちナデ	淡橙色	橙色	径5mm以下の砂粒を含有		SM2B04SD15 Ⅳ
167	甕	口縁部～胴部	SD24	Ⅳ	20.2			ハケ(8条/cm)	ハケ(8条/cm)	浅黄橙色	橙色	径3mm以下の砂粒を多量に含有	外面煤付着	SM2B04SD15
168	甕	口縁部～胴部	SD24		20.5			ハケ(8条/cm)	ハケ(8条/cm)	橙色	橙色	径3mm以下の砂粒を多量に含有	外面煤付着	SM2B04SD15
169	壷か	口縁部	SD24	Ⅳ				ハケの上からナデ	ハケの上からナデ	橙色	橙色	径2mm以下の砂粒を含有	170と同一個体か	SM2B04SD15 Ⅳ
170	壷	胴部	SD24					胴部下半ハケ(14条/cm)の上からナデ、上半タタキ(4条/cm)	ハケ(14条/cm)	にぶい橙色	にぶい橙色	径2mm以下の砂粒を含有	169と同一個体か	SM2B04SD15
171	浅鉢	口縁部～底部	SD24	Ⅳ	29.0	3.9	10.0	ミガキ	ミガキ	橙色	橙色	径2mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SD15 Ⅳ
172	浅鉢	口縁部～胴部	SD24	Ⅳ	25.1				ミガキ	橙色	にぶい橙色	径3mm以下の砂粒を多量に含有	口縁部に3条の沈線	SM2B04SD15 Ⅳ
173	甕	口縁部～底部	SD26		25.4	6.5	31.9	ハケ(6条/cm)	ナデ	灰褐色	橙色	径3mm以下の砂粒を多量に含有		SM2C04SD7
174	高坏	坏部	SD28	Ⅴ	(35.9)			受部ミガキ、口縁部ナデ	ミガキおよびナデ	にぶい黄橙色	橙色	径1mm以下の砂粒を含有　精良	口縁部外面に鋸歯状文	SM2C04SD2Ⅴ
175	高坏	坏部～脚部	SD28					脚柱部ミガキ、坏部ナデか	脚部ハケ(9本/cm)	橙色	にぶい橙色	径2mm以下の砂粒を多量に含有	脚柱部に三方向、脚柱部と脚部の境に四方向円形透かし孔	SM2C04SD2
176	二重口縁壷	口縁部	SD28	Ⅲ	15.3			ハケののちナデか	ナデか	橙色	黄橙色	径2mm以下の砂粒を含有	第2口縁に沈線2条	SM2C04SD2Ⅲ
177	小型甕	胴部～底部	SD28	ⅩⅠ		3.9		ハケののちナデ	ナデおよびハケ	灰白色	灰黄色	径1mm以下の砂粒を含有　精良		SM2CSD2XⅠ
178	甕	口縁部～胴部	SD28		(17.8)			タタキ	ナデ	にぶい橙色	橙色	径5mm以下の砂礫を含有	外面に煤付着	SM2C04SD2
179	広口壷	口縁部～底部	SD28		(13.0)	4.0	22.1	底部近くナデ、胴部下半タタキ(4本/cm)、胴部上半ハケ(9本/cm)	ハケ(5本/cm)、ナデ	橙色	橙色	径2mm以下の砂粒を多量に含有	全体に摩滅激しい	SM2C04SD2
180	甕	口縁部	SD30		(18.7)			タタキ	ハケ	にぶい橙色	浅黄橙色	径5mm以下の砂礫を多量に含有	外面に煤付着	SM2C04SD4
181	高坏	口縁部～脚部	SD30		(18.5)	11.8	(12.5)	ハケ(11条/cm)ののちミガキ	ナデか	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	径2mm以下の砂粒を多量に含有	4方向に円形の透かし孔	SM2C04SD4

表７　出土土器観察表（弥生時代）⑥

番号	器種	部位	出土位置		法量			調整		色調		胎土	備考	注記記号
			遺構	層位	口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
182	高坏	脚柱部～脚部	SD30			17.8		ハケのちナデ	ハケのちナデか	浅黄橙色	浅黄橙色	径1mm以下の砂粒を含む	3方向に円形の透かし孔	SM2C04SD4
183	単口縁壷	口縁部～胴部	SD30		(14.6)		(15.5)	全面ミガキ	ナデ	にぶい橙色	褐灰色	径3mm以下の砂粒を多量に含有	全体に摩滅激しい	SM2C04SD4
184	甕	完形	SD31		22.1	4.4	24.4	ハケののちナデ	ハケののちナデ	橙色	明赤褐色	径2mm以下の砂粒を多量に含有		SM2C04SD5
185	小型壷	胴部～底部	SD31					ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	径2mm以下の砂粒を含有		SM2C04SD5 6
186	長頸壷	口縁部～胴部	SD31		15.0			ハケ(7条/cm)ののち一部ナデ	ハケ(7条/cm)およびナデ	橙色	橙色	径1mm以下の砂粒を含有 精良	外面胴部上半に弧線3本線刻	SM2C04SD5
187	短頸壷	口縁部～胴部	SD32		14.6			ナデか	ナデ	橙色	浅黄橙色	径1mm以下の砂粒を多量に含有		SM2C04SD6
188	二重口縁壷	口縁部	SD32						ナデ	灰黄褐色	灰黄褐色	径2mm以下の砂粒を含有	外面に波状文	SM2C04SD6
189	二重口縁壷	口縁部	SD32							にぶい橙色	浅黄橙色	径2mm以下の砂粒および赤色粒子を含有	外面に線刻の波状文	SM2C04SD6
190	小型壷	胴部～底部	SD32			2.1				橙色	明赤褐色	径1mm以下の砂粒を含有		SM2C04SD6
192	短頸壷	完形	SD33	XI	14.9	6.9	29.9	ハケ(9条/cm)	指ナデ	橙色	暗赤褐色	径2mm以下の砂粒を多量に含有	外面底近く3条沈線 底面T字状沈線	SM2C04SD12
193	単口縁壷	完形	SD33	XI	11.3	5.0	28.0	ほぼ全面にわたりハケ(9条/cm) 胴部下半はハケのち板状工具によるナデ	ほぼ全面にわたりハケ(5条/cm)	明黄褐色	明黄褐色	径1mm以下の砂粒を多量に含有 精良	胴部上半分にU字状の線刻	SM2C04SD12 ①
194	広口壷	口縁部～胴部	SD33	IX	18.6			ハケ(7条/cm)の上からナデ	ハケの上からナデか	浅黄橙色	浅黄橙色	径2mm以下の砂粒を多量に含有		SM2C04SD12 IX
195	短頸壷	完形	SD33	XI	14.7	6.3	27.6	底部近く板状工具によるナデ	ナデか	明赤褐色	明赤褐色	径5mm以下の砂礫を多量に含有	全体に摩滅激しい	SM2C04SD12 ②
196	長胴壷	胴部～底部	SD34	V		7.0		ミガキ	ハケ	黄橙色	浅黄橙色	径5mm以下の砂礫を含有	全体に摩滅激しい	SM2B04SD9III ＋SM2B04SD9 V
197	二重口縁壷	ほぼ完形	SD34	VIII	12.2	3.6	20.7	ミガキ		浅黄橙色	浅黄橙色	径1mm以下の砂粒を含有		SM2C04SD9VIII
198	広口壷	完形	SD34	VIII	11.2	3.2	18.2			橙色	橙色	径2mm以下の砂粒を含有		SM2C04SD9VIII
199	甕	口縁部～底部	SD34		19.2	6.0	35.1	ハケ(11条/cm)およびナデ	口縁部ハケ(15条/cm) 胴部ナデおよび指頭押圧	淡褐色	褐色	径3mm以下の砂粒を多量に含有	口縁部外面粘土継目明瞭	SM2C04SD9
200	甕	完形	SD34		18.4	4.6	20.7	胴部ハケ(10条/cm)、口縁部ナデ	ナデ	橙色	橙色	径3mm以下の砂粒を含有		SM2C04SD9
201	壷	口縁部	SD35	I	13.9			胴部ハケ(12条/cm)、口縁部横ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	径1mm以下の砂粒を含有		SM2C04SD8 2 0・32
202	壷	胴部～底部	SD35	I		4.7		ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	径3mm以下の砂粒を多量に含有	曲線、直線等の3種の線刻	SM2C04SD8 4 ＋6＋7＋11＋13 ＋16＋29＋34＋ 38
203	甕	口縁部～胴部	SD35	I	23.4			ナデ	ナデ	浅黄橙色	にぶい黄橙色	径3mm以下の砂粒を含有		SM2C04SD8 1 9
204	甕	口縁部～胴部	SD35	III	15.0			ナデか	口縁部ハケ(12条/cm)、胴部ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	径3mm以下の砂粒を多量に含有		SM2C04SD8 2 8
205	二重口縁壷	口縁部	SD36							明黄褐色	橙色	径1mm以下の砂粒を多量に含有	178と同一個体	SM2C04SD11 IX
206	二重口縁壷	胴部	SD36					ハケ(10条/cm)	ハケ(8条/cm)	明黄褐色	橙色	径1mm以下の砂粒を多量に含有	177と同一個体	SM2C04SD11 X
207	小型壷	ほぼ完形	SD36		10.0	2.9	13.7	ナデか	ナデ	明黄褐色	浅黄橙色	径2mm以下の砂粒を含有		SM2C04SD11
208	沓形器台	口縁部～底部	SD43		19.8	13.6	19.2	指ナデおよび指オサエ	指ナデおよび指オサエ	にぶい橙色	にぶい橙色	径3mm以下の砂粒を多量に含有	口縁部の両面が弧状に切り取られる	SM2F05P②1・3
209	甕	ほぼ完形	SD44		15.4	5.0	20.1	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	明黄褐色	径2mm以下の砂粒を含有		SM2F05P①
210	直口壷	口縁部～底部	SD46	IV	10.1		11.4		ハケ(16条/cm)	黄橙色	橙色	径2mm以下の砂粒を含有		SM2FSD3IV
211	小型丸底壷	口縁部～底部	SD46		9.2					にぶい橙色	にぶい黄橙色	径1mm以下の砂粒を含有		SM2F05SD3V
212	壷	胴部～底部	SD46							橙色	褐色	径2mm以下の砂粒を含有	二重口縁壷か	SM2F05SD3V
213	二重口縁壷	口縁部～胴部	SD46		9.1			ハケ(11条/cm)	ハケ(11条/cm)およびナデ	橙色	にぶい橙色	径2mm以下の砂粒を含有	口縁部無文か	SM2F05SD3 II・III・V
214	壷	胴部～底部	SD46	V		6.7			指ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	径2mm以下の砂粒を多量に含有		SM2FSD3V
215	甕	口縁部～胴部	ピット		23.1			ナデ	ナデ	褐色	暗褐色	径1mm以下の砂粒を含有	口縁直下刺突入突帯	SM2B04P14
216	甕	口縁部	ピット		21.7			タタキ(3条/cm)	ハケ(11条/cm)	褐色	暗褐色	径2mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04P73
217	小型甕	胴部～底部	ピット			3.8				明褐色	淡褐色	径1mm以下の砂粒および赤色粒子を多量に含有		SM2B04P17

表８　出土土器観察表（弥生時代）⑦

番号	器種	部位	出土位置		法量			調整		色調		胎土	備考	注記記号
			遺構	層位	口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
218	甕	底部	ピット			4.9		タタキ(3条/cm)	ナデ	褐色	暗褐色	径2mm以下の砂粒を含有		SM2B04P4
219	深鉢	ほぼ完形	ピット		11.5	7.5	10.0	脚台部ハケ(14条/cm)、胴部ミガキ	脚台部ナデ、胴部ハケ(14条/cm)	橙色	橙色	径3mm以下の砂粒を含有		SMA03P28
220	小型浅鉢	口縁部～底部	ピット		12.2	2.6	5.6	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	径1mm以下の砂粒を含有		SMA03P
221	直口壷	口縁部～底部	ピット		12.6	3.2	11.0	胴部ミガキ	口縁部ミガキ、胴部ナデ	にぶい橙色	橙色	径2mm以下の砂粒を含有		SM2B04P70
222	高坏	脚柱部	ピット					ミガキ	ナデ	暗褐色	淡褐色	径1mm以下の砂粒を含有	1方向に円形の透かし孔確認	SM2B04P22
223	壷	口縁部～胴部	ピット		10.2			板状工具によるナデ	指ナデおよび指オサエ	浅黄橙色	浅黄橙色	系2mm以下の砂粒を含有		SM2B04P1

表９　出土石器・土製品観察表（弥生時代）

番号	種別	出土位置		法量	調整		色調		胎土	備考	注記記号
		遺構	層位		外面	内面	外面	内面			
2	石庖丁	包含層		最大幅4.2、最大厚0.4、重量16.3g	—	—	—	—	—	両端抉り	SM2B04包含層
45	不明土製品	SL4		—	ナデ、オサエ条／cm)	一部ハケ(8	淡褐色	—	径2mm以下の砂粒を多量に含有		SM2B04SL4　22
57	不明土製品	SL6		—	ナデ	—	明黄褐色	明黄褐色	精良	広口壷等を模したものか	SM2B04SL3　11
65	柄杓形土製品	SL8		—	ナデか	ナデ、指オサエ	浅黄橙色	浅黄橙色	径2mm以下の砂粒を含有		SM2B04SL7　27
81	石庖丁	SD10		最大長4.5、最大幅4.25、最大厚0.65、重量21.4g	—	—	—	—	—		SM2B04SL2　38
113	不明土製品	SD7		径3.1、重量23.75g	丁寧なナデ	—	暗褐色	—	径1mm以下の白色粒子含有　精良	径2mmの穿孔重量23.8g	SM2SD8一括
191	不明土製品	SD32		—	ナデおよび指オサエ	—	橙色	にぶい橙色	径1mm以下の砂粒を含有	中空の柄部分か	SM2C04SD6

表10　出土石器・土製品観察表（古代）

番号	種別	出土位置		法量	調整		色調		胎土	備考	注記記号
		遺構	層位		外面	内面	外面	内面			
229	土錘	SD5	XⅣ	最大長4.1、最大幅1.9、孔径0.5、重量8.59g	—	—	—	—	—		SMA03SD4XⅣ
230	土錘	SD5		最大長4.2、最大幅1.55、孔径0.55、重量8.71g	—	—	—	—	—		SMA03SD4
240	不明土製品	SD10	Ⅵ	—	ナデ	—	明褐灰色	明褐灰色	径3mm以下の砂粒を含有	柄杓状の取っ手部分か	SM2B04SD2Ⅵ
241	土錘	SD10	Ⅵ	最大長5.6、最大幅2.1、孔径0.7、重量19.9g	—	—	—	—	—		SM2B04SD2Ⅵ
242	不明土製品	SD10	XⅨ	口径1.6、底径3.0、器高3.1	磨研	—	オリーブ黒色	黒褐色	—		SM2B04SD2XⅨ
255	土錘	SE15		最大長5.05、最大幅2.3、孔径0.65	—	—	—	—	—	—	SM2C04SE7
256	砥石	SE15		最大長5.45、最大幅9.55、最大厚2.10、重量120g	—	—	—	—	—	転用か	SM2F05SE6　3

表11　出土土器・陶磁器観察表（古代・中世・近世）

番号	器種	部位	出土位置		法量			調整		色調		胎土	備考	注記記号
			遺構	層位	口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面			
224	土師器坏	口縁部～底部	SD5	XX	12.2	5.3	4.6			橙色	橙色	径1mm以下の砂粒を含有	ヘラ切底　高台貼付を意図か　9世紀	SMA03SD4Ⅳ・Ⅶ
225	土師器坏	完形	SD5	Ⅲ	12.6	5.5	4.8			浅黄橙色	浅黄橙色	径1mm以下の砂粒を多量に含有	ゆがみ大きい　9世紀	SMA03SD4Ⅲ
226	土師器椀	口縁部～脚部	SD5	Ⅴ	12.2	6.7	6.7			にぶい橙色	にぶい橙色	径1mm以下の砂粒を含有		SMA03SD4Ⅳ・Ⅴ
227	土師器椀	口縁部～脚部	SD5	XX	14.9	7.5	6.4			橙色	橙色	径1mm以下の砂粒を多量に含有	9世紀末	SMA03SD4XX
228	土師器坏	底部	SD5			6.7				淡橙色	浅黄橙色	径1mm以下の砂粒を含有	ヘラ切底　見込みに墨	SMA03SD4
231	双耳付水注（黄釉褐彩貼花人物文水注）	頸部～胴部	SD5	XXI				施釉（貼花褐釉、全体黄釉）	頸部まで黄釉	—	—	瓷胎	中国長沙銅官窯製237と同一個体か　8世紀後半～10世紀初頭	SMA03SD4XXⅠ
232	土師器坏	完形	SD10	Ⅷ	11.0	4.2	3.6	ナデ	ナデ	にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	径2mm以下の砂粒を含有	ヘラ切底　円盤高台の一種か　9世紀	SM2B04SD2Ⅷ
233	土師器坏	完形	SD10	XI	11.0	5.2	4.2	ナデ	ナデ	橙色	橙色	径2mm以下の砂粒を含有	ヘラ切底　円盤高台　9世紀後半	SM2B04SD2XI
234	土師器坏	口縁部～底部	SD10	Ⅵ	11.0	6.2	3.0	ナデ	ナデ	浅黄橙色	浅黄橙色	径1mm以下の砂粒を含有	ヘラ切底　9世紀	SM2B04SD2Ⅵ
235	土師器椀	口縁部～底部	SD10	Ⅳ	14.2	8.5	6.7	ナデ	ナデ	にぶい橙色	淡橙色	径1mm以下の砂粒を含有		SM2B04SD2Ⅳ
236	緑釉陶器椀	口縁部～胴部	SD10	Ⅲ	16.2			施釉	施釉	深緑色	深緑色		須恵質　畿内産洛西型　9世紀後半	SM2B04SD2Ⅱ＋SM2B04SD2Ⅲ
237	水注（黄釉褐彩貼花文水注）	底部	SD10	Ⅱ		15.6		施釉（黄釉　一部、貼花部の褐釉が認められる）	無釉	—	—	瓷胎	中国長沙銅官窯製231と同一個体か　8世紀後半～10世紀初頭	SMB04SD2Ⅰ・Ⅱ
238	須恵器長頸壷	頸部	SD10	XXI						灰色	灰色			SM2B04SD2XXⅠ
239	須恵器壷	底部	SD10	Ⅵ		14.3				灰色	灰色			SM2B04SD2Ⅵ
243	施釉陶器皿	口縁部～胴部	SD11		11.2			施釉	施釉	淡黄色	淡黄色		底部部分露胎	SM2B04SD1
244	高台付坏	底部	SD11			6.7		ナデ	ナデ	にぶい橙色	にぶい橙色	径1mm以下の砂粒を含有		SM2B04SD1XⅠ
245	土師器坏	ほぼ完形	SD25	XⅦ	12.7	8.3	4.0			黄橙色	黄橙色	径1mm以下の砂粒を含有	糸切底	SM2C04SD10XⅦ
246	須恵器	底部	SD25			14.7				暗灰色	暗灰色			SM2C04SD10
247	白磁碗	口縁部～胴部	SD25	Ⅱ	15.2			施釉	施釉	灰白色	灰白色		口唇部のみ露胎	SM2C04SD10Ⅰ・Ⅱ
248	青磁碗	口縁部	SD25		14.4			施釉	施釉	オリーブ灰色	オリーブ灰色		龍泉窯　端反	SM2C04SD10
249	黒色土器椀	ほぼ完形	SA1		15.7	8.4（脚台部分）	6.3			にぶい黄橙色	にぶい黄橙色	径2mm以下の砂粒を含有	両黒　9世紀後半	SM2B04SA1　12
250	土師器坏	口縁部～底部	ピット		15.0	7.4	5.9			暗黄褐色	暗黄褐色	径1mm以下の砂粒を含有	円盤高台　10世紀前半	SM2F05P③
251	黒色土器椀	ほぼ完形	SE15		15.1	7.9（脚台部分）	8.0			にぶい橙色	にぶい橙色	径1mm以下の砂粒を含有	両黒　9世紀後半	SM2F05SE6　22
252	土師器椀	口縁部～底部	SE15		14.1	7.5	5.8			浅黄橙色	浅黄橙色	径1mm以下の砂粒を含有	高台内面花弁状圧痕	SM2F05SE6　15
253	土師器坏	完形	SE15		13.1	6.3	5.0	ナデ	ナデ	橙色	橙色	径1mm以下の砂粒を含有	ヘラ切底	SM2C04SE7
254	須恵器長頸壷	口縁部～肩部	SE15		10.1					灰白色	灰白色			SM2C04SE7 54
257	須恵器壷	口縁部～肩部	SE16							灰白色	灰白色			SM2C04SE5
258	施釉陶器椀	—	SE7			6.0		残存部位において施釉なし	見込み蛇の目釉剥ぎ	—	—		見込み中央に褐釉	SM2C04SE2
259	染付椀	—	SE8		7.7			施文	施文	—	—			SM2C04SE4

第Ⅳ章　自然科学分析

株式会社 古環境研究所

第１節　火山灰分析

はじめに

宮崎県中南部に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、姶良、鬼界、阿蘇などのカルデラ火山や、桜島や霧島などの成層火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が数多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代などを知ることができるようになっている。

そこでテフラ粒子が認められた桜町遺跡においても、採取された試料を対象としてテフラ検出分析とテフラ組成分析を行い、指標テフラの検出同定を試みることになった。分析対象は、Ａ区東壁のⅣ層（試料１）、Ｃ区南壁のⅡｂ層（試料２）、ＳＤ25の１層（試料３）の３点である。

ａ．テフラ検出分析

（１）分析方法

テフラ粒子の相対的な特徴を把握するために、テフラ検出分析を行った。分析の手順は次のとおりである。

１）試料10gを秤量

２）超音波洗浄により泥分を除去

３）80°Cで恒温乾燥

４）実体顕微鏡によりテフラ粒子の特徴や量を観察

（２）分析結果

テフラ検出分析結果を表12に示す。試料１には、暗褐色や黒褐色のスコリア（最大径4.1mm）が多く含まれている。ほかに白色軽石（最大径2.0mm）が少量認められる。火山ガラスとしては、暗褐色や黒褐色のスコリアの細粒物のほか、白色や無色透明の軽石型ガラス、無色透明や褐色のバブル型ガラスなどが比較的多く含まれている。試料２には、暗褐色や黒褐色のスコリア（最大径2.1mm）が比較的多く含まれている。ほかに白色軽石（最大径3.0mm）が少量認められる。火山ガラスとしては、暗褐色や黒褐色のスコリアの細粒物のほか、白色や無色透明の軽石型ガラス、無色透明や褐色のバブル型ガラスなどが比較的多く含まれている。試料３には、暗褐色や黒褐色のスコリア（最大径2.9mm）が少量含まれている。火山ガラスとしては、暗褐色や黒褐色のスコリアの細粒物のほか、無色透明の軽石型ガラス、無色透明や褐色のバブル型ガラスなどが比較的多く含まれている。

ｂ．テフラ組成分析

（１）分析方法

テフラ検出分析処理済みの３点の試料を対象に、火山ガラス比分析と重鉱物組成分析を合わせたテフラ組成分析（早田，1999）を行い、試料に含まれる火山ガラスの特徴や重鉱物組成などの特徴を把握した。分析の手順は、次の通りである。

１）分析篩により1/4-1/8mmの粒子を篩別。

２）偏光顕微鏡下で250粒子を観察し、火山ガラスの色調形態別比率を求める（火山ガラス比分析）。

3）偏光顕微鏡下で重鉱物250粒子を観察し、重鉱物組成を求める（重鉱物組成分析）。

（2）分析結果

テフラ組成分析の結果を、ダイヤグラムにして第109図に示す。また火山ガラス比分析と重鉱物組成分析の結果の内訳を、表２と表３に示す。試料１には、スコリアの細粒物（3.2%）のほか、無色透明のバブル型ガラス（0.4%）、淡褐色のバブル型ガラス（0.4%）が含まれている。重鉱物としては、量が多い順に斜方輝石（70.4%）、単斜輝石（16.8%）、磁鉄鉱（7.6%）、カンラン石（2.8%）、角閃石（0.4%）が認められる。

試料２には、スコリアの細粒物（1.6%）のほか、無色透明のバブル型ガラス（0.8%）、淡褐色や褐色のバブル型ガラス（各0.4%）が含まれている。重鉱物としては、量が多い順に斜方輝石（68.8%）、単斜輝石（21.6%）、磁鉄鉱（6.4%）、カンラン石（2.8%）が認められる。

試料３には、スコリアの細粒物（1.6%）のほか、無色透明のバブル型ガラス（0.8%）、淡褐色のバブル型ガラス（0.4%）、繊維束状に発泡した軽石型ガラス（0.4%）が含まれている。重鉱物としては、量が多い順に斜方輝石（70.0%）、単斜輝石（20.0%）、磁鉄鉱（5.2%）、角閃石（1.2%）、カンラン石（0.8%）が認められる。

c．考察

Ａ区東壁のⅣ層（試料１）、Ｃ区南壁のⅡｂ層（試料２）、ＳＤ25のＩ層（試料３）の３試料に含まれるテフラ粒子のうち、暗褐色や黒色を呈するスコリアやその細粒物については、10～13世紀に霧島火山から噴出した霧島高原スコリア（Kr-ThS，井ノ上，1988，早田，1997）と考えられる。最近では、このスコリアの年代を1235年とする説もある（奥野ほか，2000）。ただし、霧島火山はKr-ThSの噴火の前にもスコリア質テフラを噴出させていることから（井ノ上，1988，筒井・小林，1992，早田，1997など）、より高精度の同定のためには、これらのテフラについての層序や分布に関する調査分析が必要となっている。

無色透明、淡褐色、褐色のバブル型ガラスについては、その特徴から約2.4～2.5万年前*1に姶良カルデラから噴出した姶良Tn火山灰（AT，町田・新井，1976，1992，松本ほか，1987，村山ほか，1993，池田ほか，1995）や、約6,300年前*1に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah，町田・新井，1978）に由来すると考えられる。

小結

桜町遺跡において採取された３試料を対象に、テフラ検出分析とテフラ組成分析を行った。その結果、いずれの試料からも、霧島高原スコリア（Kr-ThS，10～13世紀）に由来する可能性の高いテフラ粒子が検出された。

*1　放射性炭素（^{14}C）年代．ATとK-Ahの暦年較正年代に関しては，約2.6～2.9万年前および約7,300年前と推定されている（町田・新井，2003）．

【参考文献】

池田晃子・奥野充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫　1995「南九州，姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による^{14}C年代」『第四紀研究』34　p.377-379.

井ノ上幸造　1988「霧島火山群高千穂複合火山の噴火活動史」『岩鉱』83　p.26-41.

町田洋・新井房夫　1976「広域に分布する火山灰-姶良Tn火山灰の発見とその意義」『科学』46　p.339-347.

町田洋・新井房夫　1978「南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラーアカホヤ火山灰」『第四紀研究』17　p.143-163.

町田洋・新井房夫　2003『新編火山灰アトラス』東京大学出版会　336p.

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗　1987「姶良Tn火山灰（AT）の^{14}C年代」『第四紀研究』26　p.79-83.

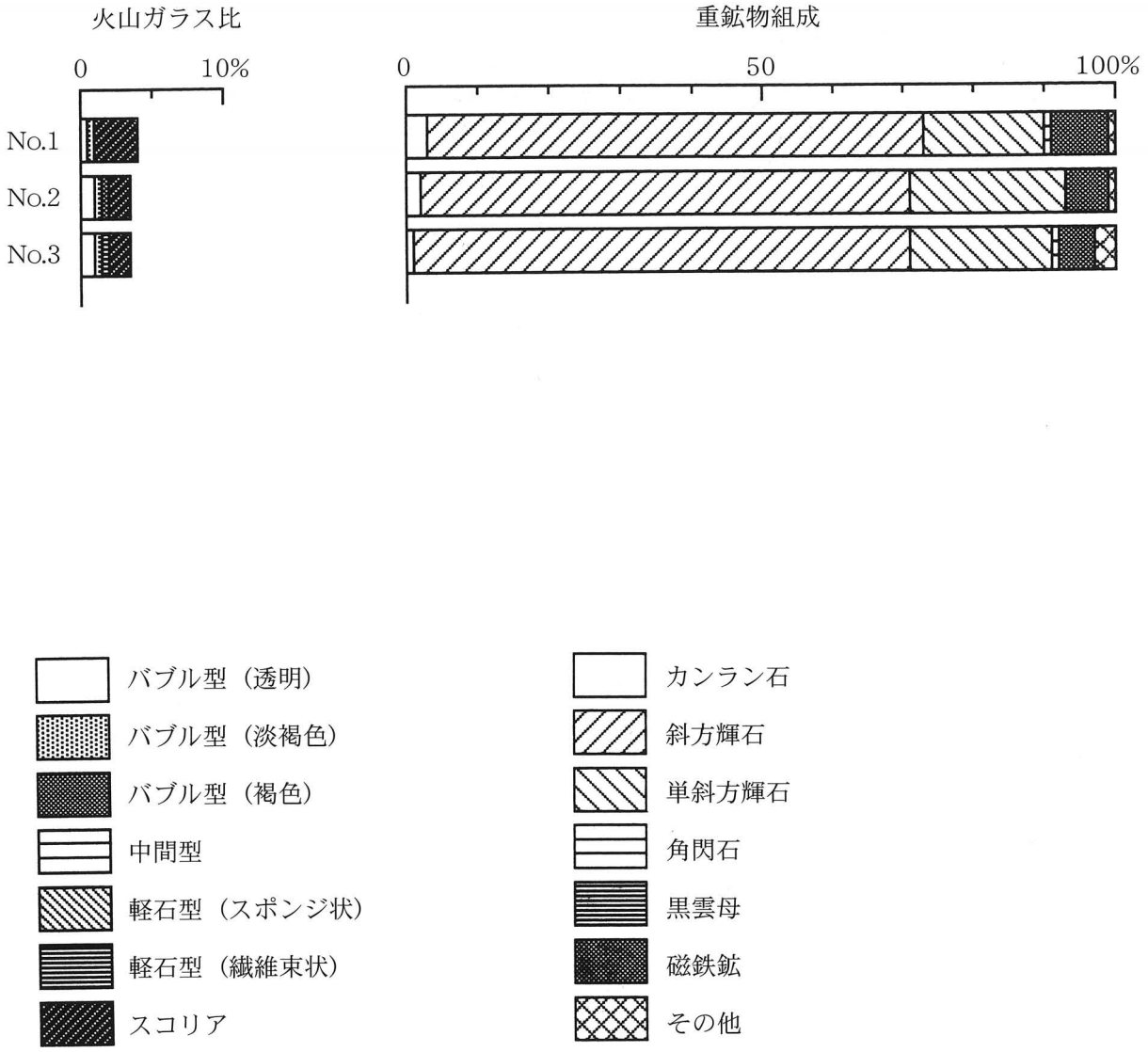
村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村真・安田尚登・平朝彦　1993「四国沖ピストンコア試料を用いたAT火山灰噴出年代の再検討ータンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の^{14}C年代」『地質雑』99　p.787-798.

奥野充・福島大輔・小林哲夫　2000「南九州のテフロクロノロジーー最近10万年間のテフラ」『人類史研究』12　p.9-23.

早田　勉　1997「火山灰と土壌の形成」『宮崎県史通史編』1　p.33-77.

早田　勉　1999「テフロクロノロジーー火山灰で過去の時間と空間をさぐる方法」（長友恒人編『考古学のための年代測定学入門』古今書院　p.113-134.）

筒井正明・小林哲夫　1992「霧島・御鉢火山のテフロクロノロジー」『日本火山学会1992年度秋季大会講演予稿集』p.114.



第109図　テフラ組成ダイヤグラム

表12　テフラ検出分析結果

試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
	量	色調	最大径	量	形態	色調
1	+++	暗褐,黒褐>白	4.1,2.1,2.0	++	sc,pm,bw	暗褐,黒褐,白,透明,褐
2	++	暗褐,黒褐>白	2.0,2.1,3.0	++	sc,pm,bw	暗褐,黒褐,白,透明,褐
3	+	暗褐,黒褐	2.9,2.2	++	sc,pm,bw	暗褐,黒褐,透明,褐

++++：とくに多い，+++：多い，++：中程度，+：少ない，－：認められない．
最大径の単位は，mm．bw：バブル型，pm：軽石型，sc：スコリア．

表13　火山ガラス比分析結果

試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	sc	その他	合計
1	1	1	0	0	0	0	8	240	250
2	2	1	1	0	0	0	4	242	250
3	2	1	0	0	0	1	4	242	250

数字は粒子数．bw：バブル型，md：中間型，pm：軽石型，cl：透明，pb：淡褐色，br：褐色，sp：スポンジ状，fb：繊維束状，sc：スコリア．

表14　重鉱物組成分析結果

試料	ol	opx	cpx	ho	bi	mt	その他	合計
1	7	176	42	1	0	19	5	250
2	4	172	54	0	0	16	4	250
3	2	175	50	3	0	13	7	250

数字は粒子数．ol：カンラン石，opx：斜方輝石，cpx：単斜輝石，ho：角閃石，bi：黒雲母，mt：磁鉄鉱．

第２節　放射性炭素年代測定

a．試料と方法

試料名	地点・層準	種類	前処理・調整	測定法
No.1	ＳＤ25，20層	堆積物(暗灰色粘土)	酸洗浄，石墨調整	AMS

AMS：加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）

b．測定結果

試料名	測定No. (Beta-)	^{14}C年代 (年BP)	δ^{13}C (‰)	補正^{14}C年代 (年BP)	暦年代（西暦） （１σ:68%確率，２σ:95%確率）
No.1	201798	1310±40	-21.8	1360±40	交点：cal AD 660 １σ：cal AD 650～680 ２σ：cal AD 630～710

（１）１４Ｃ年代測定値

試料の１４Ｃ/１２Ｃ比から、単純に現在（AD1950年）から何年前かを計算した値。１４Ｃの半減期は、国際的慣例によりLibbyの5,568年を用いた。

（２）δ（デルタ）１３Ｃ測定値

試料の測定１４Ｃ/１２Ｃ比を補正するための炭素安定同位体比（１３Ｃ/１２Ｃ）。この値は標準物質（PDB）の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。

（３）補正１４Ｃ年代値

δ１３Ｃ測定値から試料の炭素の同位体分別を知り、１４Ｃ/１２Ｃの測定値に補正値を加えた上で算出した年代。試料のδ１３Ｃ値を-25(‰)に標準化することによって得られる年代である。

（４）暦年代

過去の宇宙線強度の変動による大気中１４Ｃ濃度の変動を較正することにより算出した年代（西暦）。calはcalibrationした年代値であることを示す。較正には、年代既知の樹木年輪の１４Ｃの詳細な測定値、およびサンゴのU-Th年代と１４Ｃ年代の比較により作成された較正曲線を使用した。

暦年代の交点とは、補正１４Ｃ年代値と較正曲線との交点の暦年代値を意味する。１σ（シグマ）（68％確率）と２σ（95%確率）は、補正１４Ｃ年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅を示す。

c．所見

加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定の結果、Ｃ区SD-10の20層では1,360±40年BP（１σの暦年代でAD650～680年）の年代値が得られた。なお、堆積物による年代測定結果は、その堆積物が生成された当時の年代を示しており、文化層としての年代観とは必ずしも一致しない場合がある。

【参考文献】

Stuiver et al. (1998), INTCAL98 Radiocarbon Age Calibration, Radiocarbon, 40, p.1041-1083.

中村俊夫　1999「放射性炭素法」『考古学のための年代測定学入門』古今書院　p.1-36.

第３節　植物珪酸体（プラント・オパール）分析

はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したものであり、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。また、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査も可能である（藤原・杉山，1984）。

ａ．試料

分析試料は、Ａ区東壁から採取された７点、Ｃ区南壁から採取された５点、９～10世紀頃の井戸とされるＳＤ５から採取された９点、中世の井戸とされるＳＤ25から採取された11点、および弥生時代後期～古墳時代とされる周溝状遺構のＳＬ２から採取された３点の計35点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。なお、層名は各地点において層相の変化ごとに付けられた番号であり、地点間の対応関係を示すものではない。

ｂ．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）

２）試料約１gに対し直径約40μmのガラスビーズを約0.02g添加（電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量）３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理

４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散

５）沈底法による20μm以下の微粒子除去

６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成

７）検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１gあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１g中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、ネザサ節は0.48、チマキザサ節・チシマザサ節は0.75、ミヤコザサ節は0.30である（杉山，2000）。タケ亜科については、植物体生産量の推定値から各分類群の比率を求めた。

ｃ．分析結果

（１）分類群

分析試料から検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表15・16および第110～114図に示した。

〔イネ科〕

イネ、イネ（穎の表皮細胞由来）、ムギ類（穎の表皮細胞）、キビ族型、ヨシ属、シバ属、スス

キ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族Ａ（チガヤ属など）、ウシクサ族Ｂ（大型）、ジュズダマ属

〔イネ科－タケ亜科〕

ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、チマキザサ節型（ササ属チマキザサ節・チシマザサ節など）、ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、未分類等

〔樹木〕

ブナ科（シイ属）、マンサク科（イスノキ属）、その他

（２）植物珪酸体の検出状況

１）Ａ区東壁（第110図）

Ⅶ層（試料７）からⅥ層（試料５、６）にかけては、ススキ属型が多く検出され、イネ、ヨシ属、ウシクサ族Ａ、ネザサ節型なども検出された。また、試料６ではブナ科（シイ属）などの樹木も検出された。イネの密度は700～1,500個/gと低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている3,000個/gを下回っている。Ｖ層（試料３、４）では、イネが大幅に増加しており、試料３では密度が14,900個/gとかなり高い値となっている。Ⅳ層（試料２）からⅢ層（試料１）にかけても、おおむね同様の結果であり、イネの密度は9,100個/gおよび13,300個/gとかなり高い値である。おもな分類群の推定生産量によると、おおむねススキ属型が優勢であり、Ｖ層～Ⅲ層ではイネも多くなっている。

２）Ｃ区南壁（第111図）

ＸＩ層（試料５）では、イネ、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族Ａ、ネザサ節型、および海綿骨針などが検出された。イネの密度は700個/gと低い値である。Ⅷ層（試料３、４）では、ススキ属型が大幅に増加しており、イネも増加している。イネの密度は、試料４では3,600個/gと比較的高い値である。Ⅱb層（試料２）からＩ層（試料１）にかけては、イネが大幅に増加しており、試料１ではムギ類（穎の表皮細胞）も検出された。イネの密度は、Ⅱb層（試料２）では4,500個/gと比較的高い値であり、Ｉ層（試料１）では12,700個/gとかなり高い値である。おもな分類群の推定生産量によると、Ⅷ層～Ⅱb層ではススキ属型、Ｉ層ではイネが優勢となっている。

３）ＳＤ５（第112図）

埋土底部の硬化層（試料13）では、イネが10,300個/gと多量に検出され、イネの籾殻（穎の表皮細胞）、ヨシ属、ススキ属型、ウシクサ族Ａ、および樹木のマンサク科（イスノキ属）なども検出された。埋土下部の21層（試料12）から埋土中位の10層（試料６）にかけても、おおむね同様の結果であり、19層（試料10）、13層（試料８）、10層（試料６）ではイネの密度が10,000個/g以上とかなり高い値である。また、10層（試料６）ではススキ属型も多く検出された。埋土上位の５層（試料５）から１層（試料１）にかけては、イネおよびイネの籾殻（穎の表皮細胞）に由来する植物珪酸体が多量に検出された。イネの密度は、２層（試料２）と１層（試料１）では３万個/g以上と極めて高い値であり、５層（試料５）でも１万個/g以上とかなり高い値である。また、イネの籾殻（穎の表皮細胞）の密度は、５層（試料５）と２層（試料２）では10万個/g以上、１層（試料１）でも

５万個/g以上と極めて高い値である。さらに、５層（試料５）ではムギ類（穎の表皮細胞）も4,500個/gと比較的多く検出された。おもな分類群の推定生産量によると、ほとんどの層準でイネが優勢であり、とくに２層と１層ではイネが圧倒的に卓越している。また、10層ではススキ属型も多くなっている。

４）ＳＤ25（第113図）

埋土底部の27層（試料13）から26層（試料11、12）にかけては、部分的にヨシ属やネザサ節型などが少量検出され、26層では海綿骨針が比較的多く検出された。25層（試料10）から22層（試料９）にかけては、ススキ属型やウシクサ族Ａなどが出現しており、25層（試料10）ではムギ類（穎の表皮細胞）も700個/gと少量検出された。20層（試料８）から４層（試料２）にかけては、ススキ属型やウシクサ族Ａが比較的多く検出され、イネ、ヨシ属、ネザサ節型なども検出された。イネの密度は、４層（試料２）では4,500個/gと比較的高い値であり、その他の試料では700～2,900個/gと比較的低い値である。１層（試料１）では、イネやススキ属型が増加しており、ウシクサ族Ａは減少している。イネの密度は5,800個/gと高い値である。おもな分類群の推定生産量によると、20層～４層ではおおむねヨシ属が優勢であり、部分的にイネやススキ属型も多くなっている。１層ではイネおよびススキ属型が優勢である。

５）ＳＬ２（第114図）

周溝状遺構の埋土（試料１～３）では、ススキ属型が多く検出され、イネ、シバ属、ウシクサ族Ａ、ネザサ節型なども検出された。イネの密度は700個/gと低い値である。おもな分類群の推定生産量によると、ススキ属型が優勢となっている。

ｄ．植物珪酸体分析から推定される植生と環境

（１）Ａ区東壁（第110図）

Ⅶ層～Ⅵ層の堆積当時は、ススキ属を主体としてメダケ属（ネザサ節）なども生育する日当りの良い草原的な環境であったと考えられる。また、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られ、調査地点もしくはその近辺では稲作が行われていたと推定される。

霧島高原スコリア（Kr-ThS，10～13世紀）下位のＶ層（遺物包含層）からⅢ層にかけては、継続的に稲作が行われていたと推定される。また、周辺にはススキ属を主体とした草原植生が分布していたと考えられ、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。

（２）Ｃ区南壁（第111図）

霧島高原スコリア（10～13世紀）下位のⅧ層（中世遺物包含層）から現表土のＩ層にかけては、おおむね継続して稲作が行われていたと考えられ、Ｉ層ではムギ類の栽培も行われていたと推定される。また、周辺にはススキ属を主体とした草原植生が分布していたと考えられ、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。

下位のＸＩ層（褐色砂質土）では、海綿動物に由来する海綿骨針（宇津川ほか，1979）が比較的多く検出されることから、当時は何らかの海水の影響を受けていた可能性が考えられる。

（３）ＳＤ５（第112図）

９～10世紀頃の井戸とされる遺構の埋土では、ほとんどの試料からイネが多量に検出され、とくに埋土上部では密度が３万個/g以上と極めて高い値である。また、イネの籾殻（穎の表皮細胞）に由来する植物珪酸体もほとんどの試料から検出され、埋土上部では密度が10万個/g以上と極めて高

表１　宮崎市、桜町遺跡における植物珪酸体分析結果
検出密度（単位：×100個/g）

分類群	学名	SD5 1	SD5 2	SD5 5	SD5 6	SD5 7	SD5 8	SD5 10	SD5 12	SD5 13	A区東壁 1	A区東壁 2	A区東壁 3	A区東壁 4	A区東壁 5	A区東壁 6	A区東壁 7	SL2 1	SL2 2	SL2 3
イネ科	Gramineae (Grasses)																			
イネ	*Oryza sativa*	340	354	113	129	23	111	127	30	103	133	91	149	80	15	7	8	7	7	7
イネ籾殻(穎の表皮細胞)	*Oryza sativa* (husk Phytolith)	533	1072	1103	7	8	15			15					7					
ムギ類(穎の表皮細胞)	*Hordeum-Triticum* (husk Phytolith)			45																
キビ族型	Paniceae type		17		14							14								
ヨシ属	*Phragmites*							7		7	20	7		15		27	15	7		
シバ属	*Zoysia*										13	7			7			7	7	
ススキ属型	*Miscanthus* type	15	34	135	172	8	96	89		15	153	195	285	240	236	107	137	102	111	66
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	37	17	11	72	38	96	97		44	20	49	39	36	74	53	15	51	15	37
ウシクサ族B	Andropogoneae B type													22	7	33		7	7	
ジュズダマ属	*Coix*																			
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)																			
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa					15	30	7			20	14	32	66	22	20	15	7	22	37
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.															7				
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi										7					7				7
マダケ属型	*Phyllostachys*										7									
未分類等	Others			23			7				27		6	15	7	27		15	15	7
その他のイネ科	Others																			
表皮毛起源	Husk hair origin	104	405	135	14		59			22	40	35	39	29	22	13		22		15
棒状珪酸体	Rod-shaped	585	700	484	351	38	532	321	45	251	139	258	603	576	421	207	46	139	103	220
茎部起源	Stem origin										7			7						
未分類等	Others	488	675	383	372	83	428	350	68	317	259	349	460	488	325	301	114	226	200	256
樹木起源	Arboreal																			
ブナ科(シイ属)	*Castanopsis*															7				
マンサク科(イスノキ属)	*Distylium*				7					7										
その他	Others		8													7			7	
(海綿骨針)	Sponge																15			
植物珪酸体総数	Total	2102	3283	2430	1138	210	1373	999	143	782	843	1019	1615	1574	1144	822	350	591	495	652

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²·cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	*Oryza sativa*	10.01	10.42	3.31	3.79	0.66	3.26	3.73	0.88	3.04	3.90	2.67	4.39	2.36	0.43	0.20	0.22	0.21	0.22	0.22
ヨシ属	*Phragmites*							0.47		0.47	1.26	0.44		0.92		1.69	0.96	0.46		
ススキ属型	*Miscanthus* type	0.18	0.42	1.67	2.13	0.09	1.19	1.11		0.18	1.89	2.42	3.54	2.98	2.93	1.33	1.70	1.27	1.37	0.82
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa					0.07	0.14	0.04			0.10	0.07	0.16	0.31	0.11	0.10	0.07	0.04	0.11	0.18
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.															0.05				
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi										0.02					0.02				0.02

タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus																			
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa					100	100	100			83	100	100	100	100	58	100	100	100	89
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.															30				
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi										17					12				11

表16 植物珪酸体分析結果②

検出密度（単位：×100個/g）

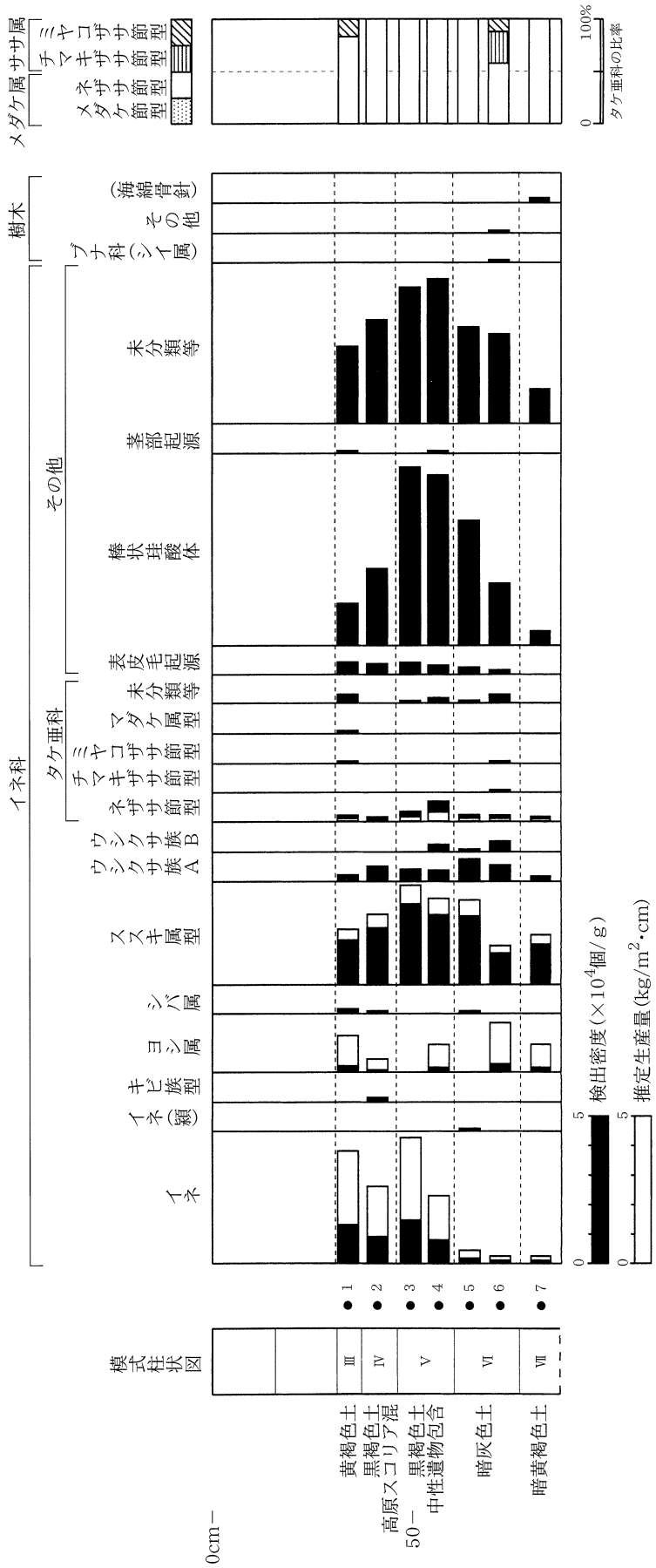
分類群	学名	SD25 1	SD25 2	SD25 3	SD25 5	SD25 7	SD25 8	SD25 9	SD25 10	SD25 11	SD25 12	SD25 13	C区南壁 1	C区南壁 2	C区南壁 3	C区南壁 4	C区南壁 5
イネ科	Gramineae (Grasses)																
イネ	*Oryza sativa*	58	45	15	15	7	29						127	45	15	36	7
イネ籾殻(穎の表皮細胞)	*Oryza sativa* (husk Phytolith)																
ムギ類(穎の表皮細胞)	*Hordeum-Triticum* (husk Phytolith)								7				7				
キビ族型	Paniceae type												7	15			
ヨシ属	*Phragmites*	7	7	15	15	7	29	7		7			15		7		7
シバ属	*Zoysia*												7		7		
ススキ属型	*Miscanthus* type	226	37	60	52	59	36	15	15				157	223	225	226	7
ウシクサ族A	Andropogoneae A type	15	90	112	60	37	43	44	7				45	45	150	58	37
ウシクサ族B	Andropogoneae B type			7	7									15		15	
ジュズダマ属	*Coix*		7				7	22									
タケ亜科	Bambusoideae (Bamboo)																
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	7	15	7	7	15	7	22	7	7		8	45		7		7
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.							7		15			15	7			
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi		7			7			7		8					7	15
マダケ属型	*Phyllostachys*																
未分類等	Others	15	7	30		7	29	7	7		8		7			15	7
その他のイネ科	Others																
表皮毛起源	Husk hair origin	44	30	22	30	7	64	7					97	30	75	15	
棒状珪酸体	Rod-shaped	509	427	584	217	257	515	252	37	15	8	8	507	438	651	357	111
茎部起源	Stem origin									15			15				
未分類等	Others	400	382	397	232	249	408	356	67	30	60	15	514	379	471	328	207
樹木起源	Arboreal																
ブナ科(シイ属)	*Castanopsis*																
マンサク科(イスノキ属)	*Distylium*				15												
その他	Others								7				7				
(海綿骨針)	Sponge	7		7	37	37	100	15	30	15	90		22			15	52
植物珪酸体総数	Total	1281	1055	1250	650	653	1166	741	164	90	83	30	1573	1196	1609	1056	406

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/m²·cm）：試料の仮比重を1.0と仮定して算出

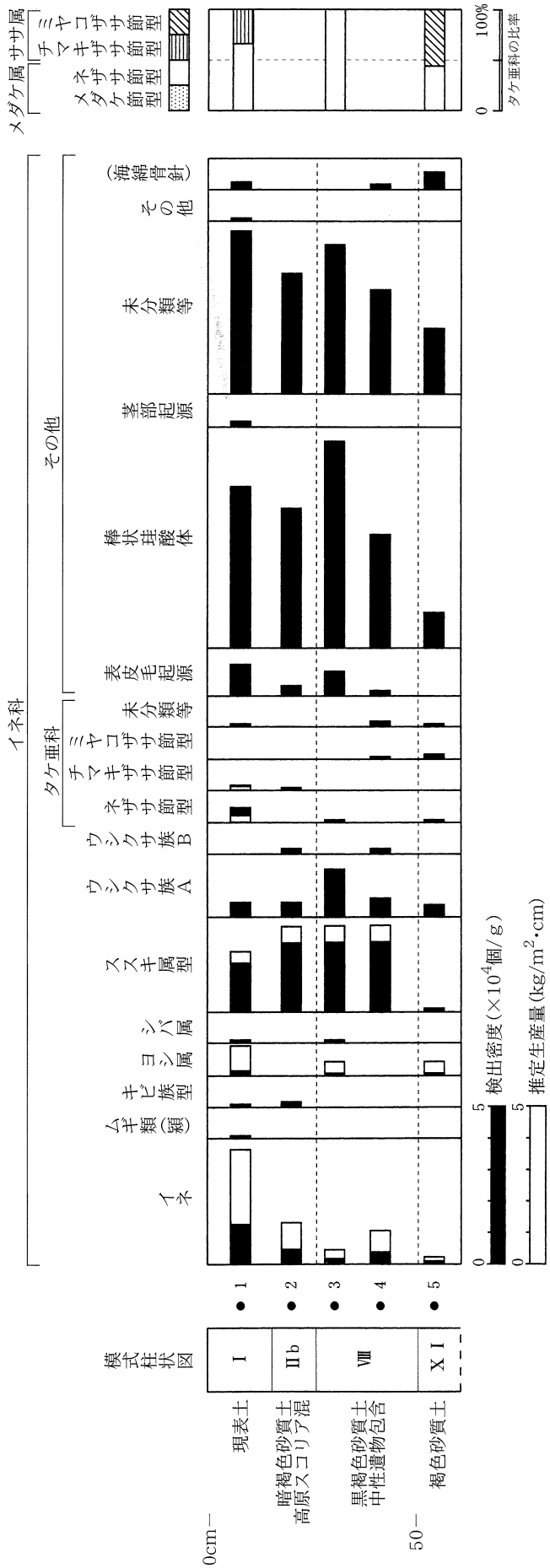
イネ	*Oryza sativa*	1.71	1.32	0.44	0.44	0.22	0.84						3.72	1.31	0.44	1.07	0.22
ヨシ属	*Phragmites*	0.46	0.47	0.94	0.94	0.46	1.81	0.47		0.47			0.94		0.47		0.47
ススキ属型	*Miscanthus* type	2.80	0.46	0.74	0.65	0.73	0.44	0.18	0.19				1.94	2.76	2.78	2.80	0.09
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	0.03	0.07	0.04	0.04	0.07	0.03	0.11	0.04	0.04		0.04	0.21		0.04		0.04
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.							0.06		0.11			0.11	0.06			
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi		0.02			0.02			0.02		0.02					0.02	0.04

タケ亜科の比率（%）

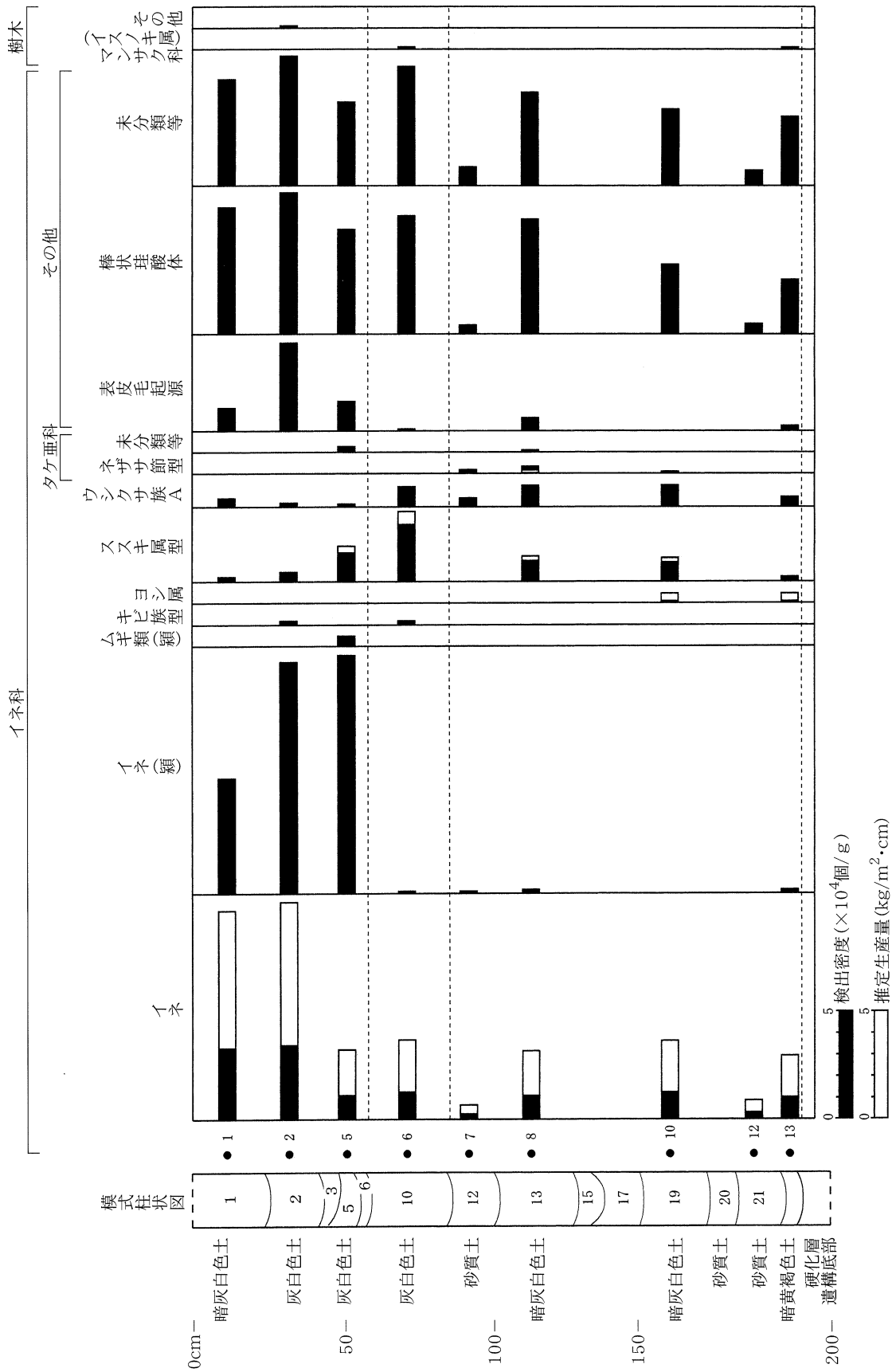
メダケ節型	*Pleioblastus* sect. Nipponocalamus																
ネザサ節型	*Pleioblastus* sect. Nezasa	100	76	100	100	76	100	66	62	24		100	66		100		44
チマキザサ節型	*Sasa* sect. Sasa etc.							34		76			34	100			
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi		24			24			38		100					100	56



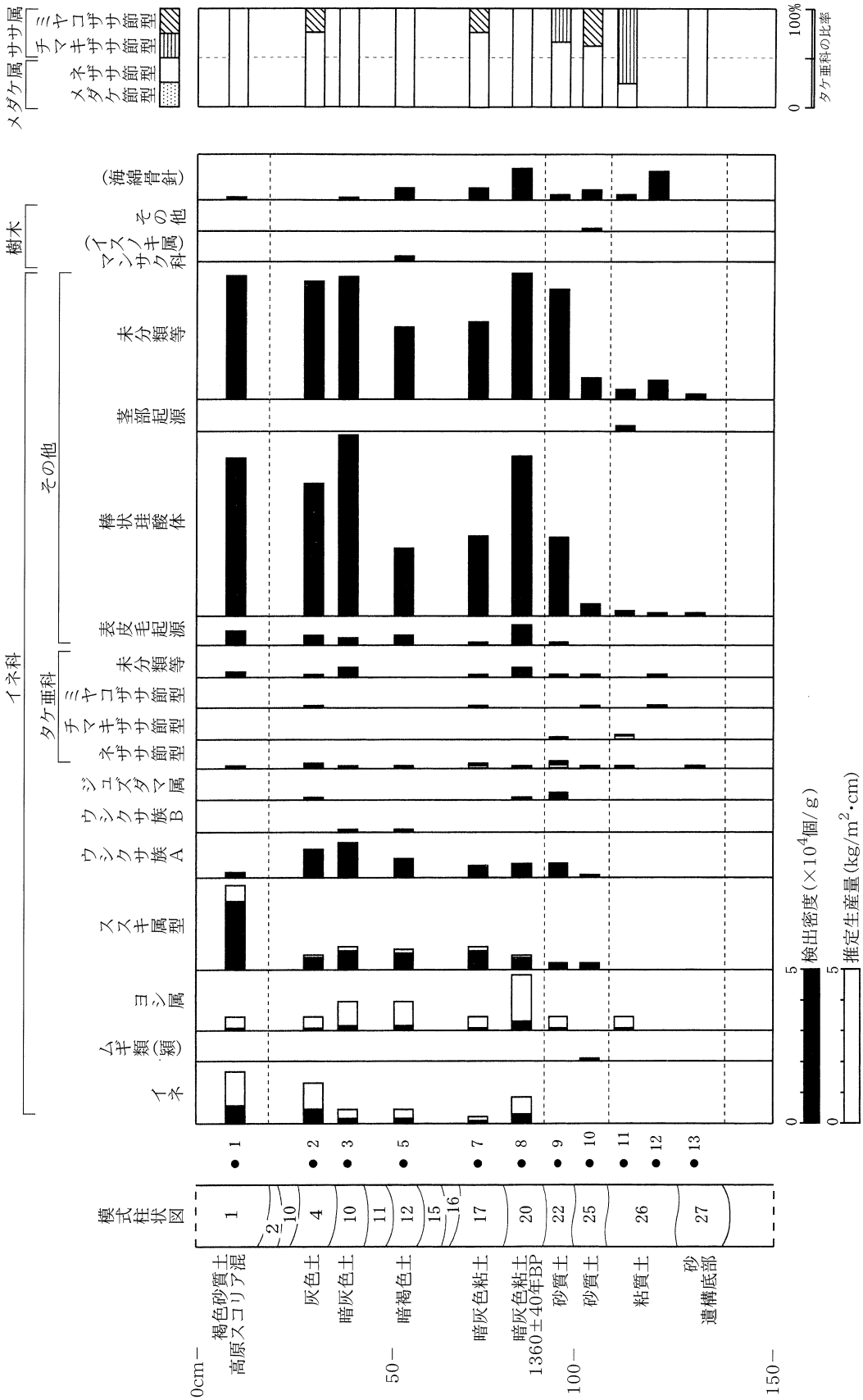
第110図　A区東壁における植物珪酸体分析結果



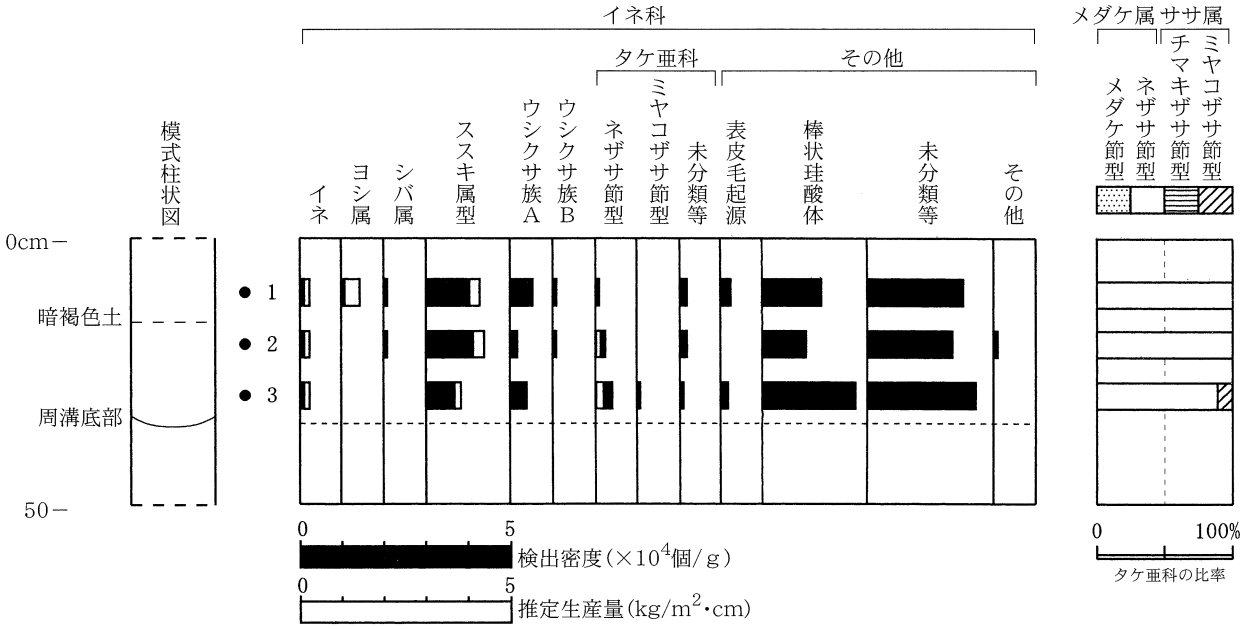
第111図　C区南壁における植物珪酸体分析結果



第112図　SD5における植物珪酸体分析結果



第113図　SD25における植物珪酸体分析結果



第114図　SL2における植物珪酸体分析結果

い値である。さらに、一部の試料ではムギ類（穎の表皮細胞）も認められた。

以上のことから、当時は周辺で稲作およびムギ類の栽培が行われており、何らかの形で大量の稲藁や籾殻が遺構内に混入したと考えられる。なお、埋土上位の試料は灰白色の灰化物状であることから、稲藁や籾殻の焼却灰が何らかの形で遺構内に入れられていた可能性も考えられる。

（４）ＳＤ25（第113図）

中世の井戸とされる遺構の埋土底部の堆積当時は、何らかの原因でイネ科植物の生育にはあまり適さない環境であったと推定される。同層準では海綿骨針が比較的多く検出されることから、何らかの海水の影響を受けていた可能性が考えられる。なお、珪藻分析（第Ｖ章）でも、同層準では汽－海水生種が卓越しており、海水ないし塩水が滞水するような状況が推定されている。

放射性炭素年代測定で1,360±40年BPの年代値が得られた埋土中位の20層から霧島高原スコリア（10～13世紀）混の１層にかけては、周辺で稲作が行われていたと考えられ、そこから何らかの形で遺構内にイネの植物珪酸体が混入したと推定される。また、埋土下部の25層の時期にはムギ類の栽培も行われていたと考えられる。当時の遺構周辺は、おおむねヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、周囲にはススキ属やチガヤ属が生育する草原的なところなども分布していたと推定される。

（５）ＳＬ２（第114図）

弥生時代後期～古墳時代とされる周溝状遺構の埋土の堆積当時は、周辺で稲作が行われていたと考えられ、そこから何らかの形で遺構内にイネの植物珪酸体が混入したと推定される。当時の遺構周辺は、ススキ属やチガヤ属を主体として、シバ属やメダケ属（ネザサ節）なども生育する草原的な環境であったと考えられる。

ｅ．まとめ

霧島高原スコリア（10～13世紀）下位の遺物包含層から現表土にかけては、おおむね継続して稲作が行われていたと考えられ、弥生時代後期～古墳時代とされる周溝状遺構の埋土、９～10世紀頃および中世の井戸とされる遺構の埋土の堆積当時も、周辺で稲作が行われていたと推定される。また、部分的にムギ類が栽培されていた可能性も認められた。９～10世紀頃の井戸とされるＳＤ５については、何らかの形で稲藁や籾殻（もしくはその焼却灰）が大量に入れられていたと推定される。

当時の調査区周辺は、ススキ属を主体とした日当りの良い草原的な環境であったと考えられ、部分的にヨシ属などが生育する湿地的なところも見られたと推定される。

【参考文献】

宇津川徹・細野衛・杉原重夫1979「テフラ中の動物珪酸体〝Opal Sponge Spicules〟について」『ペドロジスト』23(2) p.134-144.

杉山真二 1987「タケ亜科植物の機動細胞珪酸体」『富士竹類植物園報告』31 p.70-83.

杉山真二 1999「植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史」『第四紀研究』38(2) p.109-123.

杉山真二 2000「植物珪酸体（プラント・オパール）」『考古学と植物学』同成社 p.189-213.

藤原宏志 1976「プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法－」『考古学と自然科学』9 p.15-29.

藤原宏志・杉山真二　1984「プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－」『考古学と自然科学』17，p.73-85.

第４節　花粉分析

はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

ａ．試料

分析試料は、中世の井戸とされるＳＤ25の埋土から採取された２点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

ｂ．方法

花粉粒の分離抽出は、中村（1973）の方法をもとに、以下の手順で行った。

１）0.5％りん酸三ナトリウム（12水）溶液を加え15分間湯煎する。

２）水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去

３）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置

４）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す

５）再び氷酢酸を加えて水洗処理

６）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成

７）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。イネ属については、中村（1974，1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

ｃ．結果

（１）分類群

出現した分類群は、樹木花粉29、樹木花粉と草本花粉を含むもの２、草本花粉16、シダ植物胞子２形態の計49である。分析結果を表17に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記す。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、スギ、コウヤマキ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤマモモ属、サワグルミ、ハンノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属－マテバシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、シキミ属、サンショウ属、キハダ属、モチノキ属、カエデ属、ムクロジ属、

シナノキ属、グミ属、トネリコ属、イスノキ属

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

クワ科－イラクサ科、マメ科

〔草本花粉〕

ガマ属－ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、カヤツリグサ科、ホシクサ属、タデ属サナエタデ節、ナデシコ科、アブラナ科、ワレモコウ属、アリノトウグサ属－フサモ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物胞子〕

単条溝胞子、三条溝胞子

（２）花粉群集の特徴

埋土底部付近の26層（試料12）では、樹木花粉の占める割合が草本花粉より高い。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属、シイ属－マテバシイ属が優勢であり、コナラ属コナラ亜属、エノキ属－ムクノキなどが伴われる。草本花粉では、イネ科がやや優勢であり、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが伴われる。

埋土下部の20層（試料８）では、樹木花粉より草本花粉の占める割合が高い。草本花粉では、イネ属型を含むイネ科、カヤツリグサ科が優勢であり、ヨモギ属、オモダカ属などが伴われる。樹木花粉では、コナラ属アカガシ亜属が優勢であり、シイ属－マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属などが伴われる。

ｄ．考察

中世の井戸とされるＳＤ25の埋土底部の26層の堆積当時は、おもにカシ類（コナラ属アカガシ亜種）、シイ類（シイ属－マテバシイ属）などの照葉樹林が分布していたと考えられ、その縁辺部などにイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などの草本類が生育していたと推定される。

埋土下部の20層の堆積当時は、周辺で水田稲作が行われていたと考えられ、その周囲にはイネ科、カヤツリグサ科、オモダカ属などが生育する湿地的なところが分布していたと推定される。また、遺跡周辺にはカシ類やシイ類などの照葉樹林が分布していたと考えられる。

【参考文献】

金原正明　1993「花粉分析法による古環境復原」『新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法』角川書店 p.248-262.

島倉巳三郎　1973「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第５集　60p.

中村純　1973『花粉分析』古今書院　p.82-110.

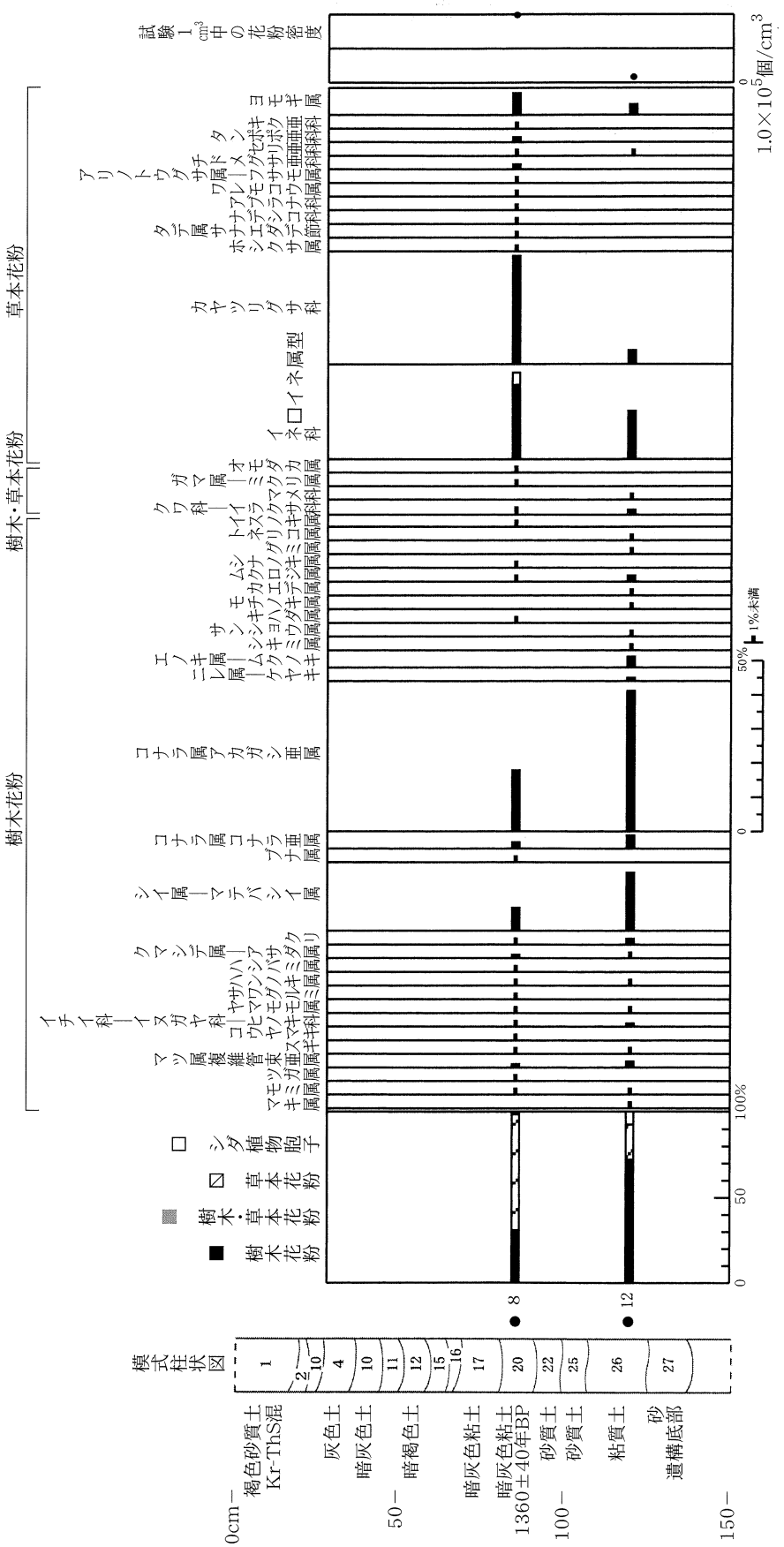
中村純　1980「日本産花粉の標徴」『大阪自然史博物館収蔵目録』第13集　91p.

中村純　1974「イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として」『第四紀研究』13　p.187-193.

中村純　1977「稲作とイネ花粉」『考古学と自然科学』第10号　p.21-30.

表17　花粉分析結果

分類群		C区SD10	
学名	和名	試料8	試料12
Arboreal pollen	樹木花粉		
Podocarpus	マキ属		1
Abies	モミ属	1	3
Tsuga	ツガ属	2	
Pinus subgen. *Diploxylon*	マツ属複維管束亜属	7	8
Cryptomeria japonica	スギ	1	1
Sciadopitys verticillata	コウヤマキ	1	
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	1	5
Myrica	ヤマモモ属	1	4
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ	1	
Alnus	ハンノキ属	1	2
Corylus	ハシバミ属	1	
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属-アサダ	7	2
Castanea crenata	クリ	1	8
Castanopsis-Pasania	シイ属-マテバシイ属	45	81
Fagus	ブナ属	1	
Quercus subgen. *Lepidobalanus*	コナラ属コナラ亜属	12	18
Quercus subgen. *Cyclobalanopsis*	コナラ属アカガシ亜属	120	197
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属-ケヤキ		5
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属-ムクノキ		15
Illicium	シキミ属		1
Zanthoxylum	サンショウ属		2
Phellodendron	キハダ属	1	
Ilex	モチノキ属		1
Acer	カエデ属		3
Sapindus	ムクロジ属	2	8
Tilia	シナノキ属	1	
Elaeagnus	グミ属		1
Fraxinus	トネリコ属		1
Distylium	イスノキ属	1	
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉		
Moraceae-Urticaceae	クワ科-イラクサ科	3	5
Leguminosae	マメ科		1
Nonarboreal pollen	草本花粉		
Typha-Sparganium	ガマ属-ミクリ属	1	
Sagittaria	オモダカ属	1	
Gramineae	イネ科	148	68
Oryza type	イネ属型	24	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	213	19
Eriocaulon	ホシクサ属	2	
Polygonum sect. *Persicaria*	タデ属ササエタデ節	1	
Caryophyllaceae	ナデシコ科	1	
Cruciferae	アブラナ科	2	
Sanguisorba	ワレモコウ属	2	
Haloragis-Myriophyllum	アリノトウグサ属-フサモ属	1	
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科	10	
Apioideae	セリ亜科	2	4
Lactucoideae	タンポポ亜科	10	
Asteroideae	キク亜科	3	
Artemisia	ヨモギ属	43	15
Fern spore	シダ植物胞子		
Monolate type spore	単条溝胞子	6	29
Trilate type spore	三条溝胞子	3	9
Arboreal pollen	樹木花粉	208	367
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	3	6
Nonarboreal pollen	草本花粉	464	106
Total pollen	花粉総数	675	479
Pollen frequencies of $1cm^3$	試料$1cm^3$中の花粉密度	9.9×10^4	8.4×10^3
Unknown pollen	未同定花粉	4	6
Fern spore	シダ植物胞子	9	38
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)



第115図　SD25における花粉ダイアグラム

第５節　珪藻分析

はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

ａ．試料

分析試料は、中世の井戸とされるＳＤ25の埋土から採取された２点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

ｂ．方法

以下の手順で珪藻を抽出し、プレパラートを作成した。

１）試料から１cm^3を秤量

２）10％過酸化水素水を加え、加温反応させながら１晩放置

３）上澄みを捨て、細粒のコロイドと薬品を水洗（５～６回）

４）残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下して乾燥

５）マウントメディアによって封入し、プレパラート作成

６）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600～1500倍行った。計数は珪藻被殻が100個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

ｃ．結果

（１）分類群

分析の結果、中－真塩性種（汽－海水生種）10分類群、貧－中塩性種（淡－汽水生種）２分類群、貧塩性種（淡水生種）62分類群が検出された。分析結果を表18に示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを第116図に示す。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記す。

〔貧塩性種〕

Amphora copulata、*Cymbella amphioxys*、*Cymbella gracilis*、*Cymbella naviculiformis*、*Cymbella silesiaca*、*Eunotia circumborealis*、*Frustulia rhomboides* v. *saxonica*、*Gomphonema gracile*、*Gomphonema parvulum*、*Navicula constans*、*Navicula elginensis*、*Navicula pupula*、*Navicula* spp.、*Navicula viridula* v. *rostellata*、*Nitzschia palea*、*Pinnularia gibba*、*Pinnularia microstauron*、*Pinnularia viridis*

〔貧－中塩性種〕

Rhopalodia gibberula

〔中－真塩性種〕

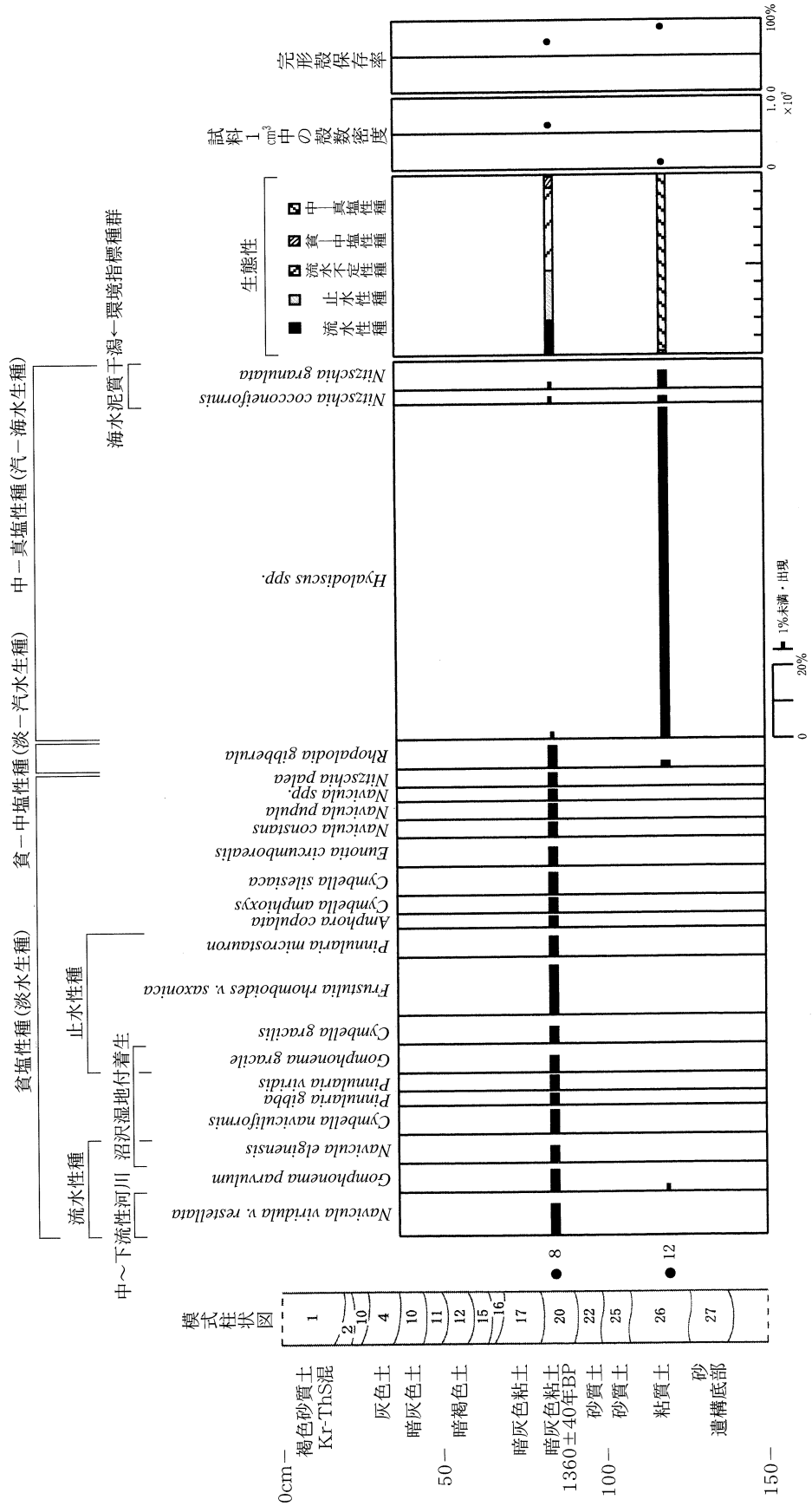
Hyalodiscus spp.、*Nitzschia cocconeiformis*、*Nitzschia granulata*

（２）珪藻群集の特徴

埋土底部の26層（試料12）では、中－真塩性種（汽－海水生種）が卓越しており、沿岸に生育する真塩性種（海水生種）の*Hyalodiscus* spp.が優占し、海水泥質干潟環境指標種群の*Nitzschia coc*

表18　珪藻分析結果

分類群	C区SD10 試料8	C区SD10 試料12
貧塩性種（淡水生種）		
Achnanthes lanceolata		1
Amphora copulata	6	
Amphora spp.		1
Anomoeoneis spp.	5	
Caloneis hyalina	3	
Caloneis lauta	1	
Caloneis molaris	1	
Caloneis silicula	4	
Cyclotella spp.	1	
Cymbella amphioxys	8	
Cymbella cesatii	5	
Cymbella cuspidata	1	
Cymbella gracilis	9	
Cymbella minuta	2	
Cymbella naviculiformis	13	
Cymbella silesiaca	12	
Cymbella spp.	2	
Cymbella subaequalis	1	
Diploneis elliptica	2	
Diploneis spp.	3	
Diploneis subovalis	2	
Diploneis yatukaensis	3	
Eunotia bilunaris	3	
Eunotia circumborealis	10	
Eunotia diodon	1	
Eunotia gracialis	5	
Eunotia monodon v. *tropica*	2	
Eunotia pectinalis	1	
Eunotia praerupta	1	
Frustulia rhomboides v. *saxonica*	27	
Frustulia vulgaris	4	
Gomphonema clevei		1
Gomphonema globiferum	4	
Gomphonema gracile	9	
Gomphonema parvulum	12	1
Gomphonema sphaerophorum	2	
Gomphonema spp.	2	
Navicula constans	8	
Navicula contenta	1	1
Navicula cuspidata	4	
Navicula elginensis	9	
Navicula laevissima	4	
Navicula mutica	1	
Navicula pupula	8	
Navicula spp.	6	
Navicula viridula v. *rostellata*	17	
Neidium affine	1	
Neidium ampliatum	2	
Neidium hitchcockii	1	
Nitzschia palea	7	
Pinnularia acrosphaeria	2	
Pinnularia braunii	3	
Pinnularia gibba	6	
Pinnularia interrupta	4	
Pinnularia leptosoma	1	
Pinnularia microstauron	11	
Pinnularia subcapitata	5	
Pinnularia viridis	8	
Stauroneis anceps	1	
Stauroneis lauenburgiana	1	
Stauroneis phoenicenteron	1	
Tabellaria fenestrata-flocculosa	1	
貧-中塩性種（淡-汽水生種）		
Achnanthes brevipes	1	3
Rhopalodia gibberula	12	6
中-真塩性種（汽-海水生種）		
Caloneis westii	1	1
Diploneis smithii		4
Grammatophora macilenta		1
Hyalodiscus spp.	1	322
Nitzschia cocconeiformis	1	6
Nitzschia granulata	1	17
Nitzschia levidensis v. *victoriae*	1	
Nitzschia sigma	4	
Paralia sulcata		2
Rhaphoneis surirella		1
合　計	302	368
未同定	13	4
破片	143	49
試料1 cm^3 中の殻数密度	6.1 $\times 10^6$	9.0 $\times 10^5$
完形殻保存率（%）	68.8	88.4



第116図　SD25における主要珪藻ダイアグラム

coneiformis、*Nitzschia granulata*などが伴われる。

埋土下部の20層（試料８）では、貧塩性種（淡水生種）が卓越しており、流水性種の*Navicula viridula* v. *rostellata*、*Navicula elginensis*、*Gomphonema parvulum*、止水性種の*Frustulia rhomboides* v. *saxonica*、*Cymbella gracilis*、*Gomphonema gracile*、流水不定性種の*Cymbella naviculiformis*、*Cymbella silesiaca*、*Eunotia circumborealis*など多様な分類群が出現する。

ｄ．珪藻分析から推定される堆積環境

中世の井戸とされるＳＤ25の埋土底部の26層では、汽－海水生種の珪藻が卓越していることから、当時は海水ないし塩水が滞水するような状況であったと考えられ、何らかの海の影響を受けていた可能性が考えられる。

埋土下部（20層）では、淡水生種が卓越しており、流水性種、止水性種、沼沢湿地付着生種群など多様な分類群が認められることから、遺構周辺の水田域の環境が反映されていると考えられる。

【参考文献】

安藤一男　1990「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『東北地理』42　p.73-88.

小杉正人　1988「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』27　p.１-20.

Asai,K.&,Watanabe,T.(1995)Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relaiting to Organic Water Pollution(２) Saprophilous and saproxenous taxa.Diatom,10,p.35-47.

Hustedt,F.(1937-1938)Systematische und ologishe Untersuchungen uber die DiatomeenFlora von Java,Bali und Sumatra nach dem Material der Deutschen Limnologischen Sunda-Expedition. Arch.Hydrobiol,Suppl.15,p.131-506.

Lowe,R.L.(1974)Environmental Requirements and pollusion tolerance of fresh-water diatoms. 333p., National Environmen - tal Reserch.Center.

Patrick, R.eimer, C. W.(1966) The diatom of the United States, vol. 1 . Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 644p.

Patrick, R.eimer, C. W.(1975) The diatom of the United States, vol. 2 . Monographs of Natural Sciences of Philadelphia, No.13, The Academy of Natural Siences of Philadelphia, 213p.

第６節　蛍光Ｘ線分析

はじめに

物質にＸ線を照射すると、その物質を構成している元素に固有のエネルギー（蛍光Ｘ線）が放出され、この蛍光Ｘ線を分光して波長と強度を測定することで、物質に含まれる元素の種類と量を調べることができる。

ａ．試料

分析試料は、９～10世紀頃の井戸とされるＳＤ５の遺構底部の硬化面およびその直下層の２点である。

ｂ．分析方法

エネルギー分散型蛍光Ｘ線分析システム（日本電子㈱製，JSX3201）を用いて、元素の同定およびファンダメンタルパラメータ法（FP法）による定量分析を行った。FP法は装置定数や物理的な基礎

パラメータをもとに理論的に蛍光X線強度を算出する方法であり、精密な定量分析が可能である。以下に分析の手順を示す。

1）試料を絶乾（105℃・24時間）

2）試料を粉砕後、塩化ビニール製リング枠に入れ、圧力15t/・でプレスして錠剤試料を作成

3）測定時間600秒、照射径20mm、電圧30kV、試料室内真空の条件で測定

X線発生部の管球はロジウム（Rh）ターゲット、ベリリウム（Be）窓、X線検出器はSi（Li）半導体検出器である。

c．分析結果

各元素の定量分析結果（wt%）を表19および第117図に示す。

d．考察

分析の結果、遺構底部の硬化面では、珪酸（SiO_2）の含量が46.5%、鉄（Fe_2O_3）が29.3%、アルミニウム（Al_2O_3）が14.1%、カルシウム（CaO）が3.4%などであり、珪酸が主成分となっている。また、通常の土壌と比較して鉄（Fe_2O_3）の含量が高いのが特徴的であり、マンガン（MnO）は0.4%と低い値である。鉄（Fe_2O_3）の含量は、硬化面の直下層では25.3%であり、硬化面の方が明らかに高い値となっている。

以上の結果から、9～10世紀頃の井戸とされるSD5の遺構底部の硬化面は、地下水の影響など何らかの原因で鉄分が集積して形成されたものと考えられる。

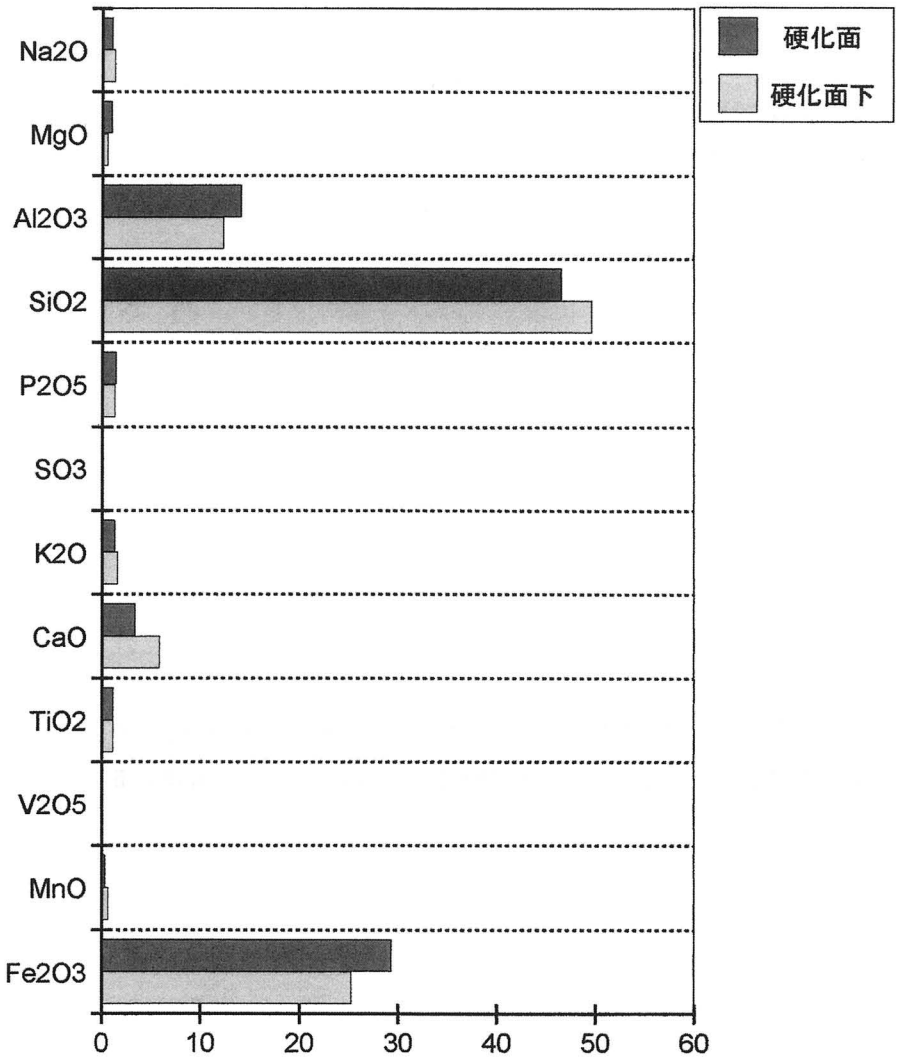
【参考文献】

小野寺 浩・安東和人　1995『エネルギー分散型蛍光X線分析装置JSX3200の紹介』日本電子(株)　25p.

表19　蛍光X線分析結果

単位：wt(%)

原子No.	化学式	SD5底部 硬化面	SD5底部 硬化面下
11	Na_2O	1.069	1.342
12	MgO	1.035	0.585
13	Al_2O_3	14.116	12.293
14	SiO_2	46.531	49.622
15	P_2O_5	1.423	1.327
16	SO_3	0.082	0.120
19	K_2O	1.352	1.596
20	CaO	3.382	5.865
22	TiO_2	1.149	1.169
23	V_2O_5	0.160	0.074
25	MnO	0.368	0.698
26	Fe_2O_3	29.334	25.310



第117図　SD5における蛍光X線分析（wt%）

第Ⅳ章　総括

最後に、前章までに列挙した事実の二、三に若干の考察を加えて、まとめに換えたい。

第１節　弥生時代の周溝状遺構に関して

今回の調査によって検出された周溝状遺構群から得られた知見は二つ、ひとつは各周溝状遺構が比較的長期に渡り存続していたこと、もうひとつは周溝状遺構が単体で使用されるだけでなく、「群」として使用される、いわば並存の状態にあったことである。

a．遺構の存続期間

検出された 13 基の周溝状遺構においては、同一遺構内出土の遺物に時期差が存在する。多くは、土器型式にして３ないし４段階にわたる差異であり、これは１基、２基の周溝状遺構においてのみ見られることではない。13 基の周溝状遺構中、９基の周溝状遺構において遺物の時期差が存在しており、そうである以上、遺物の示すとおり、比較的長期にわたり、各周溝状遺構の使用が行われたことを想定する必要がある。

ここで問題となるのは「いつからいつまでか」という始点と終点の確定である。終点に関しては、庄内式並行段階に比定されるものを最新の遺物とする周溝状遺構が多く、「群」としての使用はこの時期を最後とすることはほぼ間違いない。しかし始点に関しては、多少、煩雑な問題を含む。

ＳＬ６（以下、ＳＬは周溝状遺構を表す）、ＳＬ７では弥生時代中期前半まで遡る甕の口縁部が、各１点ずつ出土している。しかし、これにより周溝状遺構の使用が中期前半に開始されたと即断するのは危険である。これらは細片であり、同一個体と思しき資料は、各遺構より得られていない。またＳＬ６、ＳＬ７はもとより、他の周溝状遺構においても、これに前後する時期の遺物はまったく出土しておらず、出土遺物に時間的な連続性がないのである。

また、これら資料をとりまく状況のみならず、ＳＬ６、ＳＬ７より出土した中期前半の遺物そのものについても、信用度が高い資料とは言えない。ＳＬ７より出土した資料は、遺構内埋土最上層からの出土であり、「流れ込み」によると判断される可能性は高い。一方のＳＬ６出土の資料は、40 ㎝の堆積である遺構内埋土中、底面より 12 ㎝の高さで検出されたものであるが、これについても流れ込みによる可能性は否定できない。先述のとおり、同一遺構内出土遺物に時期差が存在するという事実より、各周溝状遺構が長期にわたり存続していたことが想定されるのであるが、このことは同時に、遺構の時期判定材料としての遺物の信用度を下げることにもつながる。遺構が長期にわたり使用されていたのであれば、それだけ、本来その遺構に伴うものではない遺物が混入する危険性が増すからであり、それは遺物の出土位置が埋土上位であろうが、遺構底面であろうが予想されることである。

資料が細片であり、遺構内に同一個体の存在しないこと、遺物に時間的な連続性がないことなど、状況証拠も不足する以上、この中期前半に比定される２点については、除外して考えざるをえない。これらを外せば、周溝状遺構より出土する資料中、最古のものの多くは後期前葉ないし中葉に比定されるものであり、その後の時間的な連続性もある。始点は後期前半にある

とすれば、蓋然性は高い。ただし、宮崎県地域における弥生土器の編年研究においては、昨今、中期に位置づけられる資料の見直しが進められつつあり、今後の進展如何によっては今回除外した資料の再評価が必要となることも考えられる。

b．遺構の並存

桜町遺跡の周溝状遺構は、それ単体で成立しているものは少ない。ＳＬ３、ＳＬ４、ＳＬ６、ＳＬ10、ＳＬ11 は辺の一部、ないしすべてを他の周溝状遺構と重複させており、またＳＬ４、ＳＬ５、ＳＬ９は、他の周溝状遺構の存在を前提として構築されていることが、平面形から読み取れる。特に、ＳＬ５に至っては他の周溝状遺構の周溝部を利用することで内郭部を成立させている。また埋土堆積を観察すると、ＳＬ４とＳＬ５、ＳＬ４とＳＬ６、ＳＬ６とＳＬ10、ＳＬ９とＳＬ10、ＳＬ10 とＳＬ11 が、それぞれ埋土の一部を共有させており、一定期間、並存の状態にあったことが知れる。ＳＬ10 とＳＬ11 においては、遺構間において土器の接合関係が見られ（第 28 図）、遺構並存の期間のあったことは確実である。

c．周溝状遺構の性格

周溝状遺構は北陸地方から南九州まで、広く分布しており、その用途については、周溝墓、祭祀施設、住居等、様々な説があり、未だ定まっていない。

桜町遺跡において検出された周溝状遺構のあり方を見ると、いずれの周溝状遺構においても、内郭部に土壙やそれに準じる施設は検出されず、周溝墓である可能性はきわめて低いものと考えられる。

住居として使用された可能性も低い。内郭部に、明確に伴う柱穴の検出されなかったことや、各遺構の使用期間が比較的長期にわたること、また併存しながらも連結・重複するという、群として存在していることなどから住居とは考えにくい。

残る可能性は祭祀施設としての機能である。器台や浅鉢、柄杓形土製品、小形土器などの日常生活に用いられたものではない器種や精製品の多いこと、桜町遺跡の位置する宮崎平野南部では主体的ではない調整技法であるタタキが、出土した甕の多くに用いられていたことなど、出土遺物の構成を見ても、周溝状遺構が日常的ではない、特殊な空間として認知され、使用されていたことが窺がえる。

各可能性からの消去法的検討および出土遺物の構成から、少なくとも桜町遺跡の周溝状遺構群は、祭祀施設として機能していたと考える。なお他遺跡、他地域の周溝状遺構では、桜町遺跡の周溝状遺構とは立地や構成が異なる場合も多く、地域によって周溝状遺構の性格が異なる可能性も考慮する必要があろう。

第２節　弥生時代の土坑群に関して

今回の調査において 47 基の土坑が検出されているが、うち 31 基は弥生時代に属するものである。うちＳＤ15（以下、ＳＤは土坑を表わす）、ＳＤ16、ＳＤ17 の３基は弥生時代中期前半まで遡るものであるが、残る土坑の大半は弥生時代後期前葉から庄内式並行段階の範疇に収まるものであり、周溝状遺構群の存続期間と一致している。

出土した土器の器種構成を見ると、タタキを施した甕（ＳＤ７、ＳＤ12、ＳＤ18、ＳＤ20、ＳＤ28）や、高坏、器台、脚付の鉢、浅鉢など（ＳＤ１、ＳＤ７、ＳＤ13、ＳＤ21、ＳＤ22、ＳＤ24、ＳＤ28、ＳＤ30）が目につく。これらは堅果類等を貯蔵するに適した器でもなく、また器台や浅鉢、脚付の鉢などは、日常生活に用いられた仮器とも考えにくい。くわえて、食物保存のための貯蔵穴であれば、日常生活の場に隣接して構築されるのが普遍的であるが、今回の調査範囲においては、住居址等の日常生活にともなう痕跡が、まったく検出されていない。したがって、これら土坑群の機能については、食物保存のための貯蔵穴ではなく、器物格納のための貯蔵穴、もしくは土器廃棄のための土坑かと思われる。もっとも、ＳＤ33、ＳＤ34、ＳＤ36、ＳＤ46の４基の土坑については、出土土器の主体が壷であり、これらについては食物保存のための貯蔵穴として機能していた可能性も否定はできない。

多くの土坑より出土したタタキ甕、高坏、器台、脚付の鉢、浅鉢などの器種構成は、周溝状遺構と共通するものである。はなはだ短絡的ではあるが、これら土坑群は周溝状遺構で行う祭祀に用いられる土器類を収納しておくため、ないし周溝状遺構における祭祀に使用された土器類を廃棄するために使用されていたと考えたい。

第３節　弥生時代桜町遺跡の位置づけ

今回の調査によって検出された弥生時代の遺構は、いくつかのピットを除けば、周溝状遺構群と土坑群の２種だけであり、住居址等の生活痕跡は皆無であった。このことから、桜町遺跡は通常の集落遺跡とは異なる、やや特異な性格を持った場であったと考えられる。

立地的な面から見てみると、第Ｉ章に述べたとおり、桜町遺跡の位置する一帯は、内陸側の丘陵地帯と海側の砂丘列とに挟まれた堤間低地であり、桜町遺跡はこの低地中に存在する東西110m、南北 210mの南北に長い微高地上にある。現在、桜町遺跡の北方には水田地帯が広がるが、南方には多くの住宅が立ち並び、近年、開発の進む地域のひとつである。

昭和 20 年代の地図を見ると、桜町遺跡の微高地周辺は、一面の低地水田地帯である。おそらくは弥生時代当時の状況もほぼ同じようなものであったと思われる。周溝状遺構の埋土中よりイネのプラント・オパールが検出されていることからも（第Ⅳ章　第３節）、遺跡周辺が水田地帯であった可能性は高い。つまり弥生時代の桜町遺跡一帯は、生業（水田耕作）空間としてあったのであり、桜町遺跡は、その生業空間中における祭祀の場として機能していたと考えられる。祭祀の中心をなしたと考えられる周溝状遺構については、その構造や鎖状に連なるあり方から、方形周溝墓との共通性が見えるものの、遺跡周辺の環境から考えて、祭祀の内容は「死」にまつわるものではなく、五穀豊穣の祈りなど、生業に関するものであったと思われる。

蛇足ではあるが、桜町遺跡が生業空間中の祭祀の場として考えられるならば、遺跡を形成した人々の生活空間はどこにあったのであろうか。現時点において確定はできないが、最も可能性が高いのは、桜町遺跡の東１km の距離において横たわる第１砂丘（下田島Ｉ面上）である。この砂丘上には、弥生時代から古墳時代の遺跡（包蔵地）が多数所在しており、当然、これらの遺跡を形成した人々の生業空間は、砂丘列の東西に存在する堤間低地中にあったと考えられ

る。したがって、この砂丘列上の遺跡のひとつ（ないし複数）が桜町遺跡を形成した人々の生活空間であった可能性は高い。

第４節　古代の井戸祭祀に関して

今回の調査においては、古代の井戸が３基確認され、うちＳＤ５（以下、ＳＤは土坑を表わす）、ＳＤ10 では、遺構埋土の上層から下層まで、大量の土師器が入れられていた。さらに、ＳＤ10 においては管状の植物質が埋土に挿入されており、井戸廃棄時に、井神祭祀の行われたことは明白である。プラント・オパール分析ではＳＤ５の上層より底面まで大量のイネおよび籾殻、さらにはイネ、籾殻、稲藁のプラント・オパールを含んだ灰層まで検出されており（第Ⅳ章 第３節）、井神祭祀のひとつのあり方として興味深い。なおこの灰層中のイネについては、籾殻、稲藁を伴うことから、稲穂の状態で被熱したものと考えられる。

井戸からの出土遺物中、特記すべきは、ＳＤ５、ＳＤ10 の両方より出土した中国長沙窯の黄釉褐彩貼花人物文水注の破片である（第 83 図 231、第 85 図 237）。ＳＤ５の底面よりは貼花部分を含んだ肩部が、ＳＤ10 の上層よりは褐釉の垂れかかった胴部の一部を含む底部片が出土した。長沙窯の黄釉を施した水注には、貼花を持たずとも褐彩の施された製品も存在するため断定はできないものの、同一個体である可能性は極めて高いと言えよう。

ＳＤ10 における貼花文水注片の出土は埋土中上層であり、井戸廃棄時の埋め戻し行為に伴う井神祭祀の一環として混入されたものと考えられる。一方のＳＤ５においては、この貼花を含む肩部分が、井戸のまさに底面から出土している。また同一層はもとより、他の層においても、この水注の他の部位が出土していないことは、この貼花部分が井戸の底面に意図的に置かれたことを示す。以下は想像に過ぎないが、この水注は井神（水神）の、いわば依り代としての意味を附され、用いられていたものではないだろうか。ＳＤ10 の使用停止時、井神の依り代であった、この水注の一部を埋土中に入れると同時に、新たな井戸ＳＤ５の使用を開始するにあたり、この水注の一部をその底に置くことで、井神の、ＳＤ10 からＳＤ５への「遷座」を意図したのではないだろうか。新たな井戸の底に置かれた破片が、人物ないし神仙をかたどった貼花部分であることも、意図的なものに感じられる。

第５節　古代桜町遺跡の位置づけ

a．古代桜町遺跡の地理

古代の桜町遺跡は宮崎郡に属する。９世紀を中心とする遺跡の年代よりも時代は下るが、12 世紀末から 13 世紀の初頭にかけて成立したと考えられる『宇佐神領大鏡』には、永承年間（1046～53 年）に、国司海為隆により宮崎郡内郡家院の宮崎庄が宇佐宮に寄進されたとの記事、及び宮崎庄中にいくつかの別府が設けられ、同時に宇佐宮に寄進されたとの記事がある。この時、宮崎庄より分出したうちの一つに竹崎という別府があり、現在の宮崎市花ヶ島町、大島町、吉村町に比定されている（竹内編　1986）。これに沿えば、花ヶ島町に所在する桜町遺跡一帯が、この竹崎別府に含まれた可能性は極めて高く、同時に宮崎庄に、果ては郡司の直轄領である郡

家院に含まれていたと言うことができる。これはあくまで 11 世紀代における状況であり、これに遡る史料がないため確実ではないものの、古代桜町遺跡の形成された９世紀から 10 世紀前半においてもまた、郡司直轄領内に位置していた可能性はきわめて高い。なお古代の宮崎郡衙については、宮崎市内で古代瓦の見つかっている数箇所や、円面硯の表採されている宮崎市北ヶ迫遺跡（稲岡編　2000）などが候補として挙げられるが、確定的な比定地は現在までのところ見つかっていない。

道について見てみると、現段階においては、宮崎市域を通る古代官道については、候補がいくつかあり、定まっていない。ただし９世紀前半に官社になったとされる江田神社（宮崎市阿波岐ヶ原町）や、古代瓦の出土している宮崎市猿野遺跡（官道沿いにあったとされる広田駅の比定候補地であると同時に、宮崎郡衙の候補地でもある）、同じく古代瓦が採集された同石神遺跡（石川　1968）を沿線に持つ、現在、山崎街道と呼ばれる第２砂丘上（下田島Ⅱ面上）の道が最有力候補であり、この山崎街道へは、桜町遺跡から、間に第１砂丘を挟んで、直線で東に 1.8km の距離になる。また古代官道を推定する上で有力な指標となる近世街道については、第１砂丘上を通る豊後街道が桜町遺跡から東へ 1.0km、飫肥街道（佐土原往還）である旧国道 10 号線が西へ 0.6km の位置において、それぞれ南北に走っている。つまり桜町遺跡は古代官道候補のいずれにおいても、その沿線と言えるほどには近接していないものの、その利用にあたっては利便性のある立地と言える。

ｂ．古代桜町遺跡の遺構と遺物

古代桜町遺跡周辺の情景は、弥生時代におけるそれと大差ないものであったと思われる。井戸ＳＤ５の埋土や、調査区壁におけるプラント・オパール分析においてはイネが検出されており、古代、遺跡周辺で水田耕作の行われていたことは確実である。つまりは古代桜町遺跡もまた、低地水田地帯中に浮かぶ小さな島のようなものであったと思われる。

桜町遺跡で検出された古代に属するものには、井戸と掘立柱建物、竪穴住居および９世紀から 10 世紀前半に比定される遺物がある。

遺構の配置としては、調査区の南端に２×５間の掘立柱建物ＳＢ５（以下、ＳＢは掘立柱建物を表す）があり、ＳＢ５の北に 18mほどの間隔を置いて、棟方向を同じくする２×５間以上の掘立柱建物ＳＢ４が存在する。このＳＢ４には西に隣接して棟方向を直交させる２×３間のＳＢ３が付随する。ＳＢ３の２ｍ西側には一辺３ｍの小型の竪穴住居（竪穴建物か）ＳＡ１が存在する。これら以外に掘立柱建物が６棟存在するが、棟方向も合致せず、グループ化できるものか否かは判然としない。ＳＢ４をはじめとする一群の西側、斜面および斜面下には井戸ＳＤ10 とＳＤ11 があり、さらに北側 30mほどの位置にも同じく井戸ＳＤ５がある。またＳＢ４をはじめとする一群の西側 20mほどには、幅狭の溝が３条（ＳＥ14～16）、南北に流れる。

遺物のほとんどは井戸からの出土で、多くは土師器坏、椀である。その中において、長沙窯水注片の存在はひときわ目をひく、特異なものである。唐代長沙窯の製品は、東南アジアを始め、中東やアフリカ大陸にまで、広く世界的に流通している。ただし日本における出土は現在までに二十数例であり、輸入陶磁としては稀少なものと言える。分布は京都市と福岡県に偏重

することが指摘されており（三上　1993）、宮崎県内での出土は今回が初の事例となる。

c．古代桜町遺跡の位置づけ

さて、瓦や礎石建物を持たないながらも、長沙窯瓷という稀少な輸入陶磁や、畿内産緑釉陶器などを持つ古代桜町遺跡には、どのような性格、位置付けを考えうるであろうか。

先に述べたとおり、古代桜町遺跡が郡司直轄領の中に位置したのであれば、郡司以外の有力豪族（長沙窯瓷を手に入れうるほどの権勢を持った豪族）の居館という線は薄い。また宮崎庄が成立した 11 世紀以降であれば、荘所という可能性も考えられようが、郡司直轄領としてあったであろう９世紀代においては、当然、検討の余地はない。掘立柱建物の配置や、礎石、瓦の欠如することなどから、寺社という可能性も低い。また駅家という可能性については、推定される古代官道に遠すぎること、瓦の欠如することなどから、やはり可能性は低いだろう。

残る可能性は郡衙関連遺跡としての位置づけである。郡司という存在を介して考えれば、長沙窯瓷や緑釉陶器の存在は理解しやすい。日本における長沙窯の製品は、平安京跡や、大陸への窓口であった福岡県地域での出土が多く、今回出土した資料についても、桜町遺跡を形成した人々、ないし古代日向国が、中国との直接交渉によって手に入れたものと考えるよりは、西海道の基点であった大宰府などから、二次的に搬入されたものと理解する方が自然であろう。当時の九州、西海道諸国における郡司の実質的任命権は大宰府が有しており、そのために国司の仲介なしに、大宰府と郡司が直接交渉を持つことも少なくなかったようである（宮崎県　1998）。この大宰府と郡司との関係の上で、「郡衙関連施設」であった桜町遺跡へ、長沙窯瓷が二次的に搬入されたと解釈することは不可能ではない。また桜町遺跡においては瓦の検出が皆無であったことについても、郡庁は瓦を持たない場合があり、矛盾はない。

以上を総合すると、正倉を持った郡衙別院ないし郡の正倉別院という可能性が一番高いように思われる。建物の配置として明確な主殿、脇殿の別が見出し難く、また脇殿（長屋）や柵列、溝等によって構成される方形の区画や囲繞施設がないため、郡衙そのものとは考え難い。また郡印はもとより、瓦や木簡、硯等の出土が皆無であることも、積極的に郡衙そのものと評価し得ない要因である。ただし郡司直轄領内に位置し、大宰府から搬入されたであろう長沙窯瓷を持つという２つの事柄は、郡司の存在を想定しなければ解釈のしようがない。また総柱の建物が検出されていないため、遺構からは正倉の存在を立証できないものの、井戸中より大量の稲穂が燃された灰層が検出されている。古代、租の収納は稲穂ないし稲籾の状態でなされることが一般的であったため、稲穂の存在は遺跡内において貯蔵のなされていたことの証左と言え、なかんずく貯蔵施設たる正倉の存在が連想される。なお郡衙跡においては、正倉への放火およびそれに起因する炭化米の出土する例が多々あり、郡衙遺構検出のひとつの指標ともなっている（山中編　2004）。桜町遺跡において検出された井戸中の稲穂の灰層は、井神祭祀のために生成されたものであるとは思うが、あるいは官衙遺跡に見つかる炭化米に類したものである可能性も、完全には否定しうるものではない。

水田地帯中の微高地で、推定される古代官道と、そう遠くない位置にあることも、租の収散を担う郡衙関係施設と考えるに適している。調査区西端において検出された数条の幅狭の溝以

外、郡衙関係施設につきものの、柵列や脇殿によって構成される明確な周囲からの隔絶施設を伴わないことが不自然ではあるが、水田地帯中に浮かぶ小島のような微高地という立地そのものが、すでに周囲から隔絶された環境にあると言え、環境条件をもって、これに換えたと解釈したい。

以上、本質的には何一つ明確な根拠のない想定ではあるが、古代桜町遺跡は宮崎郡の郡衙別院ないし正倉別院であった可能性を考えたい。今回の調査はあくまで遺跡の南半部のみでのことであり、将来、北半部分の調査が行われるようなことがあれば、この空想を裏付けるものの検出されることを期待したい。

【参考文献】

石川悦雄　1984「宮崎平野における弥生土器編年試案－素描（Mk.Ⅱ）」『宮崎考古』第９号

石川恒太郎　1968『宮崎県の考古学』吉川弘文館

稲岡洋道編　2000『北ヶ迫遺跡』宮崎市文化財調査報告書第43集

岡本淳一郎　1998「弥生時代周溝遺構に関する一考察」『紀要　富山考古学研究』創刊号　財団法人富山県文化振興財団 埋蔵文化財調査事務所

鬼塚久美子　1997「宮崎平野の古代交通路に関する予察」『宮崎県史研究』第11号　宮崎県

周世栄・周聡著 福田伸男訳　2005『長沙窯瓷　鑑賞と鑑定』中国名窯名瓷シリーズ⑤　二玄社

竹内理三編　1986『角川日本地名大辞典』45宮崎県　角川書店

外山隆之・原田亜紀子　2004「都城市における中世掘立柱建物跡の類型化」『宮崎考古』第19号　宮崎考古学会

永山修一　2001「日向国府の成立と展開」（吉本正典編『寺崎遺跡―日向国庁を含む官衙遺跡―』国衙跡保存整備基礎調査報告書　宮崎県教育委員会）

中山豪・鳥枝誠編　1996『猿野遺跡・萩崎第２遺跡』宮崎市教育委員会

長谷部楽爾・今井敦編　1995『日本出土の中国陶磁』中国の陶磁12　平凡社

松永幸寿　2004「日向における古式土師器の成立と展開－宮崎平野部を中心して－」『西南四国―九州間の交流に関する考古学的研究』平成14年度～平成15年度科学研究費補助金（基礎研究（C）（１））

三上次男　1993「長沙銅官窯磁―その貿易陶磁的性格と陶磁貿易」『貿易陶磁―奈良・平安の中国陶磁―』奈良県立橿原考古学研究所付属博物館

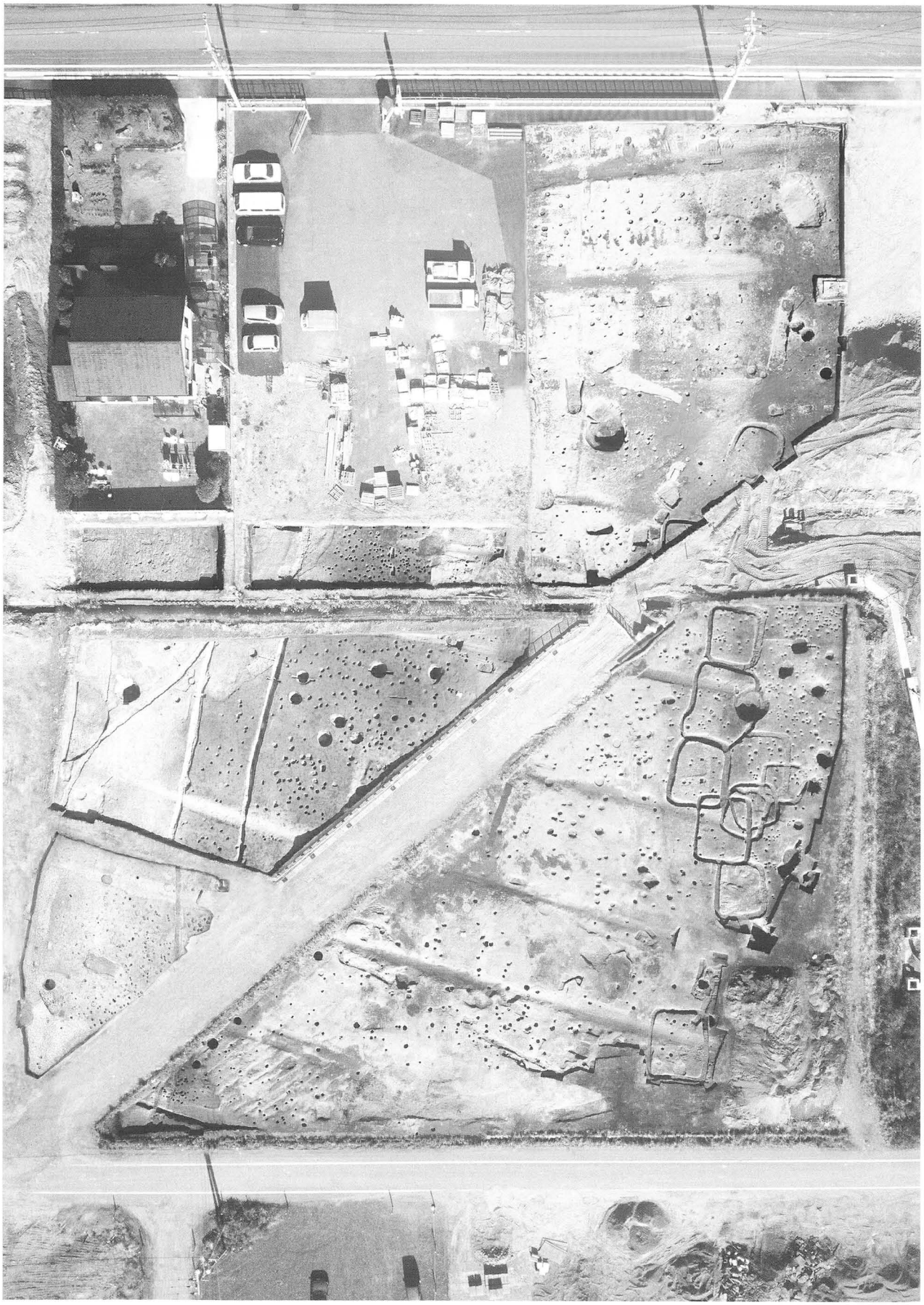
宮崎県　1998『宮崎県史』通史編 古代２

宮崎県教育委員会編　1979『「歴史の道」調査報告書』宮崎県文化課

山中悦雄　1982「宮崎平野における弥生土器編年試案」『宮崎県総合博物館研究紀要』第８輯　宮崎県総合博物館

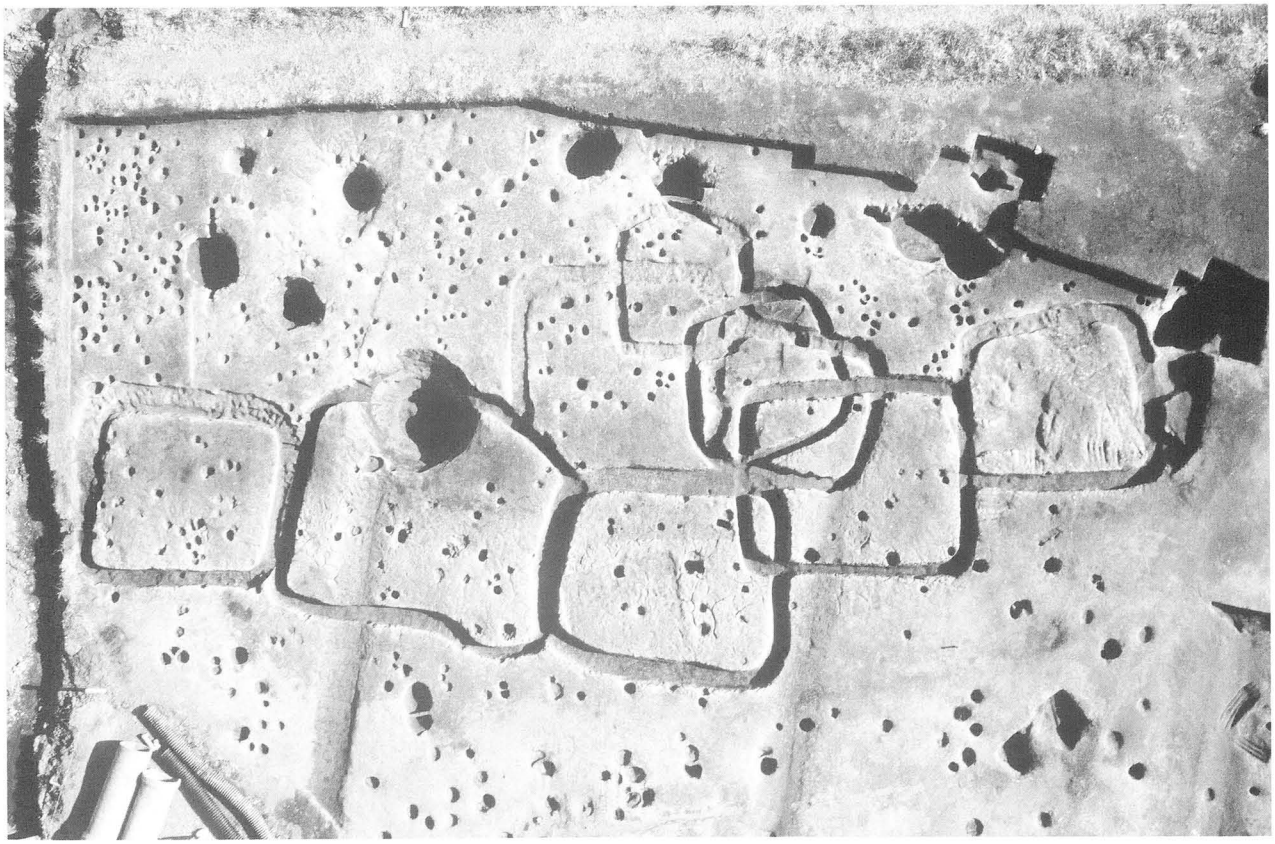
山中敏史編　2004『古代の官衙遺跡』Ⅱ遺物・遺跡編　独立行政法人 文化財研究所 奈良文化財研究所

図版１　遺跡遠景（Ｃ区調査時　※画面奥は日向灘）



図版２　調査区全体（合成写真　※画面上が北）

図版３　包含層遺物出土状況



図版４　周溝状遺構群（SL3～11）完堀状況（画面左が北）

図版５　SL１（1号周溝状遺構）検出状況

図版６　SL１（1号周溝状遺構）完堀状況

図版７　SL2（2号周溝状遺構）遺物出土状況

図版８　SL2（2号周溝状遺構）完堀状況

図版９　SL3～11（3～11号周溝状遺構）検出状況

図版10　SL3～11（3～11号周溝状遺構）完堀状況

図版11　SL3（3号周溝状遺構）遺物出土状況

図版12　SL7（7号周溝状遺構）検出状況

図版13　SL8（8号周溝状遺構）遺物出土状況

図版14　SL8（8号周溝状遺構）完堀状況

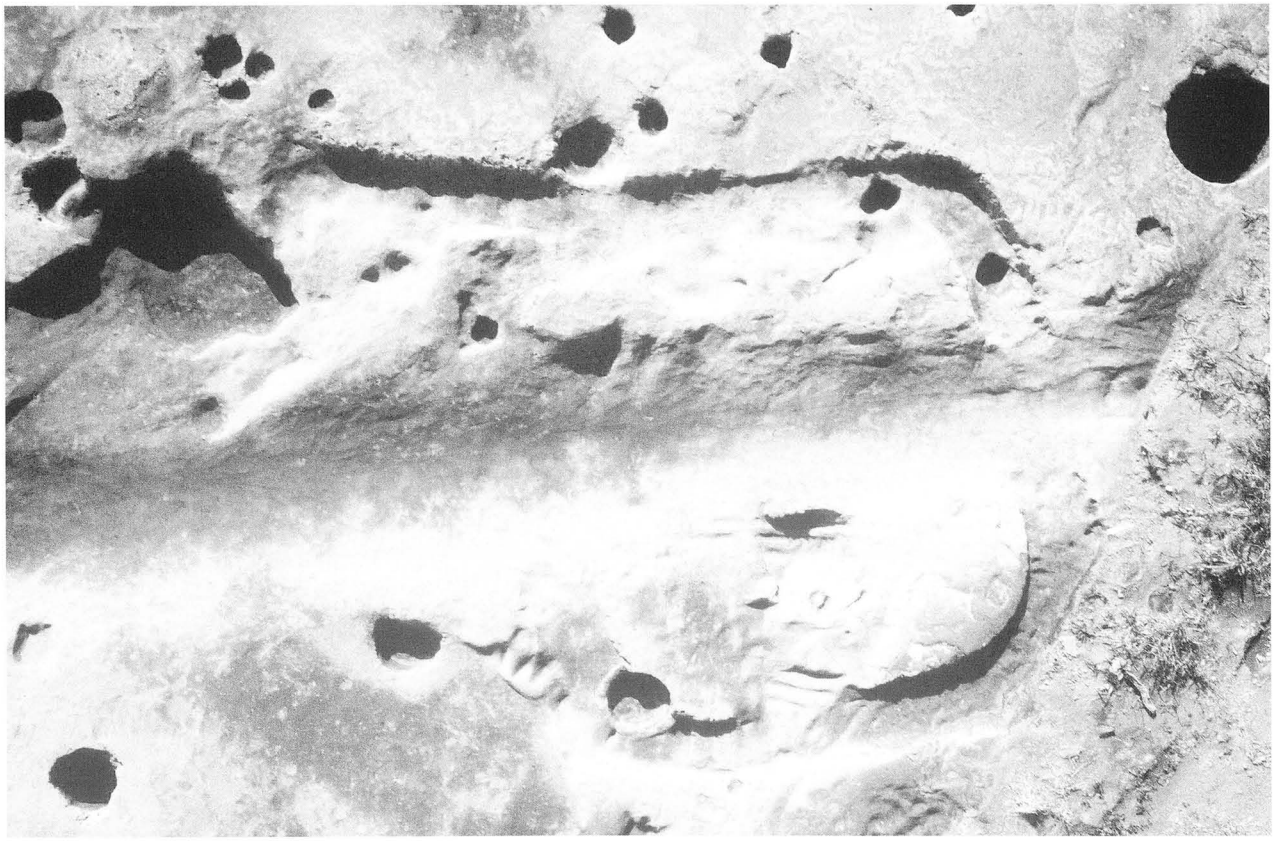
図版15　SL10（10号周溝状遺構）遺物出土状況

図版16　SL11（11号周溝状遺構）遺物出土状況

図版17　SL12（12号周溝状遺構）遺物出土状況

図版18　SL12（12号周溝状遺構）完堀状況

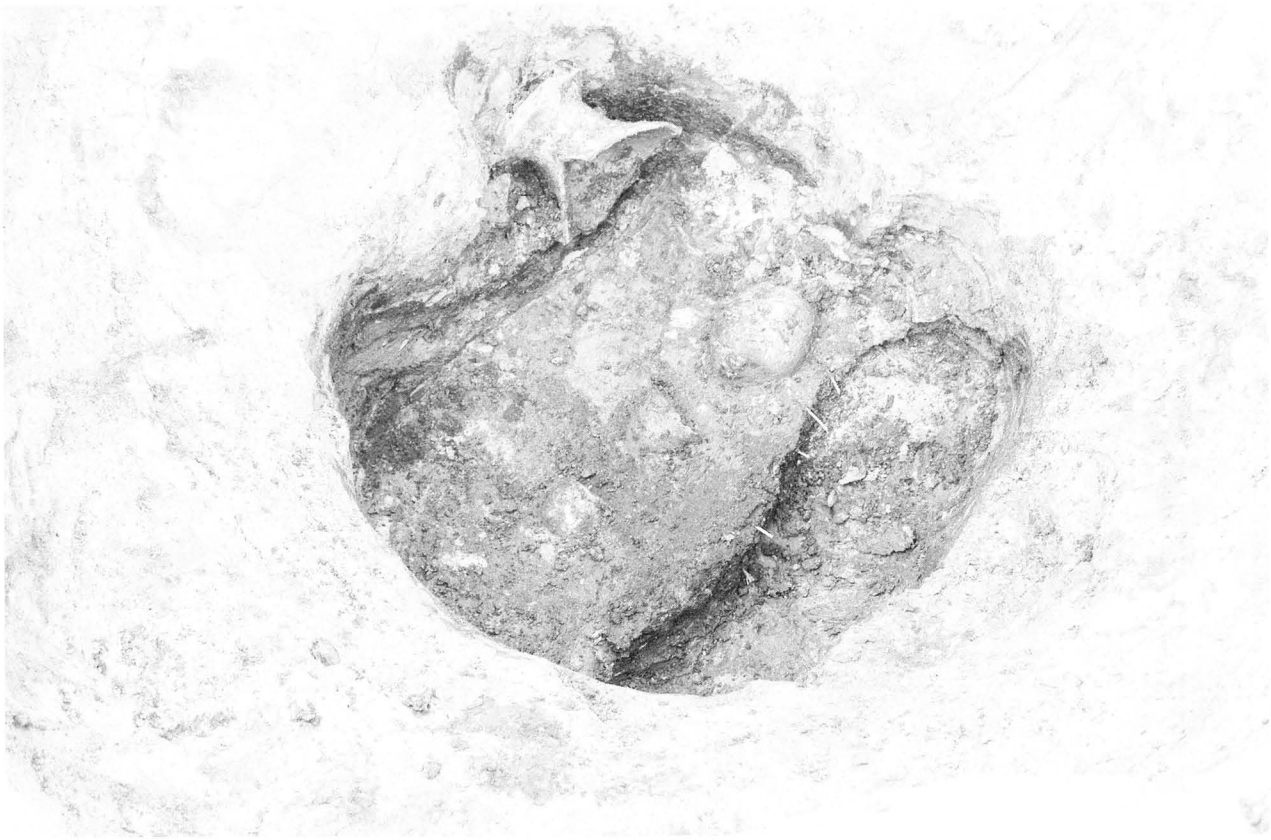
図版19　SL13（13号周溝状遺構）検出状況



図版20　SL13（13号周溝状遺構）完堀状況

図版21　SD1（1号土抗）半裁状況

図版22　SD5（5号土抗　古代井戸）半裁状況



図版23　SD7（7号土抗）遺物出土状況

図版24　SD9（9号土抗）遺物出土状況

図版25　SD10（10号土抗　古代井戸）高師小僧検出状況

図版26　SD10（10号土抗　古代井戸）完堀状況

図版27　SD11（11号土抗）半裁状況

図版28　SD14（14号土抗）半裁状況

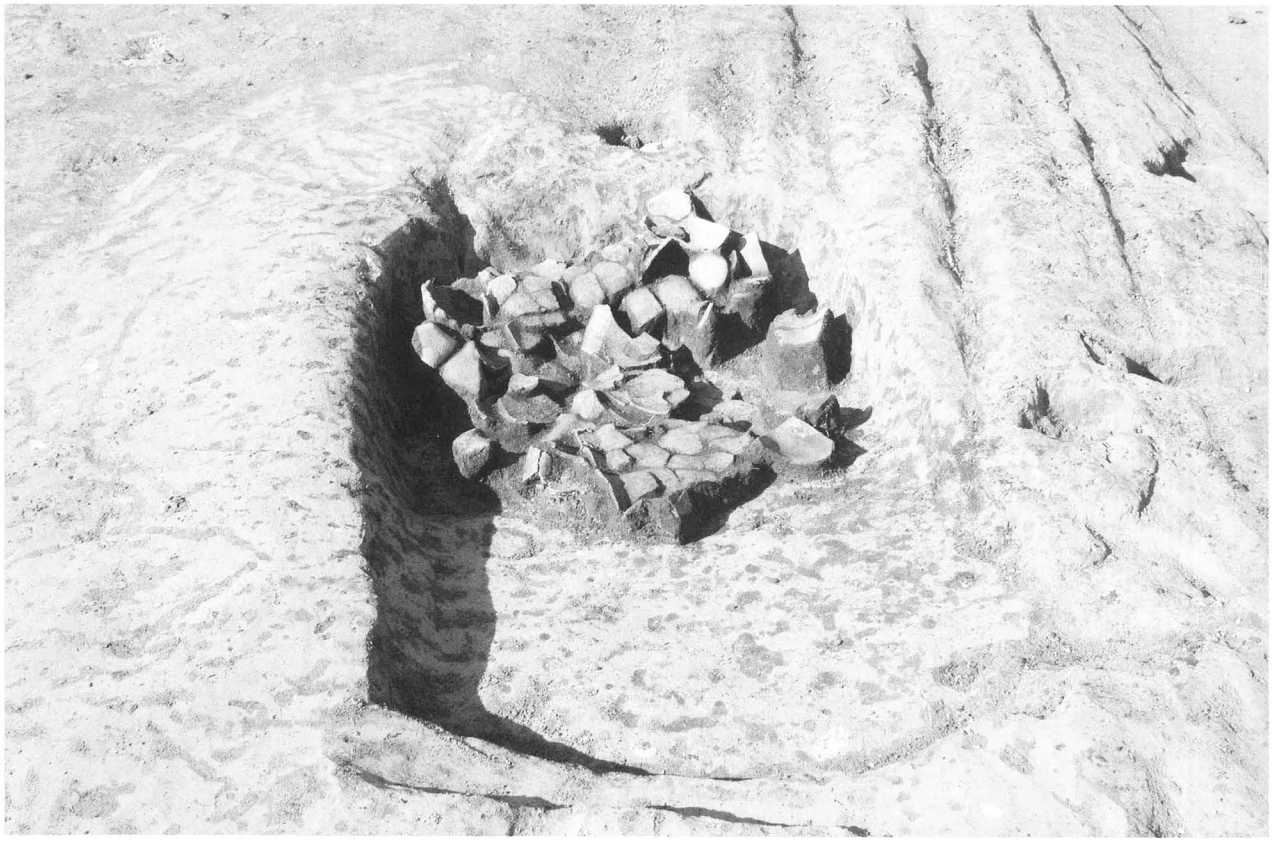
図版29　SD18（18号土抗）半裁状況

図版30　SD20（20号土抗）半裁状況

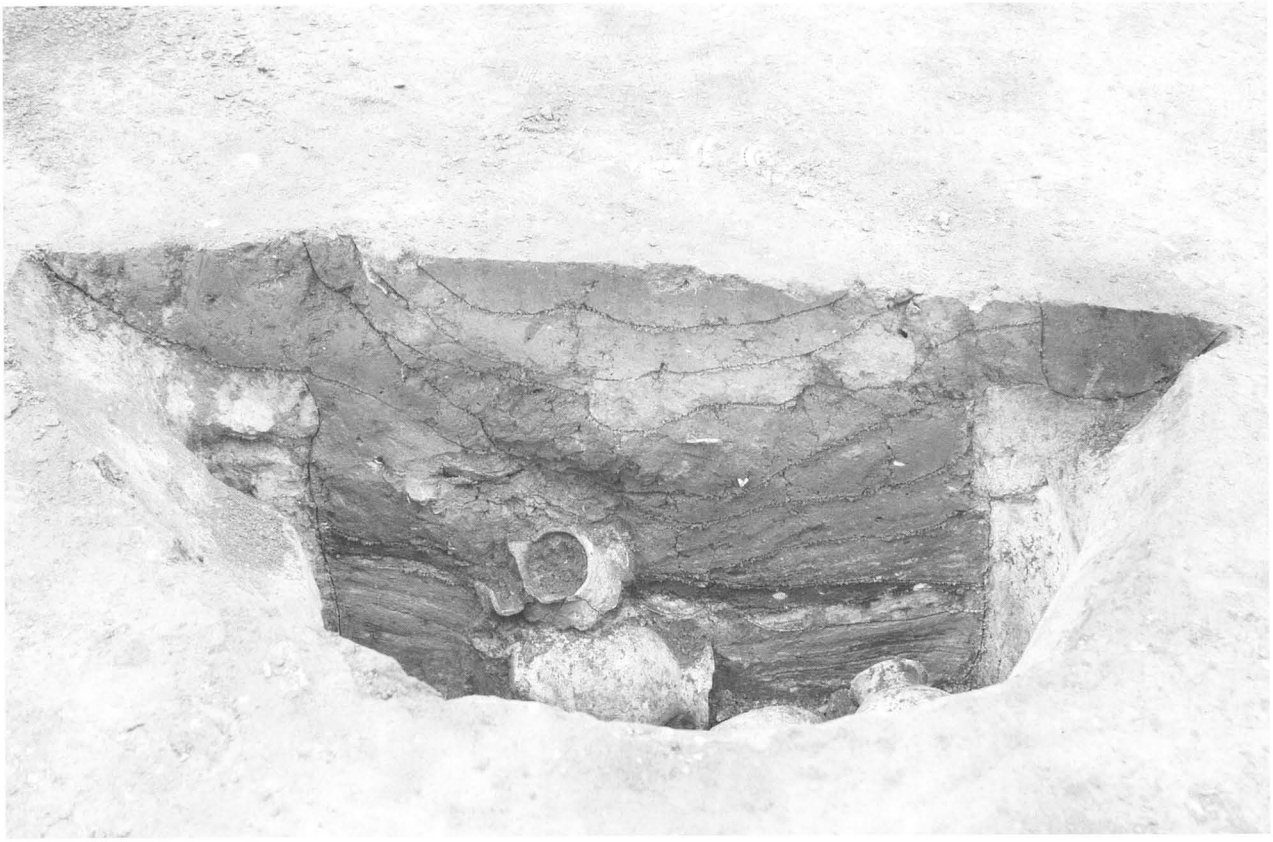
図版31　SD21（21号土抗）遺物出土状況

図版32　SD25（25号土抗　古代井戸）完堀状況

図版33　SD28（28号土抗）遺物出土状況



図版34　SD31（31号土抗）遺物出土状況



図版35　SD33（33号土抗）半裁状況

図版36　SD34（34号土抗）半裁状況

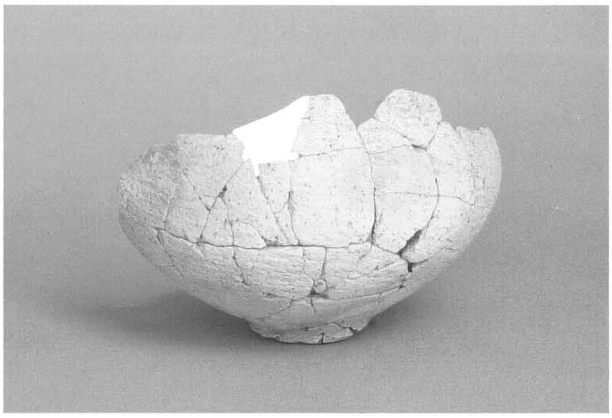
図版37　SD43（43号土抗）遺物出土状況

図版38　SD46（46号土抗）遺物出土状況

図版39　SA1（1号竪穴住居）検出状況

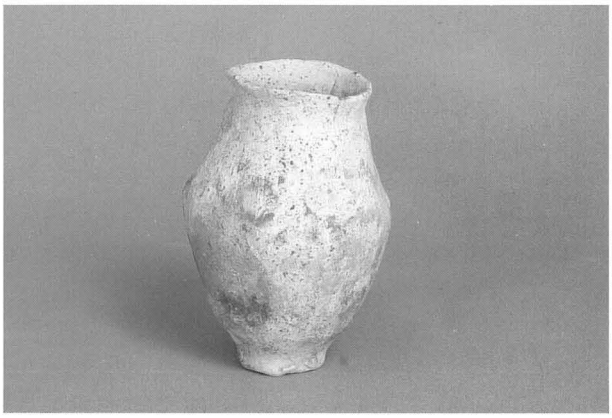
図版40　SE7（7号溝状遺構）完堀状況

図版41　SL1（1号周溝状遺構）出土土器（第8図3）

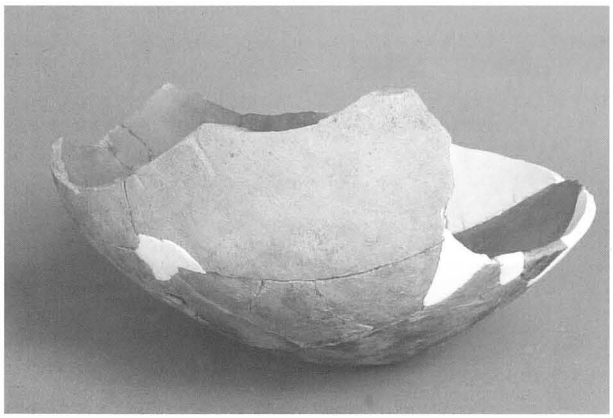


図版42　SL1（1号周溝状遺構）出土土器（第8図4）

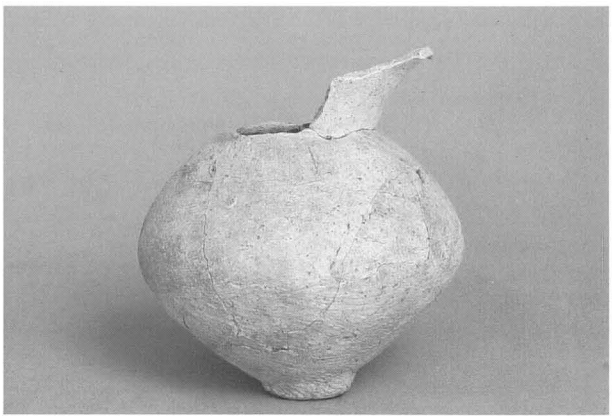
図版43　SL2（2号周溝状遺構）出土土器（第10図6）



図版44　SL2（2号周溝状遺構）出土土器（第10図7）

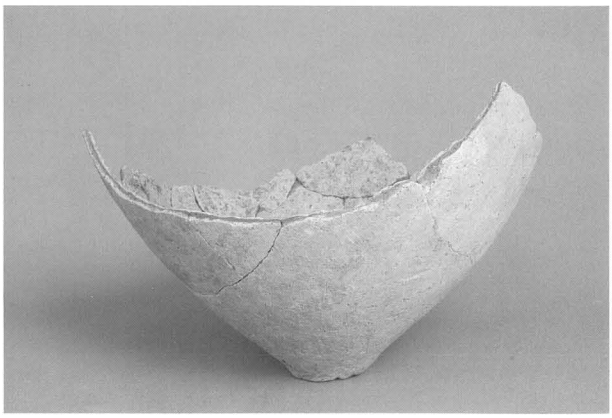


図版45　SL2（2号周溝状遺構）出土土器（第10図8）

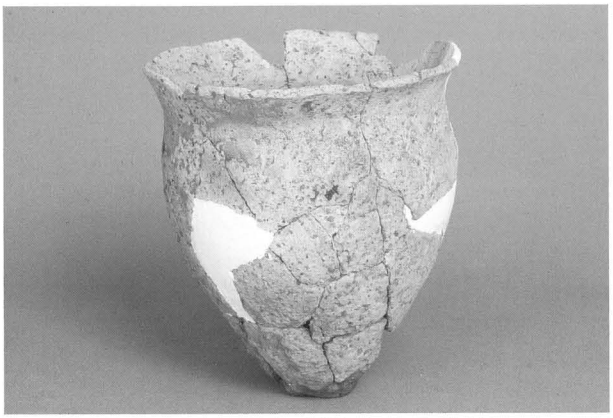


図版46　SL2（2号周溝状遺構）出土土器（第10図9）

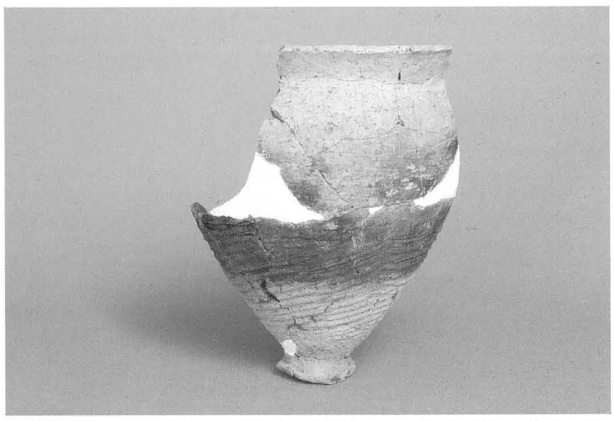
図版47　SL2（2号周溝状遺構）出土土器（第10図10）



図版48　SL2（2号周溝状遺構）出土土器（第10図11）

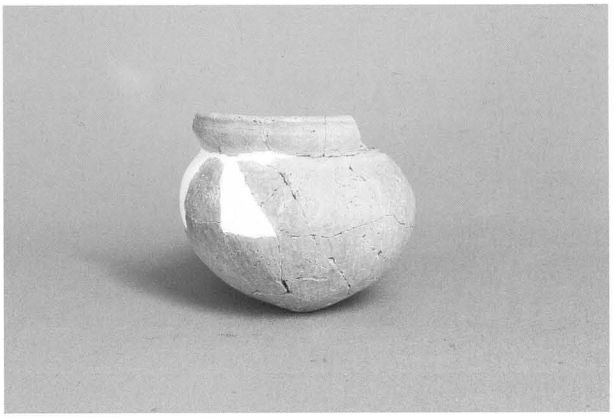


図版49　SL3（3号周溝状遺構）出土土器（第12図13）

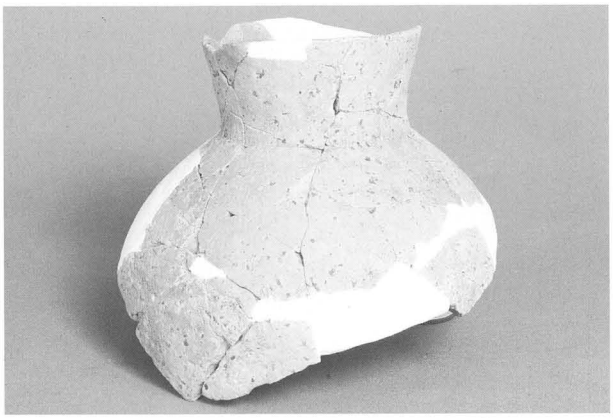


図版50　SL3（3号周溝状遺構）出土土器（第12図14）

図版51　SL3（3号周溝状遺構）出土土器（第12図20）

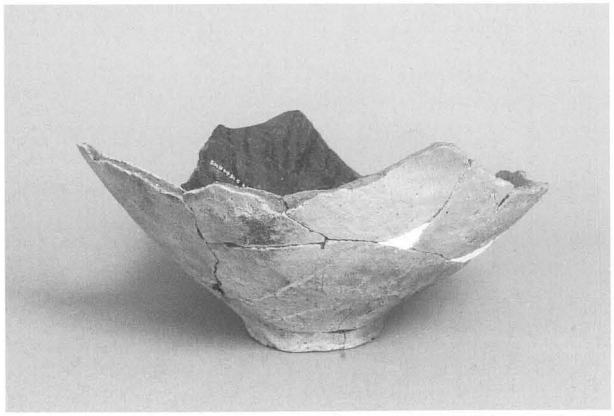


図版52　SL3（3号周溝状遺構）出土土器（第13図22）

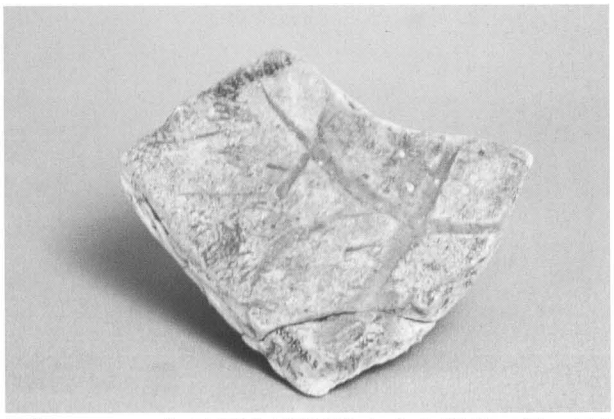


図版53　SL3（3号周溝状遺構）出土土器（第13図23）

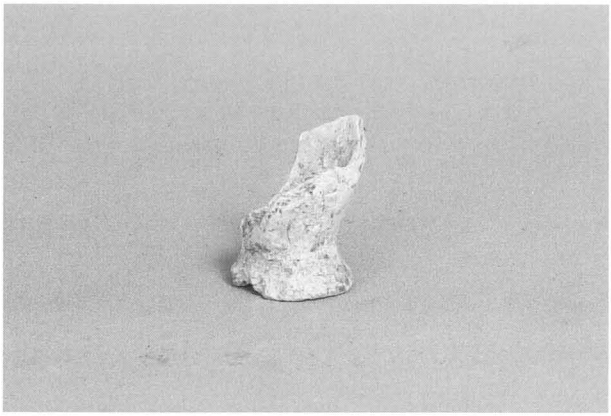
図版54　SL3（3号周溝状遺構）出土土器（第13図25）



図版55　SL3（3号周溝状遺構）出土土器（第13図26）

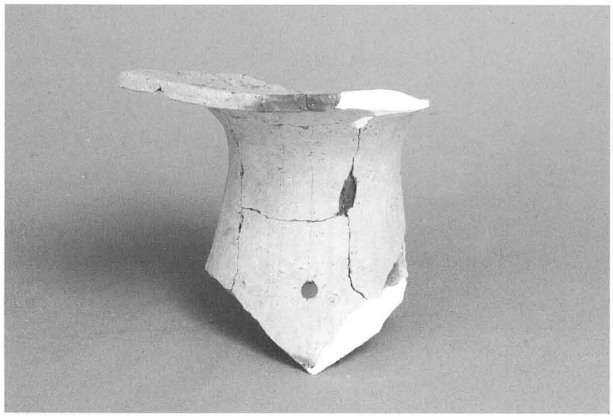


図版56　SL3（3号周溝状遺構）出土土器（第13図27 ※内面）



図版57　SL3（3号周溝状遺構）出土土器（第13図28）

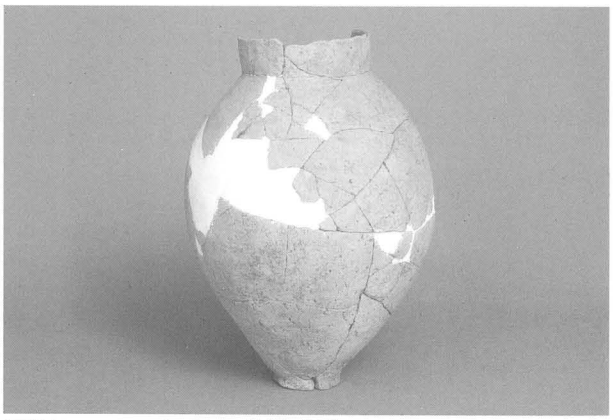
図版58　SL3（3号周溝状遺構）出土土器（第13図29）



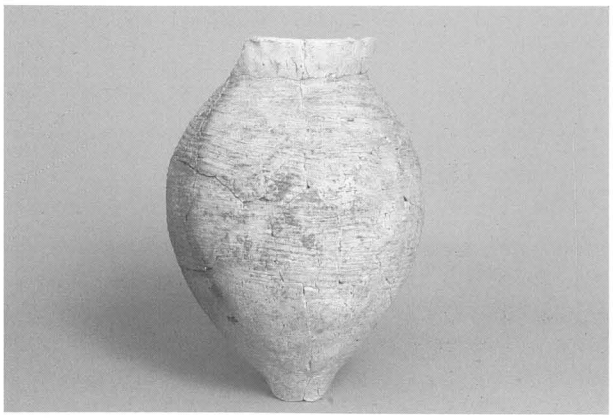
図版59　SL3（3号周溝状遺構）出土土器（第13図30）

図版60　SL4（4号周溝状遺構）出土土器（第15図31）

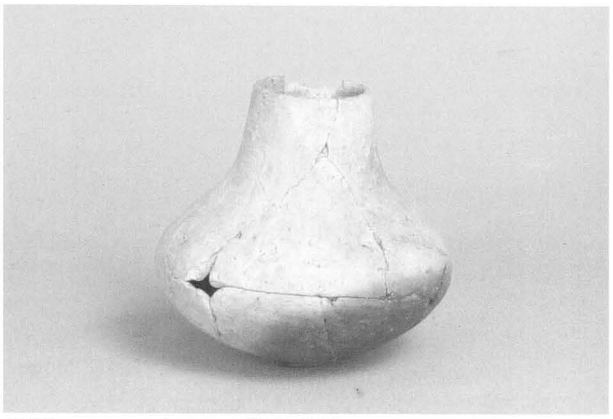
図版61　SL4（4号周溝状遺構）出土土器（第15図34）



図版62　SL4（4号周溝状遺構）出土土器（第15図35）

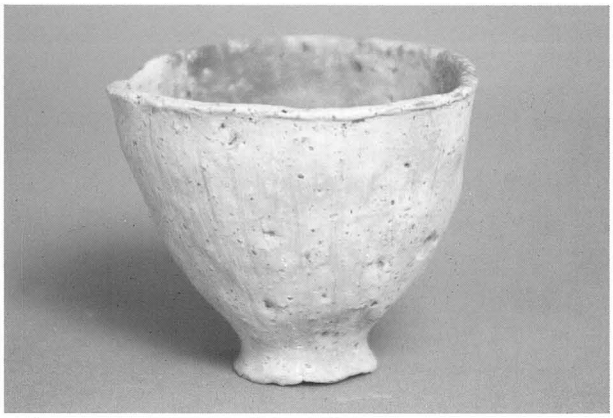


図版63　SL4（4号周溝状遺構）出土土器（第15図36）



図版64　SL4（4号周溝状遺構）出土土器（第15図38）

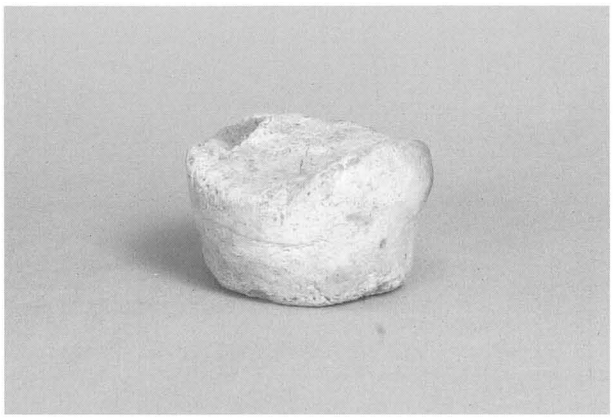
図版65　SL4（4号周溝状遺構）出土土器（第15図39）



図版66　SL4（4号周溝状遺構）出土土器（第15図41）

図版67　SL4（4号周溝状遺構）出土土器（第15図43）

図版68　SL4（4号周溝状遺構）出土土器（第15図44）



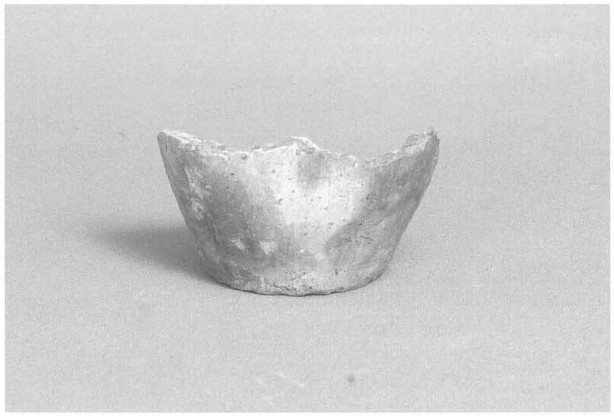
図版69　SL4（4号周溝状遺構）出土土製品（第16図45）

図版70　SL5（5号周溝状遺構）出土土器（第18図47）

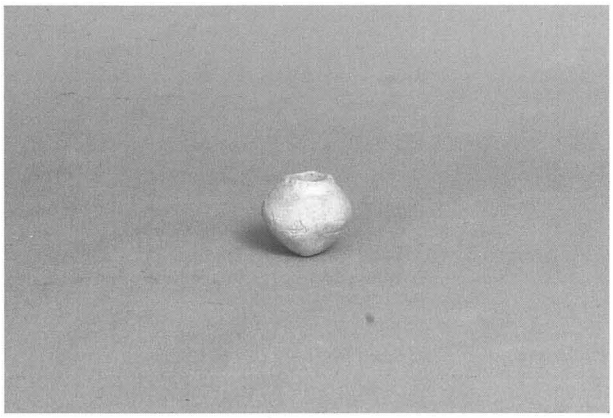
図版71　SL5（5号周溝状遺構）出土土器（第18図49）

図版72　SL6（6号周溝状遺構）出土土器（第20図54）

図版73　SL6(6号周溝状遺構)出土土器(第20図55)

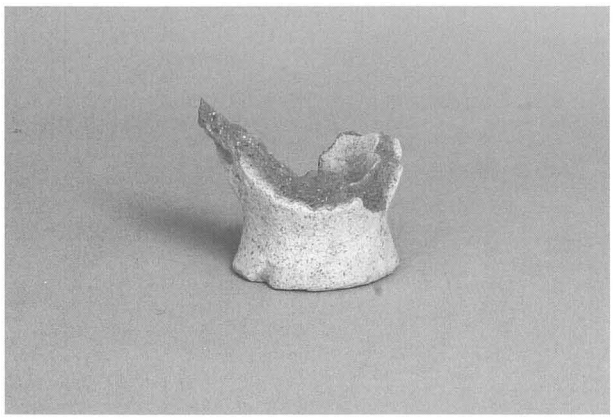


図版74　SL6(6号周溝状遺構)出土土器(第20図56)



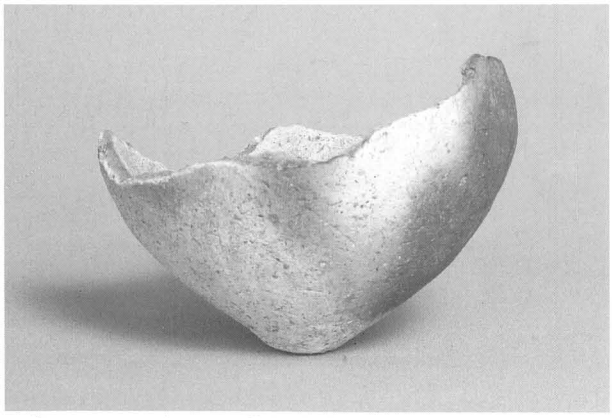
図版75　SL6(6号周溝状遺構)出土土製品(第20図57)

図版76　SL7(7号周溝状遺構)出土土器(第21図60)

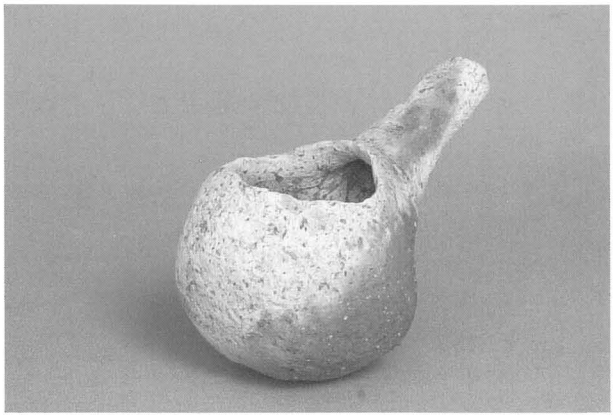


図版77　SL8(8号周溝状遺構)出土土器(第23図61)

図版78　SL8(8号周溝状遺構)出土土器(第23図63)



図版79　SL8(8号周溝状遺構)出土土器(第23図64)

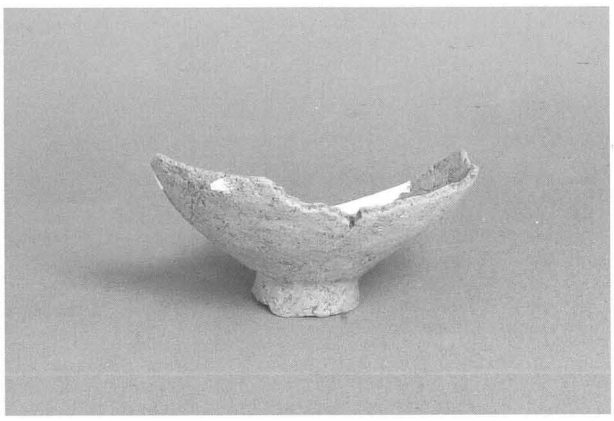


図版80　SL8(8号周溝状遺構)出土土器(第23図65)

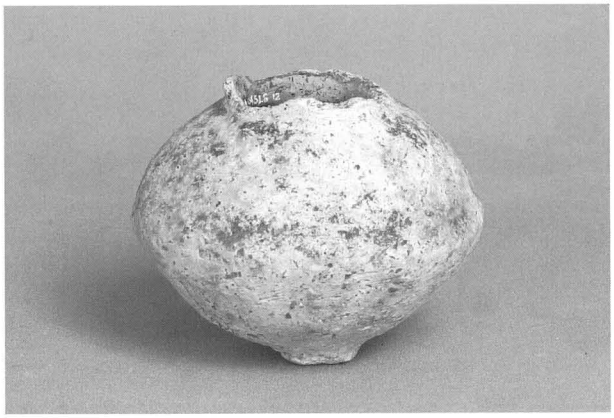
図版81　SL9（9号周溝状遺構）出土土器（第25図69）

図版82　SL9（9号周溝状遺構）出土土器（第25図70）

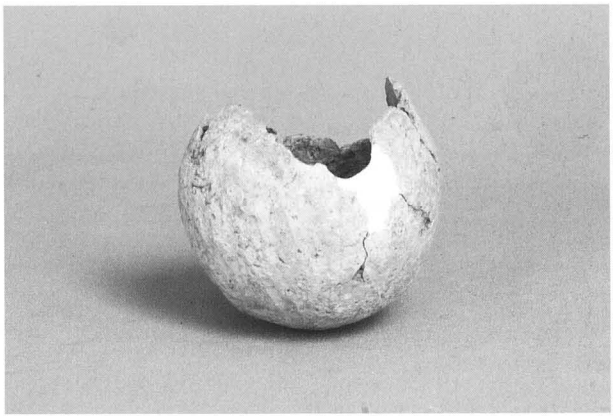
図版83　SL9（9号周溝状遺構）出土土器（第25図71）



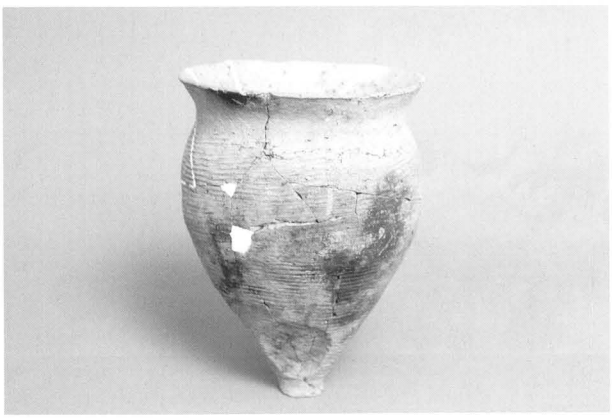
図版84　SL9（9号周溝状遺構）出土土器（第25図72）



図版85　SL9（9号周溝状遺構）出土土器（第25図73）

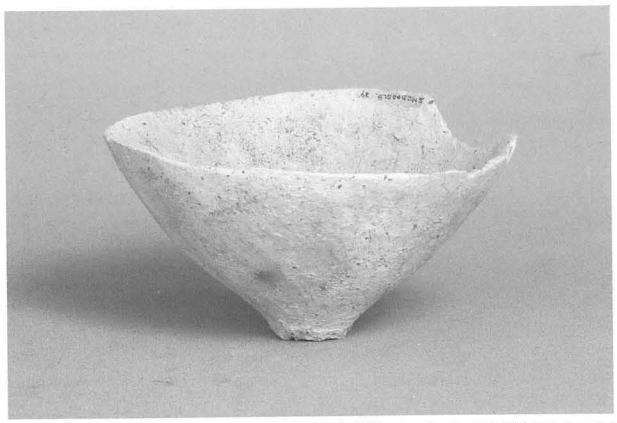


図版86　SL9（9号周溝状遺構）出土土器（第25図74）

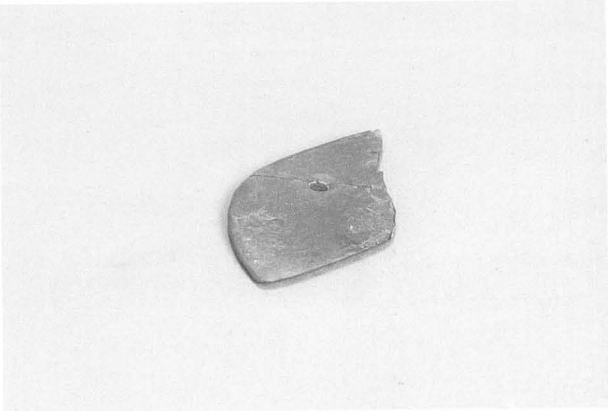


図版87　SL10（10号周溝状遺構）出土土器（第27図75）

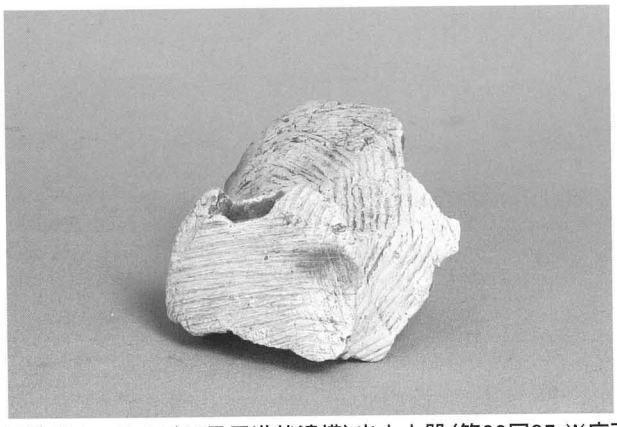
図版88　SL10（10号周溝状遺構）出土土器（第27図79）



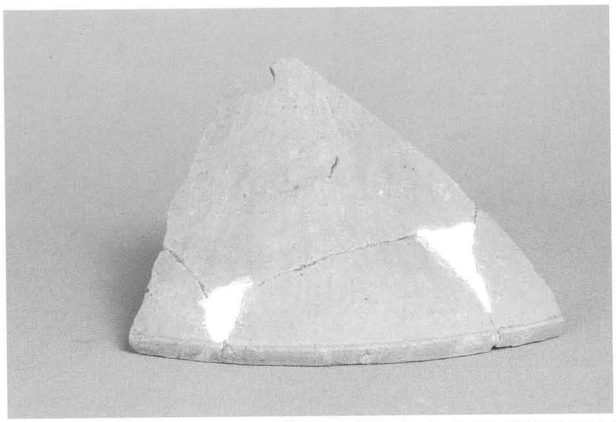
図版89　SL10（10号周溝状遺構）出土土器（第27図80）



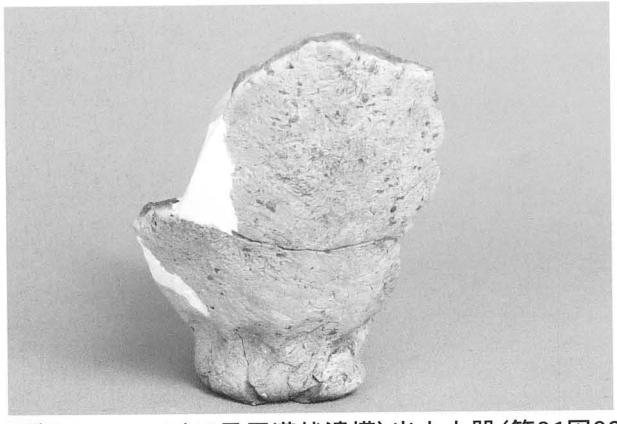
図版90　SL10（10号周溝状遺構）出土石製品（第27図81）



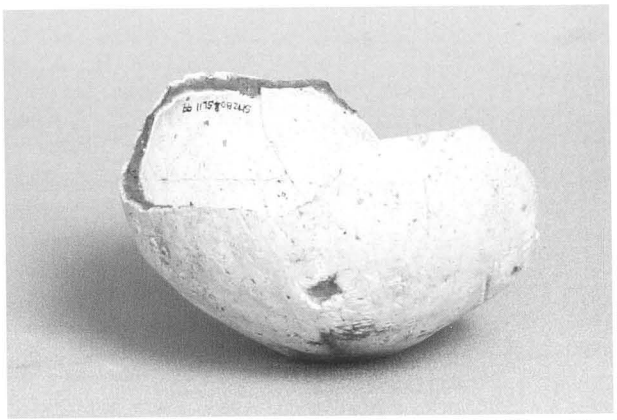
図版91　SL11（11号周溝状遺構）出土土器（第29図85 ※底面）



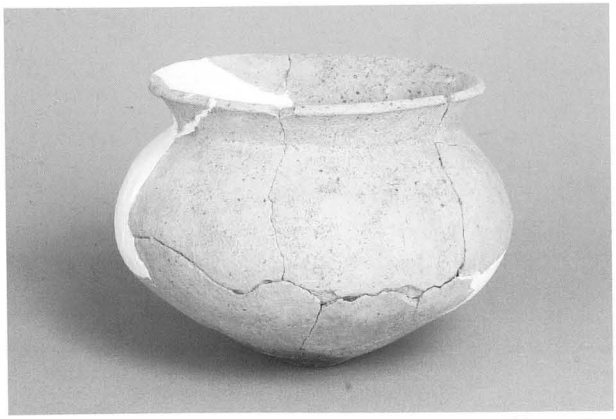
図版92　SL11（11号周溝状遺構）出土土器（第29図88）



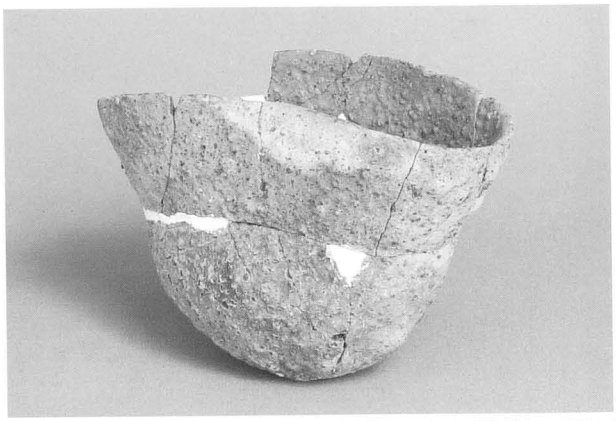
図版93　SL12（12号周溝状遺構）出土土器（第31図90）



図版94　SL12（12号周溝状遺構）出土土器（第31図91）



図版95　SL12（12号周溝状遺構）出土土器（第31図92）



図版96　SL12（12号周溝状遺構）出土土器（第31図93）